

トウホウ・クロウサギ

ダラ毛虫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私の姉は素兎

それは兎も角お酒が飲みたい

※他の二次創作様とネタが被っている点もありますが、ご了承ください。
さい。

【追記】

クロスオーバータグ頂いていますが、Fateネタが番外編に混じっている程度ですので、そちらを期待された方は申し訳ありません。

目次

第1部：古代く花映塚

第兎話 1

第蛙話 8

第鬼話 15

第幻話 21

第厄話 27

第霧話 34

第花話 42

第桜話 50

第巫話 56

第萃話 66

第月話 76

第判話 87

他キャラ視点及びオマケ等

トウホウ・クロカラス 上 93

トウホウ・クロカラス 中 101

トウホウ・クロカラス 幕間 111

トウホウ・クロカラス 下の前編 117

フェイト・クロウサギ 124

トウホウ・アカアクマ 135

トウホウ・アカイスズ 147

第2部：風神録く地霊殿

第風話 153

トウホウ・ホウキボシ 160

第宴話

トウホウ・タタリガミ

トウホウ・アキノカミ 姉

トウホウ・シゴクイロ

トウホウ・フシノヒト

番外編：トウホウ・ダイヤモンド

トウホウ・キンギツネ

第緋話

トウホウ・アキノカミ 妹

第彗話

トウホウ・ミダレガミ

第地話

時系列順不同

第末話

第闇話

フェイト・クロウサギ：第4次聖杯戦争編①

トウホウ・クロカラス 下の後編

フェイト・クロウサギ：第4次聖杯戦争編②

トウホウ・カゼホウリ

トウホウ・ナガシビナ

第里話

トウホウ・ヤクサイノ

フェイト・クロウサギ：第4次聖杯戦争編③

第災話

番外編：続トウホウ・ダイヤモンド序文

317

310

306

302

296

293

286

278

272

266

262

258

252

240

234

227

219

211

205

197

189

183

175

167

第1部：古代く花映塚 第兎話

生まれ直した世界で私は、因幡てると出会った。

「クロー、クローヤーい、居んだろー」

「……はいはい、お呼びかい。」

まったく、白兎の主ともあろうお方が、供も付けずに出歩くものではないよ」

いや、出会った、と言うのは語弊があるか。

「おやおやまあまあ。」

互いに無二の肉親に、随分と冷たい物言いだこと」

「親（チカシ）い間柄だからこそさ、姉様よ」

にししと笑う彼女と私は、生まれた時から一緒だった。

転生の神様とやらに出会った覚えは無いが、気付けば私は雌兎になっっていた。

それも、後になって知ったところでは、遙か昔の神話の時代にだ。

訳が分からないながら、先ずは生きることにした。

死んでしまっただけにもならない。

前世で死んでしまったことを、思い悩んでも仕方が無い。

自覚していた以上に、割り切ることが得意なのか。

はたまた、兎になってから、悩む脳が無くなったのか。

とにかく兎に角、私は生きることにした。

性別の変化は、意外と気にならない。別に、兎の雌雄で騒ぐことも無いだろう。

己を兎と理解してから1年。

白い毛並みの両親と、同じく真っ白な兄弟姉妹、群の同族もまた白色。

私だけが黒かった。新月のように真っ黒だ。

加えて、元は人間であるとの意識からか、どうにも私は兎らしくなかつた。

群の者達から疎遠にされるのも、まあ当然の帰結だろう。

はぐれ者となつた私だが、姉、後の因幡てゐだけは、しばしば私に近寄つた。

残念ながら、純粹な情では無い。かと言って、純粹な打算でも無いが。

この姉は、色々と面倒な気質なのだ。

話が逸れた。姉が私を構つた主な理由についてだ。

不思議と私は、危険を察知できた。

野性の勘、とかで無く、食べると不味い物、近付くと不味い場所を、事前に知れた。

これが後々、私の『能力』となるのだが、今は置こう。

姉が私に近寄つたのは、この危機察知が目当てだ。

少なくとも、姉自身はそう言っていた。

姉は筋金入りの嘘つきなので、それだけが理由では無いだろうが。

新しく見る草木、広げる縄張り、そう言つた物の危険性を、姉は私に尋ねた。

私は答え、姉は従い、そして姉は、群の長になつた。

利用されたとも言えるが、姉が長として庇うおかげで、私の暮らしも楽になつた。

まあ、私には群を率いるつもりは無いし、拘ることも無いだろう。

そんなこんなで、安全を確保しつつ、姉と私は随分と生きた。

数十年だか百年以上だか、兎の頭では思い出せない。

正直、のんびり草やら実やらを食んでいたら、時間が流れていた。

兎の寿命では無いな、と思いつつ、生きていられるのならそれで良し。

そして、転機は唐突に。

私の黒毛が、総毛立つた。

高い場所へ行け、もつと高い場所へ走れ、早く早く早く。

慣れ親しんだ危機察知が、過去最大の警鐘を鳴らす。すぐさま、姉に伝えた。

しかし、姉は群の長。

群をまとめ、高台へ導く立場。

私は、避難場所の確保と嘯いて、自分だけが丘の上。

安全地帯に私だけ。

眼下で、群が、姉が、洪水に飲まれていった。

私だけが助かった。

水が引き、駆けずり回って見付けた姉は、見るも無惨な有り様だった。

島に流され、鮫を足場に海を渡ったものの、謀ったとして皮を剥がれたと言う。

私の前世で言うところの、因幡の素兎の逸話だ。

もともと、重傷の姉を見た私に、そんなことを考える余裕など無かったが。

治療の心得など無く、誰かに助けを求めようと、半狂乱で駆け出した。

途中、大勢の男達が我先にとどこかへ向かっていたが、何か嫌な感じがしたので無視した。

続いて、袋を担いだ男を見付け、危機察知が反応しないことから、彼に声をかけた。

どうか姉を救ってほしい、と。

このお方こそ、ダイコク様、大国主神様だった。

我ながら、とんでもないお偉い様に直訴したものだ。

改めて考えると、少々背筋が冷えるが、おかげで姉は助かった。

何やら、私が無視した集団に嘘の治療法を教えられたらしく、傷が悪化していたが。

あの連中、追い掛けて殴ってやれば良かった。私では返り討ちだとしても。

そんなことより、姉の話だ。

ダイコク様に救われたことによるものか、傷が癒えた姉には、不思議

議な力が備わった。

人間を幸運にする程度の能力、だ。

神であるダイコク様が『人間』に分類されるかはともかく、姉が初めて能力を使ったのは、この時だ。

古事記に書かれる、嫁取りの予言。

こうして、姉は伝説となった。比喻抜きで。

神と関わった私達姉妹は、ますます普通の兎から外れた。

既に百年前後は生きた兎のことを、普通と呼ぶかはともかくとして。

ダイコク様と出会って数年、或いは十数年、私達は、人間の姿を得た。

姉が前世の知識にあるキャラクターと同じ存在であると知ったのは、この時だ。

因幡の素兎だとは気付いていたが、よもや、ここがゲームの世界だったとは。

まあ、既に前世の数倍は生きた世界が何だろうと、むしろ前世が夢か何かに思えるが。

つまり、大したことでは無かった。

人型になり、改めて性別が変わったことを意識したが、それもそうかと受け入れた。

私の割り切りは健在である。

なお、姉は『因幡てゐ』そのものだったが、私は色違いだった。

姉妹なので、顔は瓜二つ。髪も瞳も肌も同じ色。ただ、服と兎の耳と尾だけは真っ黒だ。

姉は相変わらず、生き残った兎を集めて長を勤めているので、見分けには便利だ。

そして、私は群から距離を取った。

人型になり、前より1人で生きていくのに不自由しなくなったことも、理由の1つ。

だが、それ以上に、私の『能力』が問題だった。

姉のように、無害どころか有益かつ制御できる物なら良かった。しかし、残念ながら、私のそれは、有害かつ制御不能だ。

『厄を弾く程度の能力』

それが、私の生まれ持った異能だった。

自分に迫る災厄を回避する危機察知。

これだけなら、まだ良かった。

そうでは無いのだ。

『私が弾いた厄は、他者に移る』

要するに私は、居るだけで周囲を不幸にする、厄介者なのだ。

まさしく、厄を介する者、なのだ。

「ほら、今月分だ、持っていていってくれ」

「そう邪険にしなさんな。」

あたしや、他の兎や人間と違って、多少の厄でどうこうなるもんでもないさね」

そして、話は冒頭に戻る。

今現在の私は、姉が治める集落の外れで、趣味を兼ねた仕事に勤んでいる。

酒だ。

酒である。

酒なのだ。

私は毎日毎日昼夜を問わず、酒を造っている。

製鉄技術すら無い、紀元前何年だかも不明な中では、まともな酒は造れない。分かっている。

分かっているけれども、酒が飲みたい。だから造るのだ。

果実を潰して木の洞（ウロ）に貯めて発酵させる。

蜂蜜に水を混ぜて発酵させる。

穀物を嚙んで吐いて発酵させる。

寡聞にして、古代ビールの製法は知らなかったため諦めたが、知りうる限りの原始的酒造を試した。

試しては飲み、試しては飲み、試しては飲んだ。

生まれ変わったこの体は、幼い少女の外見でありながら、ザルを超えて粹だった。喜ばしい。

で、それが姉にバレた。飲まれた。気に入られた。

以来、こうして酒を納品し、食糧や生活に要る品々などを受け取る生活だ。

「そんで？ 今月の試作品はまだかい？」

「分かった分かった。座って待っていてくれ」

「そこなくっちゃね！」

これもまた、いつものことだ。

はつきり言って、私が距離を取ったのは、集落の連中のためではない。

ろくに会話もしない、いつの間にか代替わりしている輩など知らん。

理由は、姉だ。

私は、姉が皮を剥がされたのは、私の厄を受けたせいだと思っっている。

言えば否定してくれるだろう。

考えすぎだと笑い飛ばしてくれるだろう。

だから言わない。

私の内心など、姉にはお見通しかも知れない。

だけと言わない。

そして、だというのに、こうして月に1度、姉と飲む酒を、私は心待ちにしている。

まったく、そろそろ千に届くか超えたかという齢でありながら、惰弱なものだ。

「酒ー♪ 酒ー♪ おーさーけー♪」

「静かに待てないのか……」

そうして私は、今月もまた、姉と盃を交わしている。

「先月に貰った香草を漬けてみた。まだ味見はしていない」

「ほほおーう……そりやまた、挑戦的な取り組みで……」

「味の保証はできないが、健康には良いだろう、多分」

「あはは、クロはいつもそれだねえ」

「健康志向は、姉様譲りさ」

毎月毎月、もう少しの間だけ、このままで、と。

第蛙話

「コクトー！ 黒兔おー！ 酒ー！ 酒なくなったよー！」

「……洩矢神様よ。先程の樽で最後まで申し上げたはずだが？」

「なにさー、知ってんだよー？ まだ他にも隠してんだろおー？」

「あれらはまだ熟成中だ。未完成の品を供する気は無い」

「うえー!? んじゃ、蜂蜜酒は!？」

「昨夜、貴女様が飲み干された」

「あーうー……あ！ こないだあんたが飲んでた麦酒！ なんか泡立ってたやつー！」

「っ!? あ、あれはまだ、試作品であって……あくまで個人的に……」

「いやいやいやー？ 満足そーに飲んでたでしょー？ あー、飲んでみたいなー？」

「う、ぐ、う……」

この……！ 崇り神があ……っ!!

流浪し居着いた地で、私は何度目かも分からぬ苦汁を舐めた。

長らく研鑽し、つい先日開発したばかりのビール……私のビール……。

今更ながら、私達姉妹は妖怪だ。

なので、妖力という物を宿している。

姉は、これについては苦手としていた。

長い年月を生きながら、姉が宿す妖力は、そこらの妖怪と大差無い。

一方の私は、齢相応だった。千年前後の時間相応。

要するに、これまで出会った妖怪の中では、私の妖力は段違いだ。

姉妹でありながら差違が生じた原因は、能力の性質だと考えている。

姉の能力は、まるで妖怪らしくない、他者のための力。

そして、私は、実に悪辣な能力だ。

周囲に災厄を押し付ける、害悪そのものの存在だ。

私は妖怪である。

この自意識が、私をより妖怪らしくしているのだろう。

幸い、人食い嗜好には目覚めていないが。

不味そうだし、私は酒好き菜食主義だ。

倫理観やらについては、もう随分と昔に忘れてしまった。

仕方あるまい。

高々数十年の前世を、千年も覚えていられるものか。

とうに私は、身も心も妖怪兔に成っていた。

できれば人間を食べたくない、くらいが、私に残る人間性だろうか。

ともかく、私の妖怪としての格は、年々増していった。

それに伴い、ある意味当然に、能力も強まった。

最早、『不運』が私の身を害することは無い。

弾くことができない厄は、事前に察知し回避できる。

こと生存に関しては、おそらく私は、相当に高位の力を持っている。

そして、それは同時に、周囲に撒く災厄も増すことを意味した。

格の高まった妖怪として、本来なら身に納めるべき大量の厄。

それを私は、残らず周囲に撒き散らす。

少しずつ、数百年の時間をかけて、私の住み処は集落から遠ざかった。

私に近付けば、厄を受けさせてしまうから。

やがて、契機が訪れる。

大国主神様から、姉に使者が遣わされた。

曰く、予言の礼をしたい、と。

姉はすぐさま、喜び勇んで旅立った。

あのお方は、姉にとっても恩人だ。

恩人の招きとあればと、押っ取り刀で飛び出した。

集落については、それなりに指導的立場になれる者も居るし、問題無いだろう。

有頂天になっていた姉に、そこを考える余裕があったかは、定かでは無いが。

しばらく経ち、帰ってきた姉は、神格を備えていた。なんでも、因幡てゐの名と、白兔明神の神号を賜ったらしい。ダイコク様から直々に名と号を下賜されるとは、妖怪鬼とは思えぬ、破格の待遇だ。

まったくもって、喜ばしい限り。

なのだが、問題が発生した。

問題とは言っても、姉ではなく私の問題だ。

強まった私の能力は、神にすら厄を押し付ける。

明神の位を受けた姉にとって、私は、まさしく毒だった。

私は、離別を決断した。

元より、やがては踏み切るべきことだ。

早々に決めるべきことを、引き延ばしにしていただけなのだ。

酒造技術も既に、姉を介して集落へ伝えている。

私がここに居る必要は、特に無い。

姉に別れを告げて、私は外へと旅立った。

表向きは、見聞を広めるため、と言いはしたが、はたしてどこまで、姉に読まれたことやら。

相も変わらず、私はそれを尋ねなかった。

代わりに、餞別を求めた。

姉がダイコク様に名付けられたように、私に名前を与えてほしい、と。

いつの日か、風の噂にその名を聞いた時に、私だと分かるように、と。

因幡コクトの名を姉に貰い、当ても目的も無い旅に出た。

生まれ育った高草郡は、遙か彼方に。

ふらりふらりと、様々な地を渡り歩いた。

様々な物を見、様々な者に出会い、様々なことを学ぶ。

姉以外と関わらずに、酒造ばかりに明け暮れた日々とは、また違った面白さがあった。

何度か、私と同等以上の力を持つ妖怪にも出会った。

好奇心にかられて、危機察知を無視した結果、あわや死にかけたこともあった。

好戦的な大妖怪やら、穢れを厭う神やは、なかなか危険だ。大妖怪にも神にも、話の通じる相手は居たが。

加えて、そういった者達は、独自の価値観に従って在る者が多い。それらの感性に触れることは、まさしく出会う喜びだ。

共に飲む酒も、一人酒とは異なる美味さがある。

妖怪にしろ神にしろ、高位の存在は、厄に対する耐性も高い。

酒を酌み交わす程度の時間であれば、私の厄も受け止められる。

そんな具合にふらふらして、随分な時間が過ぎた。

この間の、特に大きな出来事としては、やはり妖怪と神の大戦だろう。

隙間を司る大妖怪を大将に、妖怪の軍勢が神々に戦いを挑んだ。

激しい戦で、妖怪も神も、相当な数が滅んだ。

宵闇の大妖怪も、消滅寸前まで追い込まれたらしい。

余談だが、隙間のや宵闇のに会うと、B B A I Nだのそーなのかーだのと頭をよぎる。

前世の名残だろうか？ 掠れ過ぎて思い出し様が無いが。

それとは別に、比較的話の通じる者達なので、落ち着いたらまた会いたい。

参戦しなかった件に関して、何かしら文句は言われるだろうが、聞き流そう。

そもそも、私が戦場なんて厄の坩堝に飛び込めば、敵も味方も被害拡大するぞ。

試してみたいか？ 私は嫌だ。

なお、噂によると白兔明神は健在らしい。

力が弱い割りに、罨やら何やらで領地に攻め込み難く、妖怪達に無視されたそうだ。

一安心である。

あ。あと、大戦で世界中に穢れが撒き散らされ、人間が滅亡した。残らず死ぬか妖怪化した。

これについて、別段何も思わない辺り、私も完全に妖怪だな。とは言え、どうにもあの連中、前世で知る人類とは別の存在らしい。だったら何なのだ、と聞かれても、私は知らん。神が造った何かじゃないか？

私に分かるのは、ここ数万年で、猿みたいだった原人が人間らしくなったことくらいだ。

気が付くと、旅を始めてから、百数十万年が過ぎていた。数えていた訳では無いが、多分大体そのくらいだろう。

列島の中に留まらず、大陸に渡ってみたりもしたが、結局この島国に帰ってきた。

旅立ち以来、姉には会っていない。

更に成長した私の能力は、厄の台風みたいな物だ。

中心部の私だけが無風な辺り、まさしく台風である。

厄災の黒兎、なんて渾名まで付けられてしまった。

百数十万年を生きた妖怪が担う分の厄を常に撒き散らし続ける、災害じみた存在だ。

明神として信仰を集める姉に近寄るのは、余りにも危険。

それでも、生まれたこの地へ戻るとは、我ながら女々しいものである。

これまでと同様に、ふらふらと、東へ西へと歩き回る。

そんなある日、かつて無いほどの厄を見付けた。

何ともまあ、見事な物である。同時に感じる、凄まじい神気。

さぞや名のある荒神か、と、興味本意で寄ってみた。

危機察知が大して反応しないところ、問答無用で殺しにかかってくる類いでは無い。

なら大丈夫、と樂觀して、その神が治める領域に踏み入れた瞬間。

数十もの白い大蛇に取り囲まれた。

とんでもなく警戒されている。

それはそうだ。

先述の通り、今の私は厄の台風。

こんな者が領地に上陸したら、何事かと敵意を向けて当然。

うむ、これは不味い。

正直に言うと、大蛇の方はどうとでもなる。

一応は、崇り神に位置するようだが、この三倍は持ってこい、だ。だがしかし、一際巨大な、天をつく鎌首をもたげた大蛇。

その頭上に感じる存在。

あれは、不味い。

「やりあつたら、逃げる余裕が無い。

危機察知が、逃げる、とは訴えないことが、その証拠。

同格以上の相手とことんなど、私は御免こうむる。

そういうことは、戦闘好き同士でもやってくれ。

脳に響く警報に従い、膝をついて頭を垂れる。

礼を尽くせ、と、能力が悲鳴をあげている。

「拜謁の栄を賜りましたこと、感謝申し上げます。

貴き神、崇り神を統べる偉大な王。

私は、因幡乃黒兔と申す者。

此度は、御身がお治めになられる地へ無作法に立ち入った非礼を、どうかお許しく下さい」

大蛇が私に近付き、名も知らぬ神が私を覗き込む視線を感じる。

「……綺麗なもんだねえ」

頭上から降ってきた声は、予想外に幼い。

おそらく、外見年齢は、私と大差無いだろう。

私を含めて、見た目が中身と同じ人外など、滅多に居ないが。

「周囲に穢れを押し付けて、あんた自身はとても綺麗だ。

そして、あんたはそんなあんたが、嫌いで嫌いでしょうがない。

だつてのに、あんたはそれに折り合いを付けている。

自分をそういうモノだつて認めている。

きつと、あたしが生まれるよりも前からだ。

ずっとずっと、あんたはあんたを納得させて、折り合わせている」

弾く厄に、妖力と殺気が混じる。

白蛇の群が、呻き、身をよじる。

「良いよ。気に入った」

幼き神が、笑い声を上げた。

「あんたを客分として迎えよう。

コクト。あんたは、このあたし、諏訪の国主、洩矢の神の客だ」
楽しげに、心底愉快そうに、神は笑った。

第鬼話

「二「ウオーツ!! 酒寄越せえー!」二」

「またこの展開か馬鹿鬼共!」

伊吹! お前の配下だろうどうにかしろ!」

「あつはつはつはつはつはつは! いいぞーやれやれーい!」

「ふざけるなよお前!」

「コクトと喧嘩できる上に酒が飲めると聞いて!」

「お前もか星熊!」

「四天王奥義! 三步必殺!」

「本気で殺す気か!」

もう良い、厄に塗れて溺死しろ、馬鹿共があつ!!」

馬鹿騒ぎの末に、次から次へと湧く鬼共に根負けした私は、酒蔵を開かされた。

……あいつら、絶対に許さん。

酒虫でもかじっているよ、畜生め。

流れ着いた諏訪の国に、私は1、2万年ほど留まった。

1つの場所に居着いた期間としては、姉と暮らした高草郡を超えて最長だ。

理由は2つ。

まずは、この国が大規模な原始的農業を行っていたこと。

狩猟生活が主体のこの時代、この国の発展は破格だ。

果実、蜂蜜、穀物等々。酒造に必要な材料が、ここには豊富にあった。

そして、その収穫の殆んどは、洩矢神様に献上された。

まだ税という概念は無いが、徴税率にして7割超。暴君である。

付け加えるなら、真の暴君とは、下手な善政を敷こうとする為政者よりも民を知る。

畏怖を与え、然れど反意は持たない程度の搾取を見極める。生かさず殺さずこそが圧政の真理である。

まさしく、洩矢神様は暴君であった。

その献上品から酒を造る私が言えたことでは無いが。

おかげさまで、研究が捗った。有り難い話である。

続いて、2つ目の理由。

これについては、どちらかと言えば前提だ。

洩矢神様は、私の能力の影響を、僅かにしか受けない。

数多の崇り神を統べる王は、元より大量の厄を担っていた。

私が受ける分の厄を、全て押し付けられようと、何ともないのだ。

長期間に渡って一緒に過ごしても問題が無い相手。

その魅力に抗えない私は、百数十万の歳月を経て尚も懦弱なものだ。

そんなこんなで幾星霜、すっかり、諏訪の国の酒屋となった私である。

ビールも遂に開発できた。

製法の鍵は、麦芽でパンを作ることだったのだ！

改良の余地はまだまだあるが、それでもこの時代では最先端だろう。

まあ、ビールに限らず、今の人類が原人だった頃から酒を造ってきた訳だが。

そのビールも、開発して数日も待たず、洩矢神様に取られたが。

おのれ暴君崇り神……！

だがしかし、洩矢神様のおかげで、蒸留などの今まで手付かずだった製法を試せるのも事実。

この諏訪の国くらいでなければ、大規模な蒸留所は建設できない。

洩矢神様へ献上するため、と言えば、ここの民は喜んで働いてくれる。

嘘は吐いていない。主目的は私が飲むことだと伝えなかったただけだ。

共存共栄とは素晴らしい物である。うむ。

悩みどころとしては、洩矢神様が酒を飲み過ぎることと、何故か私に夜這いをしかけることだ。

見た目の幼さに騙されそうだが、あの神様は、大層な色魔である。十代半ば頃の女子に、特に目が無い。

国内で最も美しい少女が毎年、供物に捧げられている、と言えば分かりやすいか。

他にも、視察中に目についた女子も、そのまま連れ帰る。

この国の要職は、誰も彼もが、神の子だ。文字通りの意味で。

で、人間の女子だけに飽きたらず、何をとち狂ったか、私にまで手を出そうとした、と。

何が起こったかについては、正当防衛、とだけ言っておく。

前世で男だったことなど、既にまるで意識していないが、だからと言って犯されてたまるか。

女の悦びなんぞ知らんで良いわ。安眠妨害するな。

万が一にでも身籠ったりしたらどうする。

崇り神の王と厄災の黒兎の子など、どこの魔王だそれは。

そんなことを言ったら、それも面白そうだ、と本気で孕まされそうなので、絶対に言わないが。

何故に、夜這いは危機察知に引つ掛からないのか、自分の能力へ切に訴えたい。

明らかに身の危険だろうが。素通りさせるな本当に頼むから。

とまれかくまれ、私は長らく、諏訪の国で過ごした。

だが、出会いがあれば別れあり。

姉と離別した時と同様に、ここでもまた、別れの契機が訪れた。

「……………ふうん……………どうやら真面目な話みたいだねえ」

謁見した私を見るや否や、洩矢神様は呟く。

初めて会った時から、この神には見透かされてばかりだ。

「近いうちに、この国に戦争が起ころ」

「……………ああ……………なるほどねえ。それがあんたの選択なら、仕方が無いね」

今もまた、全てを見透かされ、先んじられた。まったくどうして、敵わないものだ。

「私が居ては、貴女様はともかく、大勢が死ぬだろう」「だろぅね」

私は、厄災の黒兎。

私がある場に居るだけでも、争乱の規模が増す。

「長い間、世話になった」

「なに、あんたの酒は、美味かったよ」

最後の言葉は、互いに淡々と、再会の約束も無く、肅々と。

戦乱の気配を避け、樹海深くの、人はおろか神も寄り付かない秘境を住居に、酒造り。

あちらこちらが戦に次ぐ戦で、外に出る気にもならなかった。

仙人じみた引きこもり生活を満喫し、気が付けば数百年。

もしかしたら、千年過ぎたかも知れないが、確かめるのも面倒臭い。酒造りの合間に色々試していたところ、やっと私は、能力の制御に成功した。

弾いた厄を、私の周囲に留められるようになった。

これまでであれば、弾く力を強めて範囲を広げることで濃度を薄めていたが、大きな進歩だ。

その分、さながら漆黒の衣の如く濃密な厄を纏うものの、接触しない限りは無害なはず。

と、いう訳で、森を出て、まずは洩矢神様の様子を見に行つた。

諏訪明神とかいう、洩矢神様から国を取った神には警戒されたが、気にしない。

洩矢神様に攻め行つた時は、建御名方神と名乗っていたとか。いや知らんが。

大国主神様の子？ ああ、それなら分かる。お父上様には大変お世話になりました。

私、白兔明神の妹で御座います。どうぞよろしく。で、それよりも洩矢神様だ。

結論から言うと、非常に御健勝であられた。少しは大人しくなったかと期待したが。

久し振りに酒を供したところ、凄まじく喜ばれた。諸手を挙げて喝采された。

前より更に美味しい、と絶賛された。研鑽を続けた成果である。

嫁に來い、という誘いは、慎んで辞退した。いい加減に諦めてくれ。なかなか楽しい一時だったが、長居はすまい。

諏訪明神が、やけに恨めしそうな目で私を見ている。嫉妬心が丸出しである。

そんなに洩矢神様と仲良くしたいか。攻め込んだくせに。

あなたが攻めて來なければ、私は諏訪の国の蒸留所を棄てずに済んだのだ。

戦闘の余波で更地にしやがって。御柱めが。

と、このように色々あったが、半年足らずで諏訪の国を再び出た。今更だが、時間感覚が狂っているな。あつという間だった。

寄るだけのつもりだったが、少しばかり居座っていた。

諏訪の国から、次の目的地は、懐かしき高草郡。

だったのだがしかし、百数十万年の間に、地形が変わっていた。当たり前だ。

おかげで、姉の元へは辿り着けず仕舞いだ。

情報を集めたが、かなり昔、多分何百年か前に、白兔明神は人前から姿を消したらしい。

仕方が無い。

生きてさえいれば、いずれ会うこともあるだろうさ。

姉も、あれで早々死ぬような者では無い。

思考を切り替え、さて、次は何処へ流れるか。

考えつつ、山の奥で酒造り。最早、習慣というか職業病というか。考えるのに疲れた時も酒を造っているの、要するに常に、だ。

それ以外の趣味は、新種の果実集め……いや、これも酒造の一環だ。後は、我流の柔術擬きか。

護身兼暇潰しに始めて、今では中級妖怪なら素手で仕留められる。

手慰み程度でも、万年単位で積み重ねれば、相応の技になるものだ。しかし、中級妖怪以下の相手は、厄を浴びせた方が楽なので、気紛れにしか使わない。

意味が無いが、娯楽など無駄でなんぼ、だ。もう生き急ぐ歳でも無かるうよ。

などと嘯きつつ、まったりと過ごしていたら、鬼襲来。

私の酒を奪おうとしやがったので、厄と妖力を混ぜて吹っ飛ばした。

黒き光に飲まれて失せろ。

そうして私は、鬼共に目を付けられた。

なんで吹っ飛ばされても笑っているんだこいつら。訳が分からん。

ひたすら返り討ちにしていたら、四天王とかいう大女まで来た。

最終的に、最後まで立っていた大女、星熊勇儀に樽を一つ譲って帰らせた。

何なんだあの耐久力。殺す気で撃って腹に風穴空けたのに、立ち上がりやがった。

しかも、拳も蹴りも全てが必殺。付き合い切れない。神経が持たんわ。

嬉しそうに笑いおつてからに。こっちは必死だ馬鹿者。

後になって、この「根負けさせれば酒が飲める」という前例を作ったことを、心底悔いた。

あの酒がまた飲みたい喧嘩しようぜ、つて、何だその微塵も魅力を感じない誘い文句。

第幻話

「約束の品を受け取りに来たぞ、兎」

「納期は来月だ、出直せ、狐」

「紫様が御所望なのだ、さっさと寄越せ」

「あれの気紛れに振り回されて悦に入るのは結構。

だが、その下僕根性に私を巻き込むなよ」

「良いから、早く酒を出せ。」

本来であれば、貴様の様な下卑た輩の品など……」

「ならば帰って主に伝えると良い。」

兎の酒などお出しするに値しませんのでありません、とな」

「……紫様と、古くからの知己だからと言って、調子に乗りすぎだぞ、
老いぼれ」

「主に尻尾を振りたければ、骨でも取って来ると良い。」

「狐も犬も似たような物だろう？ お嬢ちゃん」

「骨よりも、兎肉の方が良いのではないか？」

その干からびた肉が、食えた物かは分からんがな」

「試してみろ」

最強の妖獣だか式だか知らんが、お前の態度が気に入らない。

九尾を引き抜いて減らしてやろうか。1本は座布団に使ってやる。

酒を造る、出来上がった頃に鬼が来る、迎撃する、馬鹿騒ぎになる、
宴会する。

既に何度繰り返したかも分からない。

何だあいつら。何なんだあいつら。

頑丈過ぎて、私の厄で運気が下がっても、全く意に介さない。

妖力を込めて吹き飛ばしても、しばらくしたら復活する。

私の防御結界を、拳で叩き壊す。星熊の奥義に至っては一撃である。
る。

もし体に当たったら即死。騒ぎの間中、危機察知は反応し通しだ。

死角からの攻撃も察知して避ける私。盛り上がり熱くなる鬼共。そして激化する乱戦。

もう本当に、こいつら、くたばれ。

酒が欲しいなら、せめて物々交換で何か持ってこい。

ただし酒虫は却下だ。あんな酒、度数が高いばかりで、旨味も味わいも無い。

だからといって、欲しけりや奪うって、お前らの思考回路は蛮族か何かか。

あ、蛮族だわあいつら。

「本当にあいつらくたばれば良いのに……」

「あら、貴女が参っているなんて、珍しいわね」

「私の顔を肴に飲むな」

「花鳥風月、雪に星に友の顔、全てを肴にしてこそ、でしよう?」

しれっとした表情で杯を傾ける、隙間の、こと、八雲紫。

こうして酒を酌み交わすのは、十数万か数十万年ぶりになるか。

「そうよねえ。貴女が神との戦をすっぱかして、大陸漫遊に出て以来かしらねえ」

思考を読むな。

「と、言うか、だな。」

参戦する気は元より無かったが、お前も、私は戦場に近付かない方が良いと言っていただろう」

「そうだったかしらね?」

「何だ? 如何に賢者と謂えど、歳には勝てんか?」

「失礼ね! 私はまだまだ若いわよ!」

古き神々の多くが地上を去って以来、私より年上の数少ない存在のくせに。

「心はいつまでも若々しいの!」

どうでも良いわ。

「そんなことよりも、何か用があつて来たんだらう?」

「あら? 用が無いと来ちゃいけない?」

「白々しい。顔を見れば分かる」

何の意図も無しに動く奴ではあるまいよ。

「近頃、また何か画策しているらしいな」

「そうね……知っているなら、話が早いわ」

紫はそう呟き、扇で口元を隠す。

そういう仕草が胡散臭さを増しているのだが、狙ってやっているのだろうか。

「私は、楽園を創っているの。」

数多の妖怪が生き、人が妖怪を恐れ続ける、妖怪の楽園を」

「……人は変わり、発展し、畏怖を薄れさせる。それもまた時代だろう」

「でしようね。でしようけど、私はそれを否定するわ」

「だろうな。それが箱庭であろうと、住まう者には、関係無い」

僅かばかりだが、前世の意識が疼く。

と、なれば、これもまた、知識通りの出来事だろうか。

「コクト。貴女はきつと、畏れを失っても、力を弱めても、生きていくるのでしよう」

「どうだかな。消えはせずとも、人の既知に、私が住まう居場所はあるまいよ」

「それを理解して尚、貴女は受け入れるでしようね。」

「だけど、私はそれが嫌なの。何としても協力してもらおうわ」

神が地を去ったように、妖怪もいずれは消える物だ。

その道理を、今更説くような相手では無い。

全てを理解した上で、尚もこいつは我を通す。

我が儘にあるため、必要な存在があれば、確保しに来る。

「……………困えば留まり淀む。」

……私に求める役は、攪拌、といったところか」

「本当に、話が早いわね。」

その通りよ。厄を操る貴女は、私の楽園をかき混ぜるのに、最も適している」

箱庭に変化は無い。

強すぎる変革は要らない。

しかし、溜まり水は濁る物。

なるほど、その調整に、私は都合が良いだろう。

薄く広くを厄で満たせば、自然と動きが生じるものだ。

「……能力の制御を身に付けたのは、失敗だったか」

「私の予定には、とつくに組み込んであったから、安心して」

「できるか」

制御できないままだったなら、何をするつもりだったんだ、こいつ。

ああ、説明は要らん。聞きたくない。

「酒造には、最高の設備を約束しますわ」

それはまた、何とも心揺さぶってくれることで。

久し振りになるが、蒸留酒も本格的に造りたかったところだ。

「……断ったら、何をされるか分からんな」

「あら、人聞きの悪い」

くすくすと笑う紫。それが相手の不安を誘うのだと……分かって

いるのだろうか。まったく。

「まあ良いか。変化に抗うこともまた、時代だ」

すうと、紫が笑顔の質を変える。

「感謝するわ、コクト」

珍しいことに、それは安堵の笑みだった。

語り終え、乾かした杯をまた満たす。

言葉は無く、緩く穏やかに、沈黙を肴に酒を飲む。

特に上等な酒を蔵出したこともあり、良い時間だ。

さて、引越しが決まったところで、騒動が起こった。

ここ最近お決まりの、馬鹿騒ぎだ。

「紫お前！ 酒（コクト）を独占する気か!？」

私の名前を、他の字の読みにされたように聞こえたのは気のせい
か、伊吹？

「いくら何でも、横暴ってもんじゃあないかねえ？」

どれだけ攻撃的な笑い方をしている星熊。

「彼女が選んだことに、他者の意見を押し付けるつもりかしら？」

それも、選ばれなかった貴女達が？ お笑い草ねえ」

何の話だか分からんが、とりあえず挑発していることは分かるぞ、紫。

一触即発。というか、この三者が本気で暴れたら、この山周辺が盆地になる。

どうしたものか。

立ち去る土地が荒れたところで、私に痛手は無いが、放って行く訳にもいかんだろう。

周りの鬼共の、何とかしてください、と言わんばかりの視線も、鬱陶しい。

仕方無い。

「伊吹、星熊」

「なにさ！」

「なんだい？」

木っ端妖怪なら、眼力だけで消し飛ばさ、こいつら。

改めて、何でこいつらの喧嘩相手をさせられていたんだ、私。

「置き土産に、酒蔵のを全部と、私の『秘蔵』を半分残して行く。好きに飲め」

「愛してるよコクト！」

「アンタの酒は、鬼の宝にしよう」

分かったから涎を拭け。

「ちよつと待って!? 貴女の『秘蔵』って、まさか！」

で、何でお前が口を挟む、紫。

「出来が良い物を長期間熟成させた酒だ。さつき飲んだのも、その1つだな」

百年千年を費やして、最適の状態まで育てた、珠玉の品である。

樽で数えて十も無い厳選品だ。伊吹と星熊にも、滅多に出してない。い。

「ず、ズルいわよ！ 私だって少ししか貰えなかったのに！」

量が限られているからな。再会祝いに瓶1本分も空けただけで充分だろう。

しかし、そんなに気に入っていたのか。道理で名残惜しそうに飲んでいた訳だ。

「なあにがズルいつてのさ！ さらって行こうとしてるクセに！」

「コクトがくれると言った以上、あれはもう鬼の宝さ！」

伊吹、星熊、涎拭け。

「ぐ、くう、くうううう！ コクトオオツ!!」

「なんだうるさい」

「私にも！ 私にも引越し祝いで頂戴！ お酒！」

賢者の名が泣くぞ、今のお前。

紫が喚くので、楽園とやらに着いたらすぐに、現地の素材で造ることになった。

元々そのつもりだったが、一息つく間すら無さそうだ。

移動ついでに荷物を減らそうとしたことが、こんな事態を招くとは。

確かに、『秘蔵』半分は些か奮発したが。

自覚していた以上に、私はこの馬鹿鬼共との馬鹿騒ぎを、楽しんでいたのだろうか。

まこと、我がことながら、心という物は不明である。

そうして、私は楽園、幻想郷でもまた、酒造に明け暮れる。

紫にねだられ、頻繁に酒を注文されるのは、頭が痛い。

あと、紫の従者が、やたらと突っ掛かってくるが。

何の文句があるのだ、あの狐め。

紫が私の住居まで飲みに来るのは、あいつが勝手に来ているだけだ。

言いたいことがあるなら、あいつに直接言え。

私に向かって愚痴愚痴言うな。面倒臭い。

第卮話

「母様母様コクト母様ー！」

「はいはいお帰りなさい」

「ただいまお勤めから戻りました！ 集めた卮を神々に渡しました！」

「ああ、いつもお疲れ様だ。今日はもう休みなのか？」

「そうですね。明日から、また卮を集めに行つてきます」

「それなら、少し試飲に付き合つてくれないか。」

混合酒に手を出してみたのだが、どうも好みが別れる味でな

「喜んで」一緒させていただきます！ コクト母様ー！」

百数十万年生きてきたが、まさか私が、母になる日が来るとは。

旦那は居ないし、欲しくも無いがな。

とりあえず、口調は私に似なくて良かった。

もう少し落ち着いた方が良いとも思うが、それは、成長すれば変わる事だろう。多分。

幻想郷に来てから、千年前後か。相変わらず、私の時間感覚は適当だ。

新種の材料などを見付けたり、新しい製法を思い付いたりすると、百年単位で時間を忘れる。

夢中になれることがあるのは良いことだ。多分。

この千年間で、鬼共も幻想郷に来て、やがてどこかに去って行った。相変わらずの蛮族だったが、あいつらにも、色々と考えることがあるのだろうか。

鬼共と懇意にしたせいで、私が天狗からやたら恐れられたが。

別に、噛み付いて来なければ、取って食ったりはしないのだがな。

おかげで、天狗の縄張りや山菜や果実などを採っても、監視だけで済むのは助かる。

連中は、私以外の者が天狗の領域に入ると、即座に襲ってくる。

自意識の強い奴らだ。面倒な。

調子づいて突っ掛かって来ない分、どこぞの狐よりは良いか。

本来この幻想郷に呼ばれた理由である、厄を撒くことによる情勢不安定化も行っている。

無論、紫からの依頼があつた時だけだが。

こういうことは、仕事でも無い限り、やる気が起きない。

やった結果がどうなったかにも、興味が湧かない。

おそらく、強めに厄を撒いた時は、酷い有り様だったろうな、程度の感想である。

幻想郷の領内に厄を循環させ異界化し大規模な結界を創る下地云々、とかも言っていた。

良く分からん。

そんなことよりも酒だ酒。

幻想郷でも特に多くの妖怪が住むこの山は、自然が豊富で水も美味しい。

紫の支援で、酒造設備も充実。

そして今日も、酒が美味しい。

「外の吸血鬼が、幻想郷に攻めてきます」

「そうか。頑張れ」

「私がここに赴いた理由が、分からない貴女じゃないでしょう?」

「……えー」

「不満そうな顔をして駄目。住民として働いてもらいますからね。」

月へ攻め込む時は見逃してあげたのだから、観念しなさい」

紫に拉致されて、散々回避し続けた戦場に送り込まれた。

ヒトデナシめ。こいつも私も、人間では無いが。

前線を避けて、敵の拠点である館に侵入し、全力で館内に厄を撒き散らす。

今回の私の仕事である。

酷い扱いだ。

私は爆弾か何かか?

私の近くで戦闘するだけで敵も味方も死なせるので、前線から外されるのは、有り難いが。

改めて、私と日常的に喧嘩していた鬼共は、規格外である。頑丈過ぎるわ。

まあ、ともかく、だ。

仕事である以上は、役目をこなそう。

館の戦力は大半が外に出ているようだが、流石に防御は固めている。

特に館の正面は、魑魅魍魎が百鬼夜行。乗り込むのは疲れそうだなので、厄を束ね、妖力を混ぜて弾き飛ばす。

一点集中させれば星熊の肉体すら貫通する過剰出力なので、軽く散らす感じで。

収束。

充填。

混合。

圧縮。

錬成。

照準。

着火。

砲撃。

拡散。

加速。

命中。

大爆発。

轟音。

鳴動。

崩壊。

阿鼻叫喚。

うむ。正門が吹き飛んだ。木端微塵。不味い。目立ち過ぎた。

そう言えば、ここ数万年は、あの集団程度の中小妖怪の群と戦っていないかった。

下位の鬼共を相手にする気持ちで撃ったせいで、十二分に過剰攻撃だったらしい。

もう少し静かに済ますつもりだったのだがな。

まあ良いか。ここに居るのは敵だけだし、適当に暴れて働いたことにしよう。

吸血鬼の主力やら魔法使いやらは、外で紫が率いる妖怪軍とやり合っているらしいし。

残っているのは、大した戦力では無い、と良いな。

「よくも……！ よくも皆を！ 門を！」

で、早速何か出てきた。中華風の服を着た少女である。

「初めまして、さようなら」

厄砲速射。先程の教訓を活かし、威力も大きさも控え目だ。妖力も少なく楽に撃てる。

「はあー！」

お、回避した。地面すれすれまで身を伏せた少女は、その姿勢のまま前方へ疾走。

一気に私との間合いを詰めた。

地を這い懷に滑り込むような身のこなし。

「せいっ!!」

そして突き。良い拳である。鬼共の怪力任せなそれとは違い、確かな鍛練が感じられる。

数十年か百年か。武に打ち込んだ者の拳だ。

もう百年ばかり鍛練を続ければ、私にも届くかもしれない。

今はまだ、百年早いが。

「っがは!？」

拳の勢いを利用して、少女を背中から大地に叩き付ける。

鬼共の拳でもいなせるようになった、私の柔術擬きを侮ってもらっては困る。

娯楽として始めたことだが、生命に関わるなら本気で鍛える。

本気で鍛えたが、最上位の鬼の拳は試していない。危険過ぎる。

あいつら、一撃で地面を陥没させるんだぞ。やってられん。

さて、話を目の前の中華風少女に戻そう。

先述の通り、私が使ったのは、彼女の力で彼女自身を投げる技だ。もしも端から見えていたら、彼女が自分から跳んだようにすら見えるだろう。

技を受けた少女も、何が起きたのか理解できず、混乱している。実戦経験が足りないな。

敵を前にして困惑など致命的な隙である。

隙だらけではあるが、この娘をどうしようか。

門前の連中を粉々にしたものの、別に、皆殺しにしたい訳でも無し。少しばかり、私の仕事が終わるまでの間、眠っていてもらおう。

「今回は、私の勝ちだな」

「……………い……………ひ、あ……………」

多めに厄を纏わせた右手を伸ばし、少女の額に触れる。すると『不運にも』意識を失ってしまった。

一応『不運過ぎて』死なない程度には調整しているので、心配は無い。

厄に妖力を混ぜて強化するのも、既に手慣れたものである。

もしも死んだら死んだで、そこまでか。私が言うのも皮肉だが、幸運を祈る。

「それでは、お邪魔しようか」

やることを済ませて、さっさとおいとまさせていただこう。

その後、仕事を片付け帰る直前に、地下室から飛び出してきた吸血鬼に襲われたのだが、割愛する。

はつきり言って、思い出したくない。

全力で逃げ出したわ。何だあの理不尽な破壊性能。冗談じゃない。分かりやすく強い星熊の方が、まだ相手のしようがある。

意味不明な能力を持つ輩は、目眩まして避けるに限るのだ。

伊吹も、能力ありだと私とは千日手になるので、やりたくない。

尚、吸血鬼の陣営は、館から厄が吹き出し動揺したところを、紫達
が締め上げたらしい。

とりあえず、私に任された仕事は完遂したので、山に帰って酒造り

に戻る。

頼まれた内容以上に働いた気がする。しばらく働きたくない。酒を造ることは、仕事では無く私の趣味だ。

本日は、水を汲みに川辺へと。

ついでに散歩だ。

籠っている山を出て、流れに沿って下流に向かう。

これといった目的地を持たず、てくてくと。

水汲みについては、帰りに上流の清水を使おう。

そうして、しばらく。

赤い服を着た幼子が、岩場に座り込んでいた。

鮮やかな緑の髪を胸の前で束ねた、特徴的な髪型。

何より、その身に宿す、夥しい程に渦巻く厄。

「……だあれ？」

「因幡コクト、だ」

「いなば……こくと……」

私は、この娘を知っている。

私の前世が、知識として持っていた。

とうに掠れて、薄れて、消えかけた記憶。

百数十万の時の果て。

「初めましてだな。鍵山雛」

「? それ……わたしの……なまえ……?」

口からするりと、その名が出てきた。

「そうだ。貴女の名前は、鍵山雛だ」

「かぎやま……ひな……」

遙かな時が流れても、初めて能力を自覚した日のことは覚えてい
る。

あの日私は、「まるで、鍵山雛の対みたいな能力だ」と、思ったのだ。

まだ、前世の記憶が掠れきるよりも、前のことだ。

「行く宛が無いのなら、私の家に来るか？」

厄神様だったら、私が傍に居ても問題無いのだろうか、と、あの時の私は、夢想した。

きつと、今日まで心の隅で、彼女と会うのを待っていた。生きていれば、いつかは彼女に会えるかも、と。

姉と別れ、紫や洩矢神様や鬼共や多くの者と出会い、過ごして、それからも。

意識の底で、感じていた。

「……………うん」

「よろしく、雛」

「……………よろしくね……………こくとかあさま」

差し出した、厄に塗れた私の手。

雛は、少し呆けてから、その手を取った。

私から雛へと、大量の厄が流れる。

雛はそれを余すこと無く、その身に溜め込む。

厄は、彼女を害さない。

こうして、私と雛は、家族になった。

古くから在り続ける厄災の黒兎と、生まれたばかりの厄神様。

私が彼女以外に触れば障る。

彼女も私以外に触れば障る。

我が家こそ、世界で最も厄に満ちた家庭だろう。

第霧話

「コクトー！ 遊ぼー！」

「言いながら弾幕を放つな破壊魔娘！ せめて非殺傷に調整しろ！」

「あはははは！ すごーい！ 全部よけてるー！」

「4人に増えるな剣を出すな丸焼きになるわやめろ馬鹿っ!!」

「きゅつとしてー」

「それは完全に殺意だろうが！」

「きゃー！ ぶったねー！ お姉さまにもぶたれたことないのにー！」

「打（ブ）ったのでは無く撃ったんだ今は」

「えー、ダメだよコクト。そこは『ぶつてなぜ悪いか！』って言うのが様式美なんだよ？」

「知らん。そもそも台詞が違ーん？ 何を言っているんだ私は？」

後日、遊びに付き合わされた侘びとして、紅魔館製の葡萄酒が届けられた。

なかなか良い仕事をしている。

物腰通りの丁寧な酒造だ、あの従者。

少々、何らかの能力で熟成を早めた臭いがあるが、それを差し引いても良い品だ。

許した。

幻想郷を、紅い霧が覆った。

私とは言えば、紫から依頼された厄撒きを終えて、自宅でまったり。厄を撒くよう頼まれた、ということは、この現象も計画の内か。

先日施行された、スペルカードルールとやらと関係があるのだろうか。

前世の記憶が疼くので、おそらくこれも、予定調和なのだろうな。

それは良いが、湿気が多く酒造がしにくい。早く終われ。

「……いつまで続くのかしらっ。」

「紅く染まった庭を眺め、雛が眩く。

その表情は不安に満ちている。

仕方の無いことだろう。

雛は、人々の厄災を引き受ける厄神様。

徹頭徹尾、この娘は『他人の役に立つ』ことが存在理由で存在意義だ。

そんな彼女にとって、厄が溢れながら動けないこの事態は、もどかしいに違いない。

厄の原因は、大体が私だが。

もしもばれて怒られたら、どうしようか。その時に考えよう。

「紫が動いたなら、博麗の巫女も動くのだろう。長くはかからんよ」

ビールのグラスを傾けつつ、雛と違い『自分のため』にしか生きない私が応える。

うむ。美味い。

「……コクト母様は落ち着いてますね」

「紫とも長い付き合いだしなあ」

自分の箱庭の中の、自分が管理した現象について、あいつが仕損じるとは思えない。

あいつ曰く『異変』と呼んでいたこれは、全て手のひらの上だろう。

もしあいつが狂ってしまい、創った箱庭を引っくり返す気になったのなら、話は別だが。

アレが、そんなにも分かりやすい狂い方をするような、可愛らしいモノかよ。

「母様、何だか悪いことを考えていそうなお顔になっていきますよ?」

「そうかい? そう思うのなら、そうなのだろうさ」

「……もう」

雛を見上げながら、わざとらしく、くつくつと悪党じみた笑い方を
する私。

困ったように苦笑する雛。

小さかった雛も、随分と大人びた表情を見せるようになったものだ。

背丈を追い越されて……はて、何年になるか。いかな。本気で思
い出せん。

「……私も歳か」

「その外見で何を仰っているのですか」

雛が言った通り、私の見た目は初めて人型を得た時のまま、幼い少
女のままだ。

今も、雛の膝の上に抱えられ座らされている。

後頭部に押し付けられる感触が柔らかい。

本当に成長したな、色々と。装飾の多い服を好むためか、普段は着
痩せして見えるが。

「か、あ、さ、ま？」

「はいはい、何でも無いよ」

「ほんとにもう……」

そう言つて、改めて私を抱き締める雛。

古今東西あらゆる男と一部女性に羨まれる状況だが、私が要求した
ことでは無いと釈明しておく。

雛は、私以外の者に触れることができない。

厄を移すことを無視すれば問題は無いが、それができる娘でも無
い。

他者に厄を押し付ける私よりは、雛の方が被害は少ないのだがな。

元々大量の厄を担っている相手なら、そこまで影響も無いのだろう
が、今のところ知り合っていないようだ。

そして、その分を補うように、私との触れ合いを求める。

私と雛は互いに、「自分が触れても絶対に問題が無い」唯一の相手同
士だから。

だから雛は、私に触れて、私はそれを受け入れる。

この安心感に抗えず、毎回甘えている辺り……諏訪の国に居た時か
ら、まるで成長していないな、私。

そもそも、姉が明神の神号を授かるまで高草郡に居座っていたの
も、似た理由だ。

「……本当に、成長せんなあ、私は」

「母様が大きくなられたら、こうして抱き上げることができません」
「体躯の話では無いよ」

ぐい、とビールを飲み干し、空のグラスを脇に置く。

酒臭い息を吐き出し、口の周りについた泡を舐め取る。

私を抱える雛の温もりが、肌に心地良い。

庭にはまだ紅い霧が立ち込めている。

東から昇る紅い月。

肴としてなら上出来だろう。

ああ、それにしても、酒が美味しい。

翌朝目を覚ますと、霧はすっかり晴れていた。

さて、異変とやらは無事に解決したのか。

「やつと洗濯物が干せますね」

嬉しそうに、所帯染みた台詞を言う雛。それで良いのか厄神様。ま

あ良いか可愛いし。

「あらまあ。すっかり子煩悩になっちゃって」

「こんな時に、うちに来る暇があるのか？」

空中に開いたスキマから、上半身だけ出した体勢で現れる妖怪の賢者。

相変わらずの神出鬼没というか、何しに来たんだ。

「後始末に忙しい時期だろう？ 早く仕事に戻れ」

「つれませんわあ……冷たいですわあ……」

「それで？ 用件は？」

「ええ。その『後始末』に関することよ」

冷たく当たって、嘆いて見せて、すぐさま切り替える。

私達にとつては馴染んだ遣り取りである。

だから、そんな不安そうに見守っていないくて大丈夫だぞ、雛。

ああ、茶も出さなくて良い。すぐに済ませる。座っていて良い。

「本当に子煩悩というか……ちよっと、私に対する態度と違い過ぎないかしら？」

何を今更。

「それよりも、注文は？ 博麗の巫女に酒を贈り労いでもするのか？」
「……はあ。そうね、仕事の話に戻しましょうか……。」

異変の解決と、新しい住民を周知するため、宴会を開くわ」

「……酒の在庫は……鬼でも居ない限りは足りるか」

「話が早くて助かるわー。あ、鬼は居ないけど、吸血鬼は居るわね」

異変の締めには宴会するから酒を売れ。

紫の要求は、要するにそういうことだろう。

「人数は？」

「20人も居ないと思うけれど、ウワバミ揃いよ」

「また面倒な注文だな」

「お代ははずむわ」

言ったな？ 前に注文を受けた分を含めて、大量に売り付けるぞ？

相当な量売ったはずが、途中で酒が尽きそうになったらしい。

紫から追加発注が出された。しかも直接会場に運んでくれ、だど。

「ひ……あ、ああ、あな、あなた、は……！」

そして、宴会場まで酒を届けに行ったら、過去最大級の恐怖心を向けられた。

ん？ いや、十何年前にも良く似た目を向けられたな。二、三十年前だったかもしれん。

それ以前にこの少女、何か見覚えがあるというか、あの時の少女本人じゃないか？

そうだそう。思い出した。中華風の武道家少女だ。

「久しいな。あの後、体の具合は大丈夫だっただろうか？」

結構濃い厄と妖力を注ぎ込んだので、体調を崩したかもしれない。

「は、はひい……お、おか、おかげさま、で……！」

「そうか。それなら良かった。

貴女が居るということは、今回の異変は、あの館が主導か」

「は、い……そう、です……！」

うむ。何というか、凄まじく怖がられているな。

まあ仕方が無い。あの時は、早く仕事を済ませたいのもあって、些

かやり過ぎた。

「あれ以来も鍛練は続けているか？」

貴女の突きは、良く練られていた。機会があれば、また手合わせ願いたい。

勿論、今度は物騒な話は抜きにしてな」

「え……？ はい……ありがとうございます……」

我流の柔術擬きながら、武術自体は割りと好きなのだ。

「おや、これはこれは、初めまして」

と、この場の数少ない顔見知りに声をかけていたら、黒い翼の生えた少女が近付いて来た。

何か偉そうな雰囲気で、様子からして、中華風少女の上司。

つまり、あの館の主だろうか。小さいけど。

「初めまして。因幡コクトだ。山で酒を造っている」

「レミリア・スカーレット。紅魔館の主よ。

……なるほどね。こちらのワインも貴女が？」

「葡萄酒とはとても呼べない、フルーツワインだがな」

「良い味だわ。東洋でこれほどの品と出会えるとは思わなかった」

「光栄だ」

優雅にワイングラスを揺らすスカーレット嬢。

小さい形（ナリ）だが、やけに堂にいった仕草だ。私には真似できないな。

「……私達が幻想郷へ攻め行った時に、美鈴が世話になったそうね」

「メイリンとは、こちらの中華風少女か。」

そうだな。あの時に貴女の館を襲撃したのは、確かに私だ」

何だ？ 配下と正門を吹き飛ばした賠償請求か？ 紫に言ってくれ。

「フラーニー地下室の吸血鬼、私の妹とも戦ったそうね？」

「ああ」

思い出したくないが、私の生涯でも十指に入る命の危機だった。

本当に、『何か致命的な物を相手の手の中に奪われる』感覚は、心底気持ちが悪い。

危機察知が無かったら、あれだけで死んでいた。何だあれ。

つつい、強めの厄砲ぶちこんで逃げたわ。館の屋根や壁も吹き飛んだな。

もしや、そっちの弁償か？ 妹さんに言ってくれ。私は知らん。

「……不思議ね、貴女は」

何がだ。私は単にやたら長生きしただけの酒好き妖怪鬼だぞ。

「フフ……近いうちに、落ち着いて話をしてみるのも良いかしら？」

「都合が着く日があれば言ってくれ。ついでに、酒の注文もしてくれると有り難い」

黒兎酒造は、ご新規のお客様も大歓迎だ。勝手に納期を早めたりしない限り。

「それでは、果実酒を樽で1つ。おいくらかしら？」

「品を確かめてもらって、応相談、だな」

「雑じゃない？」

「酒造と生活にさえ足りれば、それで良い」

鬼など、1度として対価を支払わなかったしな。……改めて、あいつら許さん。

紫相手なら吹っ掛けるのは、私達なりの交流方法だ。

「そう……それなら、楽しみにしているわ」

何となく不安を煽る悪戯っぽい笑みを残して、スカーレット嬢達は他の者のところに向かって行った。

しかし、後ろに控えていた従者、最後まで一言も話さなかったな。

スカーレット嬢一行と別れてから、紫と雑談し、博麗の巫女と顔合わせして帰った。

巫女からは最大限の警戒を向けられたが。

まあ、私が身に纏っている厄は、人里で解放すれば瞬く間に壊滅させる規模だからなあ。

警戒されても無理は無い。というか、警戒して当然だ。

どうにも、人間という種族は、特例を除き厄に弱く付き合いつらい。

相手からすれば、私は常に致死毒を発生させているようなものなので、向こうも付き合いたいと思わんだろうが。

仕方の無いことだ。私が私である以上、人間と関わるのは難しい。こうして顔を合わせられただけでも、珍しいことだと思おう。そう言えば、宵闇のに良く似た小さいのも居たな。

縁者だろうか？

あの大喰らいが子育てするとは思えんが、もしかしたら、子孫という可能性もある。

機会があれば、あいつが好きだった酒でも勧めてみようか。

酒も良いけど肉、人肉、と言うだろうがな、あいつの場合は。

翌週、例の館、紅魔館に招かれた。時刻は夕暮れ。吸血鬼にとっては寝起きか。

手土産というか商品として、何十年か熟成させた果実酒を持参。

熟成期間がまだ短い酒は先日の宴会であらかた出したこともあるが、味が分かりそうな客を失望させる訳にはいくまい。

前の果実酒で私の酒造を測られても困る。あれは序の口と知るが良い。

後になって、もう少し早めの、吸血鬼姉妹の姉だけ起きている時間に行けば良かったと悔いた。

もしくは、メイリンとの組手を楽しみ過ぎて、延長したのが不味かったのか。

従者とワイン造りについて語り合っていたせいかな。

そもそもが、妹の遊び相手にするために、スカーレット嬢は私を招いた気がするのだが、どうなんだ。

まだ初対面時よりは狂っていないなかったおかげで、多少は相手できたが、もう勘弁しろ。

寝起きのくせに、私の顔を見てから戦闘へ意識を切り替えるまでが早すぎる。

嬉々として襲い掛かってきやがって。

明け方やつと帰宅して、雖に説教された私の身にもなってくれ、ちくしょう。

第花話

「母様が何だか疲れているみたいなのよね」

「私が原因じゃないわよ」

「知っているわよ。貴女が何をしたって母様は、ああまた紫か、で済ませるもの」

「母娘揃って、私に対する認識が酷くないかしら」

「合っているでしょ？」

「合ってるわね。怒らせない範囲で、色々とさせていただきましたわ」
「例えば？」

「水浴びしている隙に、服を振袖にすり替えたり」

「どうして呼んでくれなかったの……!?!」

「二百年くらい前の話だもの。それに、まったく照れもせず、着方が分からんから手伝え、って」

「どうして呼んでくれなかったのよ……ッ?!?!」

「だから、貴女が生まれる前だって言っているでしょう」

「今度また企画しましょう。母様ったら、いつも同じ真っ黒な服ばかりだもの」

「あー、あれ勿体無いわよねー。せつかくだから、思いつきり可愛くしてやりましょう」

「フリルが多い衣裳なんて着せたいわね。私とお揃いのとか」

「母娘ペアアルックって、仲良しアピールしてるみたいで何かアレよね」

「あつ、そう！ 良いじゃない、別に！ 良いじゃない！」

夕暮れ時の縁側に、ごろりと寝転ぶ私の背後で、娘と友がかしましい。

軽く一眠りはできたが、目が醒めた。

しかし、昔から妙に仲が良いな、お前達。

雛も、仕事の話以外の時だと、紫には遠慮が無い。

いやむしろ、私に対しての方が畏まってないか？

あれ？ もしかして私、所謂、娘が悩みを打ち明けにくい親なのか？

いかなな、疲労のせいで、思考が悪い方悪い方に……ぬわー。

何となく思い付いて、朝から雛と厄キヤツチボールをし、昼食を終えた午後のこと。

雛は厄神様のお勤めに行ってしまった、手が空いたので、私は無目的に飛んでいる。

今日は、酒造も休業だ。たまにはこんな日もある。

散歩というか遊覧飛行というか、とりあえずそんな感じだ。つまり、特に意味は無い。

漂うように風の向くまま気の向くままに。時折、手に持った酒瓶をラッパ飲み。

飲酒飛行を取り締まる法など無い。少なくとも幻想郷には無い。

気分任せ、ふよふよぐびぐび。あー酒が美味い。

いつの間にやら、随分と遠くまで来た。

幻想郷の中で見ると、妖怪の山とは反対方向の奥地。

眼下には、一面の向日葵畑。あ、酒が尽きた。

……何だったかな。確か、夏場のこの近辺には、何か不味いのがー

「死ね」

危機察知に従い、全力で急加速。

すぐ後ろを、極太の光線が通って行った。咄嗟に手放した空瓶が蒸発した。

「相変わらずの逃げ足ね」

「あー、久し振りだな、風見」

出会い頭に死ねと来た。お前こそ、相変わらずだな。

おかげさまで、休みボケしていた頭も冴えたわ。

季節の花が咲く辺りをうろつき、定住しないこいつだが、夏は主に太陽の畑で生活している。

つまりここだ。

「それで？ 今日はどうするの？ 戦う？ 逃げる？ どちらにせ

よ、私は攻撃するけど」

そしてこれである。

こいつは、私を見ると、とりあえず殺しにかかる。
ふぎけるな。私がいったい何をした。

理由は、何か強そうだから、つてお前、実は種族鬼だろう？ 角は
どこだ？

「……………」

「沈黙は戦闘の意思ありと見なすわよ？」

何でだおい。

しかし、今回は完全に私の失態だ。

普段はこんなところまで来ないからといって、呆けてこいつの生活
圏に入るなど。

「…………分かった、やろう」

「あらっ？」

驚きつつ妖力を手に込めるな話を聞け。

「ただし、スペルカードルールに準じ、有効打1発で決着だ。

拳でも蹴りでも、勿論、弾幕でも。

有効か否かの判断は、各々の矜持に任せる」

要するに、食らったと思っただ方の負け、である。

人間ならまだしも、妖怪であれば、こういう条件でも勝負が成り立
つ。

一瞬でも自覚した敗北に言い訳することは、妖怪の格、即ち存在を
蝕む猛毒だ。

「…………スペルカードルール、ね。

最近、八雲紫達が広めている新しい決闘法か。

いまだに、あの胡散臭いのと付き合っているのね、貴女」

あいつが胡散臭いことくらい、百万年以上は前から知っている。
ほっとけ。

「良いわ。どうせ、条件を飲まなければ逃げるつもりでしょう？」

「当たり前だ」

とことんやりたいのなら、どこかに消えた鬼でも探し出せ。

星熊とか、喜んでどちらか死ぬまで戦いそうだしな。どこに行つたか知らんが。

「では、始めようか」

常に纏っている厄に、本気の妖力を混ぜる。

妖力で強化された濃密な厄が、体の周りを覆う感覚は、正直、凄く気持ちが悪い。

中級妖怪程度なら、触れただけで『死ぬほど不運』になる厄だ。気分悪い。やめたい。

「……何年振りかしらね、その状態の貴女とやれるのは。

あはっ、やっぱり、貴女最高よ」

こちらの気も知らずに嬉しそうだなこの戦闘馬鹿。

前にこの状態を使ったのは、お前に散々追い回されて、逃げ場が無くなった時だ畜生。

紫、スペルカードルールを作ってくれて、本当にありがとう。

こいつが飽きるまで鬼ごっこせずに済むのも、このルールのおかげだ。

致命傷になるような『有効打』を貰わなければ、だがな。

改めて、何故に私は毎度毎度、戦闘馬鹿に付き合わされるのか。

いや、今は考えても仕方が無い。とにかく、生きねば。

「行くうか」

「ええ」

同時に互いが光線を放つ。

相殺。

爆発。

爆風より速く突撃してくる風見。

容易く音速を超える右の拳。

上体を反らし、襟と肘付近を掴み、両足を風見の腹に添える。

食らえ！ 我流空中巴投げ擬き崩し！

既に空を飛んでいるが、更に上空へと、風見を放り投げる。

我ながら、綺麗に入った。

格闘技の試合なら、これで決着なのだが。

そんな道理が通じる戦闘馬鹿では無い。残念ながら。
なので、風見の体勢が整う前に、一点集中の厄砲を発射。
溜める時間が足りず、最大出力では無いが、下位の鬼なら数体貫通
できる威力だ。

「……ふん」

天地逆さの姿勢で、横から傘で殴って逸らしやがった。
どんな素材で作られているんだその傘は。

幻想郷で唯一枯れない花、だったか？ 枯れないどころじゃ無い
わ。折れんわ。

「今度はこっちの番ね」

台詞と共に、視界を埋める弾雨。

1発1発が殺意溢れる妖力の塊だ。

……フランといいこいつといい、どうして私に撃たれる弾幕は、殺
傷力抜群なのか。

しかも逃げ道が皆無など、弾幕ごつこの風上にも置けない。
守ろう、スペルカードルール。守りたい、私の平穩。守らせる本当
に。

それより今は、目前の反則弾幕だがな。
嫌になるな本当に。

「防御結界、十面、擬似半球」

二十面体を半分に割った形の結界を、前方に展開。私の『弾く』性
質を付与。

雪崩れ込んでくる弾雨を、弾いて弾いて弾いて弾く。

可能な限り弾同士をぶつかり合わせて、結界に到達する数を減ら
しー危険・後頭部・屈めー。

危機察知に対して、条件反射で回避行動。

私の頭上を通過する、風見の拳。

拳圧で耳がもげるかと思った。兔から耳を奪おうとは、何たる暴虐
か。

自分で結界を蹴飛ばし、同時に、蹴りと逆方向に私の足を結界によ
り弾く。

本来の反発力に結界で弾いた分の力を上乘せし、高速移動。物凄く足腰が痛い。やはり、この移動方法、便利だけど不便だ。骨盤が砕けそう。

しかし、痛がっている余裕は無いので、間合いを取りつつ牽制の弾幕。

応じて風見も弾幕を放つ。だから数と威力が殺意みなぎり過ぎだと。

撃つ。

弾く。

殴る。

投げる。

蹴る。

避ける。

撃つ。

どのくらい続けたか。

何度の攻防を、何発の弾幕を、交わしたか。

遂に決着。

打撃をいなしつつ私が放った厄砲が、風見の腹に直撃した。

早撃ちに全力を注いだため、致命傷にはほど遠い。

肌が裂けて、多少血が滲んでいる程度だ。

……何故、直撃したのに、それで済んでいる、お前。

撃った私が、有効か迷うくらいに軽傷。

だが、風見の動きは、止まった。

「……………有効打、ね」

「ああ。私の勝ちだ」

「ええ。私の負けよ」

良かった。勝負の条件は覚えていたか。

完全に殺す気満々な攻撃しかしてこないから、勢いで忘れていないか不安だった。

あ……………疲れた。

「ねえ。このルールなら、これからもやるのよね？」

嫌に決まっているだろう。

嫌だ。とても嫌だ。心から嫌だ。

しかし、本気の殺し合いよりはマシだ。

「受けられる時ならな」

「そう。今は？」

「断る」

ふざけるな馬鹿。

「冗談よ」

嘘をつけ。七割は本気だったぞお前の顔。

もし私が受けていたら、その瞬間に開戦していただろう。

「……そうね。次の楽しみにしておきましょうか」

良い笑顔しやがって。

何も知らない男が見たら、惚れそうなくらい綺麗に笑いやがって。

「またやりましょう」

もう嫌だ。

だから、腹に滲んだ血を拭って舐めるな、怖い。

そのくらいの傷、すぐに治せるだろう、お前。

どうして治さずに眺めているんだ怖いって本当に。

ようやく風見が向日葵畑へ降りていくのを見届け、私は家路につく。

空に道など見えないが、まあ、それは良いとしてだ。

帰って寝たい。

夕飯の前に一眠りしたい。

疲れた。

凄く疲れた。

風見について、誰かが「幻想郷で最も凶悪」と評していたことを、再認識した。

そう言えば、何故か「最も危険」の評価をされているのは、あいつではなく私らしい。

解せぬ。

自分から人間を襲ったことなど、1度も無いのに。

悪い妖怪を退治する、とか調子付いた輩も、生かして人里に届けてやっつたのに。

何故だ。

私より危険な奴くらい、そこら中に居るだろう。

人食い妖怪も掃いて捨てるほど居るぞ。

どうして私がそこまで危険視されねばならん。

ああいや、思考が妙に迷走したが、今はそんなことはどうでも良い。

それはともかく、早く帰って寝よう。

少し休んで体力が戻ったら、雛と食事して気力も回復しよう。

とりあえず、眠い。

第桜話

「……」

「……」

「……」

「……」

「……おいこら伊吹」

お前、いったい何を企んでいやがる。

「……」

答えるつもりは無い、と。

それが、お前の応えか。

「……」

上等である。

この私にまで、祭りの舞台に立てと誘うなら、乗ってやる。
ただし、だ。

「私が関わる以上、全て台無しになる覚悟をしろよ？」

「……」

まったく、上等だ。

久方振りの、馬鹿騒ぎだ。

この寒い中、雛は厄神様のお勤め。

長い冬のせいで、日に日に備蓄が減る人里には、厄ばかりが溜まるらしい。

ちゃんと休めているのだろうか。心配だ。

人里が厄で満ちようと、雛の体調の方が遥かに大切だろうに。

人間に対する同情や共感？ 無くも無いな。僅かばかり。

「……最近の貴女、本当に考えていることが顔に出やすくなったわね」

「昔はどうだったんだ？」

「基本的に、お酒のことしか考えていない顔でしたわ」

なんだ、今と大して変わらん。雛と酒のことしか考えていない。

「で？ 何しに来た。

お前が『春に納品する』よう注文した分なら、まだ冬だから渡さんと狐に伝えたはずだ」

「あまり藍をイジメないでくださいます？」

「どうか、全て分かった上で言っているわよね、貴女」

「なんのことやら。」

「多少冬が長引くくらい、よくあることだ。氷河期よりは暖かいな。」

「まあ冗談だが。」

「そろそろ、博麗の巫女達が動く頃合いだろう。」

「何のために春なんぞ集めさせたのかは知らんが、さっさと戻れ黒幕」

「そして異変解決されて冬を終わらせろ。」

「……やはり、協力するつもりは無いかしら？」

「興味も理由もやる気も無い」

「一刀両断どころか、乱切りね」

「騒動には関わらない。可能な限り回避する。」

「必要性も無しに私が揉め事へ首を突っ込むなど、害悪でしか無いと知っている。」

「私の身一つで済む話であれば、好奇心が勝ることもあるが。」

「少なくとも、博麗の巫女など『人間』が解決する『異変』は、私という厄種が混じるには万が一の代償が大き過ぎる。」

「ではまた、いずれ、ね」

「その「いずれ」というのは、この異変が終わった後を指すのか、私がいっつか他の異変に関与する時を指すのか。」

「問い返す暇を与えず、紫はスキマの中に潜った。」

「……本当に、何しに来た、あいつ。」

「風が冷たいと思いつつ、いつも通りに酒を造っていたら、異変は解決した。」

「春告精が飛び回り、雪が溶けて、遅咲きの桜が開く。」

「幻想郷に、ようやく春が来た。」

博麗の巫女や、前回も居た魔法使いだけでなく、紅魔館の従者、十六夜も異変に参戦したらしい。

おそらくスカーレット嬢が、自分の陣営も1枚噛んでおこう、とか考えたのだろう。

あのお嬢様に従うのは大変そうだ。

十六夜とは、たまに紅魔館に行った時に、雑談かワイン談義をするくらいの関わりだが、何か労いの品でも用意しようか。

雰囲気はお堅いが、意外と甘い酒とか好きそうな気がする。

そして、前回に続いて、異変後の宴会。

今回の異変関係者に加えて、紅魔館の者を始めとする、多くの参加者が集まった。

言うまでも無く、数が増えれば、酒も増える。

前の宴会よりも更に大量の酒を運ぶことになった。狐が。あと、その式の橙という化け猫。

この橙については、特に私に噛み付くことは無いので、大して気にならない。

狐に何か吹き込まれたらしく、警戒は向けてくるが、可愛いものだ。それはそれとして、追加発注分の用意ができた、持っていけ。

追加発注に応じること数回。

宴会が終わらない。

正確に言えば、数日後には花見の宴会、その後にもまた花見の宴会と、別の宴会が始まる。

私と雛も、遅めの花見はした。

秋の姉妹神達は、あと数ヶ月は活動しないため、天狗や河童くらいしか呼べる相手が居ないが。

階級が低い天狗は、私の視界に入ろうともしない。

幹部連中も、天魔以外はビクビクして花見どころじゃない。

それでも『鬼の酒』もとい私の酒を飲みに来る辺り、こいつらも筋金入りの酒好きだ。

酒への思い入れは非常に理解できるので、私としては語りたいのだが。

鬼だろうと真っ正面から向き合う天魔くらいだな。私との飲み比べに応じるのは。

河童については、私が考案したビール工場に関する会議が始まる。

だが、どうにも河童という種族は、大規模な工事には向かない。

各自が自由に開発するのは、驚くほど得意なのだ。

好き勝手に改造しようするため、まさしく船頭多くして、という奴である。

連中なら、山に登る船くらい勢いで造るだろう。意味も無く。

だがそれでも、河童の技術力は魅力的だ。

河童ビール大量生産を実現するため、私達は今日も議論を続ける。

この幻想郷にビールの大流行をもたらすまで、私の挑戦は続く。

たまには他者が造った酒も良いものだ。

雛も、天狗よりは河童と談笑していることが多い。

というか、天狗達は、雛の不興を買ったら私に殺される、と考えている節がある。

間違っではないがな。

だが、雛は早々怒る娘では無いし、もう少し気安く接して良いと思うのだが。

まあしかし、連中からすれば、関わりが浅くどこに逆鱗があるか分からん相手とは、話しづらいか。

仕方の無いこと、なのだろうか。

他に、紅魔館で催されたパーティーにも呼んでもらえた。ワインが美味い。

ついでに、私がしばしば訪ねるに慣れている彼女達に、雛の紹介もしておく。

人間が、強大な能力を持ち『人間』扱いするべきか微妙な十六夜だけなので、雛が今後関与することは少ないだろう。

何にせよ、雛の可愛さを知る者が限られているなど、世の損失だ。

友達を増やそう。

冗談半分は別にして、紅魔館という幻想郷でも有力な陣営と顔を繋いでおくのは悪くない。

珍しい存在として、図書館の魔法使いに出自など色々聞かれています。

あの魔法使い、私には全く近付いて来ないのだが。

それだけ難が話し掛けやすい、ということだな、うむ。

なお、フランはパーティーの間ずっと、暴れないよう我慢し続けることに成功した。

成長したものだ。以前なら数分ももたなかつただろうに。

だがしかしスカーレット嬢よ。

ご褒美として、私が好きなだけ遊んでくれる、というのは何だ。

自分でやれ。私は戦闘なんて御免なんだ。

フランからキラキラした目で見られて、断りきれなかったが。

相手をしたが。死ぬほど疲れたが。

何故に、私へ向けて放たれる弾幕は、殺傷力に溢れているのか、切実に訴えたい。

横で見学していたメイリンも、私なら大丈夫って、なんだその信用。

初対面時の印象か？ 私はあの時、そんなにも怖かったのか。

そろそろ限界。頼むから、助けてくれ。死ねる。

油断した瞬間に手のひらを握ろうとするな。即死するわ。

五百にもならん若者の体力を基準に、遊び続けようとするな。

年寄りに徹夜遊びは堪えるのだ。休憩させる休憩。

体はまだしも、気力がもたん。力尽きるわ。枯れるわ。

ついでに、十六夜は、やはり甘い酒もいける口だった。

若干口許が緩んだのを、確かに見たぞ、私は。

よし、今度また、好みに合いそうな酒を用意してやろう。

混合酒についても、紫から外の世界のカクテルレシピとやらを貰ったので、色々作れる。

女性に好まれると紹介されていた奴も試してみよう。

意外な相手の意外な好物発見など、何年生きてても楽しめるものだ。

あと、花が増えて気分が盛り上がったのか知らないが、風見が山ま
で乗り込んできた。

なぎ倒される天狗達。

私を探して暴れる風見。

普段はできるだけ私に関わろうとしない射命丸が、伝令とはいえ私
の家へ直接来るなど、どんだけ非常事態だ。

足が速いからと、上司から拒否権無し of 命令で派遣されるお前も、
災難だよな射命丸。

震えながら土下座せずとも、私が原因の一端なら出向くから。

そんな、逃げたいけど上から直々に急げって言われた逃げたい逃げ
たい、という顔をするなよ。

その表情を見た雛から不快げな目を向けられ、ひきつった悲鳴をあ
げる様子は、最早喜劇的だな。

今度、新聞取ってやろうかな、と、少しだけ思った。思っただけだ
が。

妖怪の山上空で風見と砲撃し合っていたら、止めに来たはずの狐も
加わり、三つ巴の乱戦になった。

紫の涙目なんて、何百年か振りに見た。正直すまんかった。

そして、遅咲きの桜が散っても、宴会は終わらない。

今日も今日とて、何処かで酒が注がれる。

それなり以上の力を持つ者は、とうに気付いているだろう。

辺りに漂う、妖気と霧と存在感。

久し振りだが、間違えようの無い気配。

何よりも不可解なことは、こいつ、この私まで萃めようとしてやが
る。

お前、何を企んでいる、伊吹。

第巫話

「ねえ……初めて見た時から聞きたかったんだけど」

「なんだ？」

「あんたさあ……どうして、妖怪らしくなくせして、妖怪でいられるわけ？」

「ああ、それか」

「害意とか悪意とかが、まるでない。」

「それどころか、何かをしよう、してやろう、って感じすらない。」

「なんで、そんな状態で存在しているのよ？」

「しかもバカみたいに強いし、と唇を尖らせる少女。」

「戦闘中とは違う年相応の表情は、なかなか微笑ましい。」

「……なに笑ってんの？」

「いや、何でもない」

「てつきり、人里を襲わないか警戒されているのだと思っていたが。」

「成る程、勘だけで無く、目も良いらしい。」

「妖怪というのは、良く分からないけれど恐ろしいモノ、だ。」

「畏れられるからこそ、妖怪は妖怪だ。」

「私が何かせずとも、私は、妖怪だから。」

「だから、私が何かする必要はない」

「必要が無いからしない。したいとも思わない。」

「狐は、それが気に食わないらしいが。知ったことでは無いがな。」

「私が不吉で、私が不運で、私が厄災で、私は妖怪だ」

「……結局、あんたが何なのか、よく分かんなかったわね」

「それで良い。」

「それが良い。」

「私を理解する『人間』なんて歪んだ者は、居ないに越したことは無い。」

「もしも、そんな者が現れてしまえば、きっと私は、触れずにはいられない。」

「紫の、洩矢神様の、雛の、手を取ったように。」

触れたいと、傍に居たいと、願ってしまおう。
害さずに、いられなくなってしまう。

姉から逃げ出した時のように。

何年生き永らえようと、私は変わらず、弱いままだ。

さて、何やら企んでいるらしい伊吹の奴を殴りに行こうか、と決め
たは良いのだが。

「……あからさまな誘い過ぎて、つい逆らいたくなるな、これは」
自覚してしまうと、引つ張られるというか手繰り寄せられるという
か、とにかく意図的に誘導されているのが分かる。

しかし、危機察知が「鬼と戦う羽目になる」と訴える進路も、誘導
方向と同じだ。

こと我が身の危険に関してなら、私の能力は、未来予知じみた性能
を發揮する。

「大人しく、台本通りに進めるのが吉、か」

少しばかり釈然としないが、たまには良いだろう。

どうせ、私が関わった時点で、誰も彼も不運になることだけは決
まっている。

「その通りすがりの兎さん。ちょいとお時間良いかしら？」

「……いきなりお前か」

胡散臭いと評判で、実物は噂以上に胡散臭い、八雲紫の登場であつ
た。

「宴会に届ける酒なら、狐と橙に運ばせたぞ」

「ええ。貴女に関しては、宴会を続けさせようとしているとは、思っ
ていません」

ゆっくりと、鞘から刀を抜くように、空気が変わる。

冷たく。鋭く。怪しげに。

「ただ、どうしても、納得いかなくてね」

扇で口許を隠し、紫が語る。

「どうして、貴女が『こんなところ』を通りすがっているのかしら」
どうして急に、「異変を解決する気」になったのか、と。

相変わらず、遠回しな言い回しを好む奴である。

「しばらく顔を見ていない知己に、招待されたものでな」

「……………そう」

言いたいことがあるなら、はっきり言え。

面倒臭いなこいつ。

「それでは」

ぱちり、と、紫が扇を閉じる。

「この先に貴女を行かせても良いか、試させていただきますわ」

「……………ああ、まあ、そういう展開だろうな」

分かっていただき。

分かっていたとも。

どうせ、厄介なことになるだろうことは。

「心配性なお前に免じて、『博麗の巫女なら死なない程度』の厄でやってやる」

「お心遣い、有り難く受け取りましょう」

だからお前も加減しろよ。いや、冗談抜きで。

こちらだけ縛り有りで紫と勝負とか、処刑でしかない。

互いに口を閉ざし、妖力を溢れさせる。

まずは小手調べ。

体に纏っている厄を拳大に弾き出し、妖力で球状に覆う。

これを、十重を十重に繰り返す。

自前の妖力をほぼ使わない、楽々厄弾幕の完成だ。

鬼や風見、あと狐とやる時には、弱すぎて目眩ましにもならない技術である。

だが、『人間』相手であれば、この程度でも攻撃扱いできるだろう。
「行くぞ」

周囲に漂う厄弾が、一斉に紫へ向かう。

左右から挟み込む軌道で、尚且つ、角度やら高さやら速度やらをず

らしてみろ。

回避されたり、結界に阻まれたりした弾は、ぐるり周り私の手元へ。そして再び、軌道と速度を変えて放つ。

放ちつつ、更に弾を生成し加える。

百を優に超える、手数重視の厄弾が、私と紫の間を飛び交う。

初めての弾幕ごっこらしい弾幕ごっこで、年甲斐も無くはしゃいでいる自覚はある。

「……まったくもう」

自覚はしているから、その生暖かい目をやめろ紫。

良いじゃないか。

いつもいつも、風見やフランの相手ばかりさせられているんだぞ。

「1発1発の威力を弱めても、こんな数の厄に当てられたら、『人間』は生きられないでしょう?」

あ。

「完全に忘れていた、って、顔に書いてありますわね」

はい。

「頭は悪くないはずだと、知ってはいるけれど……」

空中に開いたスキマへと、厄弾が全て吸い込まれていく。

やってしまったと自覚した私は、おとなしくそれを見届けた。

「お酒と娘が絡まない時まで、ポンコツにならないでくださいます?」

「酒と雛が絡んだ時の私を、何だと思っているんだ、お前は」

「親馬鹿酒造馬鹿」

ぐうの音も出ない正論で返された。

まるで反論できん。

「……やはり、弾幕は私に向かないな」

知っていたが。

対『人間』に使うと、どうやっても厄が過剰だ。

純粋な妖力として放とうにも、私の妖力は厄と親和性が高すぎる。

手元を離れた途端、周囲の厄と勝手に混ざるのだ。

弾幕にするには、些か以上に扱いづらい。

この辺りについては、私よりも雛の方が遥かに上手い。

全ての弾に『弾く』性質を付与すれば……駄目だ面倒臭い。
放出した直後であれば、厄を取り込むことも無いのだが。

「なので」

両手から厄を弾き、代わりに妖力を纏わせる。

一足跳びで、紫の懐へ。

飛行速度は天狗に譲るが、地上における瞬間速度で劣るつもりは無い。
い。

接近戦が不得手な紫が相手ならば、虚を突き反応すら許さないことも可能だ。

「こちらで行こう」

下方から顎を狙った当て身。

と同時に、『弾く』妖力を放射。

「くっ！」

咄嗟に防御する紫。だが、無駄だ。

攻撃力をほぼ失わせ、相手を吹き飛ばすことに特化させた妖力は、守りの上からでも、紫を宙に浮き上がらせる。

そして、紫が体勢を整えるよりも尚、私とその頭上まで跳ねる方が、更に早い。

「天に昇りて地に墜ちる、と」

先程の当て身とは逆の手から、再び至近距離で妖力を放出。

勢いを逃がすことも出来ず、紫の体が大地へと吹き飛ぶ。

しかしながら、この相手もまた、歴戦の猛者だ。

「……むう。やはり、易々と受けはしない、か」

「……………いいえ、お見事でしたわ」

地面に叩き付けられる寸前に、紫は自らをスキマの中に飛び込ませ
ていた。

着地した私の前に、新たに開いたスキマから、紫が姿を表す。

負傷は無し。

あくまで『人間』相手を想定した技なので、当然と言えば当然か。

あの速度で叩き付けられたら死ぬとかは聞かない。あれ以上に加減などできん。

「それで？ 私は合格か？」

「……………そうですわね」

不承不承と顔に出ているぞお前。

「心配せずとも、博麗の巫女が私に殺されることはあるまい。」

宴会でしか会っていないが、相当な実力者だろう、あの娘は」

霧雨という魔法使い未満や十六夜もまた、『人間』としては破格だが、あれは別格だろう。

仮に私が全力を尽くしたとしても、殺しきれるかは、微妙なところだ。

返り討ちに遭うつもりは全く無いが。逃げるが。

「相手が貴女でさえなければ、確信できるのですけれどね」

本当に、お前は私を何だと思っているんだ。

親馬鹿酒造馬鹿は、さつきもう聞いたぞ。

「この幻想郷における、最大級の不確定要素ですもの」

溜め息混じりに言うな。へこむ。

例の危険度とかいうやつ、絶対にお前が1枚噛んでいるだろう。

私など、酒を造って雛と過ごせば満足な、無欲無害の妖怪鬼だというのに。

今回？ まあ、何事にも例外はある。要するに興味本意だ。

わざわざ戻ってきた伊吹が、私まで呼びつけるなどは、思いもしなかったからな。

何がしたいのか問えば、どうせ答えは馬鹿騒ぎなのだろうが。

「自由に動いて構いませんけれど、動向は常に確認させていただきますからね」

釘を刺してから、ようやく姿を消す紫。

ああ言った以上は、どこからか監視しているのだろう。何となく視線を感じる。

まあ、見られているのは、幻想郷に来てから、いつものことだ。

来る前も度々似たような感覚があったし、慣れた。慣れて良いものは別にして。

「…………とりあえず、危機察知が『鬼』に反応する方向へ進むか」

初戦からやたら強敵が出てきたが、気を取り直して行こう。

で、気を取り直そう、と思ったものの、その後もどいつもこいつも、強敵揃いだっただ。

白玉楼の亡霊姫、西行寺幽々子。

マーガトロイドとノーレツジの魔法使い2連戦。

更にスカーレット嬢。

何だこの難易度は。

とは言え、『人間』を相手にするよりは、余程マシか。

多少の厄では早々死なない連中だ。

それに、私の危機察知は、『致命的な攻撃』と相性が良い。

西行寺の姫なんて、全ての技を予知できるほどだ。

要するに、それだけの殺傷力が込められている訳ではあるが。殺す
気かい。

彼女の蝶と私の厄弾が交差する光景は、端から眺めれば、さぞかし
魔的だったろう。

当事者としては、常に死の気配を感じっぱなしで、寿命が縮む思
いだった。

私の寿命が、あと何万年残っているのかは知らんが。

とにかく、互いに生きて彼女達を退けられたのだから、良しとしよ
う。

あー、怖かった怖かった。もう疲れたので帰って良いだろうか。

駄目かなあ……。

もう伊吹が何をしたいかとかどうでも良くないかなあ……。

「ちよつと、なにボケツとしてんのよ?」

どうして博麗の巫女と戦う羽目になっているのだろうなあ……。

「あんたは………犯人じゃないみたいだけど……」

「なら、見逃してもらえると有り難い」

「有り難いし、有り得ないわね」

「だろうな」

と、なればだ。

「とりあえず、犯人じゃなくても怪しいことには変わりないわ」
酷い理論展開である。

「……仕方が無いな」

「仕様がないわね」

然り然り。

「では、お手を拝借させていただこう」

「踊りでもするわけ？」

ああそうだな。踊り出したいくらいに、笑えてくる。

きつと、伊吹のせいだ。

博麗の巫女、人間の代表と相見えるこの瞬間が、愉快で堪らない。
頼むから、死んでくれるなよ。

紫に私が殺される。

さて、とまれこうまれ、開戦だ。

先手を取られたら負ける。

危機察知が、訴える。

分かっているとも。

故に、先手必勝。

足下に結界を展開。

踏み込みと同時に足の裏を弾き跳ばす。

音を背後に。

空気の壁を切り開いて突き進む。

勢いを乗せ前蹴り。

爪先に円錐形の結界。

巫女もそれは『見えて』いたらしい。

私の蹴りに合わせ、極小の防御結界を張る。

激突。

衝撃。

ぶつかり合う結界と結界。

拮抗状態の上から妖力を放射し、結界ごと巫女の体を弾く。

吹き飛ぶ巫女。

その後を追わせ、厄弾を5発。

的確に避けて防ぐ巫女。

再び踏み込む。

直上を取る。

焦った巫女が結界を全身に。

良し。

あの結界強度なら、多少強めの厄でも、死にはしない。

厄を収束。

妖力を混ぜる。

厄と妖力を圧縮して、配分を調整。

最適効率で、厄を強化。

照準。

頭の中に、撃鉄を落とす。

掌から大地に向けて厄砲を発射。

巫女の結界を、厄の奔流が飲み込む。

「……………終いだ」

着地して、一息吐く。

「ふざっ、けんじゃ、ない、わよ……………！」

あれで立てるか。流星だな。

「無理はするな。」

況してや、『空を飛ぶ』のはやめておけ。

それだけの厄に囚われた状態で『飛べ』ば、貴女は2度と、『幸運にも縛られなく』なるぞ」

結界は壊れていないが、染み込むようにして、厄が巫女を穢す。

「貴女なら分かっているだろうが、そちらが先に仕掛けていたなら、勝ったのは貴女だ」

初めから『飛ばれ』たら、私には、否、妖怪には、手出しのしようが無い。

私を見極めようとして、先手を譲らなければ、勝者は彼女だった。今回のこれは、単なる馬鹿騒ぎ。異変では無い。

この場合は、どうか私に任せてもらいたい」

「馬鹿騒ぎも異変も、私にとっては同じことよ」

成る程、道理だ。

しかしながら、今回については、私の勝ちである。

大人しくしておいてもらおう。

どうせ暫く経ったら、紫が回収に来る。

伊吹は、私が相手をしよう。

第萃話

「帰るのか？ 伊吹」

「いや、もう暫くはこっちに居るつもりだよ」

「そうか」

「今回は会えなかったけれど、博麗の巫女っていうのにも興味あるしね」

からからと笑う表情は、先程までとはうって変わって、憂いが無い。

まあ、色々面倒だったり死にかけたりしたが、気は晴れたらしい。

それは何よりだが、1つ問題がある。

「博霊の巫女に会うのなら、明日以降にしておけ」

「どうして？」

「すぐには厄落としが済まないだろうからな」

「あんたのせいかい」

失礼な。

元はと言えば、私をこの馬鹿騒ぎに招いたお前のせいだ。

「……見つかっちゃった、か」

「呼んだのはお前だろう」

「まあ、そうだけど」

幻想郷の何処とも知れない、妖霧に満ちた空間。

そこに、伊吹は待ち構えていた。

まさしく、待ち、構えていた。

危機察知がやたらに肌を刺すので、まさかとは思っていたが、こい

つ、酒を飲んでいない。

完全な素面で、戦うつもりのようなのだ。

いや、ふざけるなよ。

どうしてそうなる。

年がら年中呑み続けているのがお前だろうが。

何故こんな時に限って酒を断つ。

しかも、幻想郷中に散らしていた霧を、此処に萃めていやがる。霧散させていた自身を、戻している。

妖霧が伊吹の肉体に還る度、その妖気が充実していく。どうやら、全力でやる気らしい。

何でだおい。

単に馬鹿騒ぎしたいだけかと思つて来てみれば、想像を遥かに超える全力振り。

酷い話ではないか。説明を要求する。まるで意味が分からん。

もう少し気楽な案件だと思つていたのだが、どうしてこうなる。

「……………まあ仕方無いか」

何か騙された気分だが、成ってしまった状況は変わらない。

逃げたら、背中を向けた瞬間に殺される。

良し。諦めよう。やらなきや殺られる。いつものことだ。

その上で生きよう。

なあに、綱渡りは割りと得意なのだ。

どうにかなる。どうにかする。どうにかしよう、生きる為に。

「変わらないね、コクト」

「お前は変わったのか、伊吹」

私の問いに、ぎちりと、伊吹が顔を歪める。

「人間も地上も、変わってしまったから、鬼は見限つて、見捨てたのよ」

伊吹は、下手糞に笑った。

ああ、全く、なんて有り様だ。

嘘が大嫌いなくせに、たまに嘘を吐こうとするから、そんな無様を晒すのだ。

見限つたと嘯くのであれば、何故今更になつて、関わりうと思ひ、こうして行動に移したのか。

好きなモノを嫌おうとするなど、全く、見苦しい。

「そうやって、ぐちやぐちやと思ひ悩む鬼は、お前くらいだろうさ。

なあ、龍神の子よ」

本当に見限つたのなら、それを見限つたという過去すら忘れるもの

だ。

鬼らしくも無く、割り切れずに引き摺るなど。

見ていられないな、伊吹。

そう、言外に伝える。

伊吹は、余すこと無く、私の声を受け取ったのだろう。

「私は鬼だ」

あらゆる感情が入り雑じっていた笑みが、怒りに染まる。

ゆらゆらと揺らめく炎の様に、不確かな激情に、塗り潰される。

「鬼の、伊吹萃香だ」

本当に、なんて無様だ。

鬼がわざわざ、鬼気迫る面を作るなど。

「ああそうだ。お前は伊吹だ。」

そして今、此処には、お前が居て、私が居る」

今がいつか。

此処が何処か。

とうの昔に見限り、もう既に忘れられている。

外の世界を見限り、この地からも立ち去った。

それがいつたい、何だと言うのか。

「私が居て、鬼のお前が居る。」

なら、それで充分な理由だろう」

折角こうして、誘いに乗ってやったのだ。

暇潰しだろうと、憂き晴らしだろうと、付き合ってたやる。

泣きたければ泣くが良い。

鬼の目には涙を見せられないならば、せめて上手く意地を張れ。

「……………ああ、そうだね」

初めて会った時からだ。

ずっと私達は、顔を合わせる度に、こうしていただろうが。

「……………あんた……………最高だよ、コクトオツ!!」

殴りかかって来い。

張り倒してやる。

「さあ、『いつも通り』の、馬鹿騒ぎだ」

両者同時に、私は厄を、伊吹は周囲に漂う『力』全てを、萃め、束ね、統べる。

総量は、圧倒的に伊吹が優勢。

当たり前の結果だ。能力の汎用性が段違いなのだから。だが、それでも。

私の方が、伊吹よりも巧い。

「はっ！」

収束を開始したのも同時なら、放つのもまた同時。

合わせる気が無くとも、呼吸が揃う。

互いに発射した砲撃がぶつかり合って。

そして。

一拍の間も置かず、私の厄が伊吹の『力』を貫いた。

伊吹も、密度を高めて固めていたようだが、星熊の肉体をも穿つ貫通力の前には無駄だ。

進路を逸らすこともできず爆発四散。厄砲はそのまま伊吹へと直進し――

「かあっ!!」

疎められて消し去られる。

やはり、あの巨弾に勢いを殺されたか。

やっぱり、想定通りに。

伊吹が初弾に対処している間隙を縫い、間合いを詰めて、厄砲で砕いた『力』を私の妖力で絡めとる。

即座に束ねて、次弾装填。

「そら次だ」

収束率では先程より見劣りするが、伊吹が放った分を奪い、威力については十二分。

初弾と同様に掻き消されても、隙は作り出せるはず。

そう、考えた、瞬間。

危機察知が脳内に鳴り響く。

全力で回避しろと、吠え散らす。

私の第二射を疎めた伊吹。

大きく開いた口。

上下の歯の間に輝く、極限まで圧縮された妖力。

こいつ、開戦の時点から、口内に萃めていやがったか。

しくじった。流星に喧嘩慣れしている。

光。

一瞬前まで私の胸があつた位置に線が走る。

弾速に特化したそれは、まさしく、光線。

遅れて、大気を切り裂く音と、息が詰まる程の熱。

鼓膜を通して脳髓が揺れる。

熱せられた空気で、喉が焼ける。

速さ重視と言えども、最上位の鬼による一射だ。

その威力たるや、直撃すれば、私の体など絹ごし豆腐の如く粉碎す

る。

回避して尚も、余波だけでこの有り様。

「……あつー」

致命的な隙を生まされたのは私の方。

不味いと理解していながら、肉体が硬直する。

集中力を取り戻した時には既に、目と鼻の先には、拳を振りかぶる

伊吹の姿。

避けること、能わず。

受けること、能わず。

防御結界も、展開が間に合わない。

死ぬ。

この窮地を絶命を、切り抜けなければ、私は、死ぬ。

死ねない。

生きたい。

ならば、凌げ。

凌ぎきるしか道は無い。

鬼の四天王の拳をいなした経験は無い。

それがどうした。
あんな馬鹿げた腕力をいなそうと試す気にはならない。
だから何だ。
やらなければ、殺られる。
できなければ、死ぬだけだ。
他に、生きる術は無い。

視る。

伊吹の拳。

腕と背筋と下半身の連動。

体軸のうねり。

全身の躍動。

その全てを視る。

感覚を最大限に研ぎ澄ます。

計る。

どうすれば良いか。

どう合わせれば良いか。

どう流せば良いのか。

どうすれば、生き残れるのか。

思考を最高速まで加速し、計測する。

視て、計って、そして実践。

迫り来る拳。

その右手首に私の左手を添えて、力の流れに逆らわず、向きをいな
そうと試みる。

左半身が吹き飛ばされた。

気がした。

気のせいだ。

肩甲骨も肩も肘も手首も指も、ちゃんと繋がっている。

指に関しては、逃がしきれなかった衝撃で、出鱈目にへし折られたが。

だけど、千切れてはいない。上々だ。充分だ。

まだやれる。

びりびりと左腕に痺れが走る。

無視。気にしている余裕は無い。

渾身の拳をいなされた伊吹が、漸く見せた隙。

この機、この瞬間を逃せば、後は無い。

思考速度は緩めない。最高速を維持。

3発目の厄砲を練り上げ、伊吹の腹に撃ち込む。

掴んだ好機を、強引にでも押し広げてやる。

伊吹が吹き飛ぶが、損傷は軽微。

溜める間も無い砲撃で貫ける程に、最上位の鬼は易く無い。

そして、貫き得るだけ厄を束ねるには、まるで時間が足りない。

で、あれば、不足する分は、数で補おう。

既に、場は整っている。

三度繰り返し返した厄砲による厄と妖力が混じり合った『力』は、私の手を離れても、私の物。

意識を拡散しつつ、それぞれに集中。

思考速度は、無理矢理に最高速を保たせる。

脳が熱に焼かれる過負荷。

構わない。思考を回す。

体から離れた妖力を、再度掌握、弾幕を形成。

瞬時に揃える、厄弾による包囲網。

その全てを、伊吹に叩きつけ、並行し、新たな厄弾を追加する。

周囲に漂う厄と妖力を再構築しつつ、更に、私自身の妖力も弾幕として放つ。

秒間で百に迫る弾数を撃ち込みながら、絞り出す様に弾を加える。命中し砕けた弾からも、再び弾を形作り放ち当てて砕けて構築し発

射。

十字砲火どころでは無い、四方八方上下からの多重射撃。厄の豪雨。

時間と共に雨脚を強めていく。

妖力の底が見えても、弾幕を増し続ける。

逃がさない。

この状況を崩すな。

大量の情報的高速で並列処理する、破裂しそうな頭痛。

それも無視する。

今もまだ、危機察知が、手を止めたら死ぬ、と叫んでいる。

弾幕は最早、伊吹を包み込む巨大な球体の様。

莫大な数の厄弾が、何度も何度も伊吹の体を叩き続ける。

脱出させない。

能力を使う暇も与えない。

そうしなければ、勝てない。

頭が痛い。

脳が痛い。

噛み締めている奥歯が痛い。

いつの間にか、視界が赤い。

口の中に血反吐の味がする。

それでも、弾幕は絶やささない。

これが命綱だ。

これが私の生命線だ。

手放さない。

止めない。

止めたら負ける。

負けたら死ぬ。

今の伊吹は、『伊吹に負けた私』を生かしておかない。

理由は知らん。考える余裕が無い。

私に分かっているのは、生きなければ勝つしか無い、という、単純な事実だけ。

だったら足掻く。生まれてから今日までと同じく。死ぬくらいならば、必死になって生きる。その為なら、この程度の痛みが何だと言うのか。

撃って撃って撃って撃って撃って。

撃って撃って撃って撃って撃って撃って撃って。

撃って撃って撃って撃ち続けて。

危機察知が、鳴り止んだ。

弾幕を、解除。

「……………はは、はははははははは」

檻褻切れみたいな格好で、伊吹が笑う。

酷く、どうしようも無いくらい、晴れやかな表情で、笑う。

「……………あーあ……………負けた、って考えちゃった……………」

「……………だったら、私の勝ちだな……………」

ああもう。2度とお前と本気の勝負なんぞせんぞ。

下手をすると、十数万年前、月の尖兵共に囲まれた時よりも、疲れた気がする。

「で?…」

「何?…」

「結局お前は、何がしたかったんだ?…」

目やら鼻やら口やらから溢れていた血を拭い、最低限に身嗜みを整えたところで、事の発端を思い出した。

ちなみに、伊吹の方は、1度自身を霧に疎め萃めるだけで、見た目は元に戻っている。

頑丈とかいう範疇では無い。狡い。

外側を取り繕っただけで中身はボロボロだ、と言っていたが、それでも狡い。

私の左手も、そんな風にすぐ治せば良いのに。

指が5本とも、しつちやかめつちやかな向きに折れている。そもそも完治するのかこれ。

腕全体も、骨と関節に何カ所か罅が入っていきそう。神経は無事かな。痛いし。

雖に何て言い訳しようか……また怒られる……泣かれるかも知れん。

辛いわあ……。

「何がしたかった、って言われてもねえ……」

霧の晴れた夜空を見上げて、伊吹が呟く。

「変わっちゃった地上に、何か新しいモノが無いかと、思ったんだ。

面白い何かがあれば、他の鬼も、こつちに戻るんじゃないか、って」

まるで遥か遠くの星を眺める様に、呟いた。

「もし、あんたが来なかったら、あんたですら変わったんだって、納得して、諦めていた」

くつと、唇で弧を描く。

「あんたに会って、そんなことはもう、忘れていたけどね」
愉しそうに。

「あんたは、変わっていなかった。

新しい何かを得て、増えたモノがあつて、それでも変わってなんかいなかった」

憑き物が落ちた様に、笑う。

「だから……うん、すつきりしたよ」

それならば、この馬鹿騒ぎにも、意味は有つたのだろう。

「きつと私達は、『変わる必要』なんて、無いんだ」

泣きつ面が笑顔になった。

それで充分だろうさ。

第月話

「今は、何処に住んでいるんだ？」

「迷いの竹林、って所よ。あーでも、あんたは来ない方が良くかも」

「……他にも誰か居る、ということか」

「そーゆーこと。かぐや姫と八意思兼神って言えば、分かる？」

「ちっ、やはり月の民か……！」

「あはははははは！ 露骨に嫌そうな顔しちゃってまー！」

「散々『穢れを浄める』だの『許されない存在』だのと追い回されたら、心象も悪くなるさ」

「まっ、あっちにとつちや、あんたは天敵みたいなもんだからねー」

「潔癖症の差別主義者共めが……月に引き込もっていれば良いものを」

そうすれば、お互い平和に過ごせるのだ。降りてくる度に面倒を起こしておつて。

しかし、姉様が世話になっているのであれば、話は別だ。

新作の中では出来の良い物を土産に渡しておこう。

言うまでも無く、直接会うつもりは無い。

高天原の神々ときたら、中堅どころですら、逃げるにも倒すにも手間取るのだ。

八意となんぞ、本来ならば、関わるのもお断りである。

「何の因果で、姉様はそんなのと一緒に居るのか……」

「クロー、声に出てるよー」

「声に出しているんだ」

「そりゃーそーだ」

「ところで、そんなことよりもー」

まあ、嫌な話題は脇に置き、今は久方振りに、姉様との酒を楽しもう。

幻想郷中に散っていた妖霧が晴れて。

無茶をしすぎだと、紫と雛に叱られて。

伊吹との馬鹿騒ぎを記事にしたいと、射命丸に懇願され承諾し、夏が来て。

やつとこさ、滅茶苦茶に折れた左手が完治して。

もう少し柔術擬きを上達させようと没頭していたら、うっかり三日三晩行方不明になり、雛に叱られて。

酒を造ったりメイリンと組手をしたりフランに襲われたり酒を造ったり鍛錬したり。

朝帰りを雛に叱られて。怒る雛も可愛いな、と和んでいたら叱られて。

そんなこんなで夏が過ぎて、秋が来た。

豊穰と紅葉の秋。酒の美味しい季節である。酒は年中美味しいが。

「……………母様……………月が……………」

「ああ、すり替えられたな」

秋の満月、月見酒。

夜の紅葉に芋焼酎と、その他、色々何となく秋らしい酒やつまみ。

そんな中で、事は起こった。

折角の酒の席に、無粋なことを。

術式は……………おそらくだが、高天原か？ 月の民が月を偽るとは、

奇っ怪な。

替えられた月は、随分と古めかしく厳めしく、そして、毒々しいくらい威光。

或いは、私が生まれるよりも更に古い時代の月だろうか。

現代とは比較にならない程の『魔』が、幻想郷に降り注いでいる。

「でもこれって、人間じゃあ気付けないわよね」

「このまま異変が解決しないかもしれない、ということかしら」

雛と同じく、一緒に呑んでいた秋の姉妹神も、不安げに偽物の月を見上げる。

一方の私と言えば、時折起こる既視感、十中八九、前世の名残を感じていた。

つまりは、これもまた、『筋書き通り』の出来事なのか。

「……………そして……………やはり姉様も……………」

既視感と共に、不意に浮かんだ『因幡てゐ』の姿。

桃色の貫頭衣を着た、私を知る『姉様』とは少々異なる装い。

それらが意味するのは、この異変には、姉様も関わるということ。

分かつてはいたが、姉様も既に、幻想郷に来ていたのか。

紫が私と姉様の関係に感付かないはずも無し、黙っていたのは…………

私への伏せ札だろう。

つくづく、色々と策を巡らす奴である。

策士という類いは、いつだって事前準備を怠らない。

もしも私が裏切ったら、という仮定に対して、紫が手を抜く訳が無

い。

私が幻想郷を壊そうとした際に、成る程、姉様は極めて有効な、切

り札となる人質だ。

人質？ いや、兎質？ まあ何でも良いか。

とにかく、事が最悪に至るよりも早く、紫は確実に動き出す。今回

についても、同様に。

「そう不安がる必要も無いだろうさ」

加えて、紫は言うまでも無く、月の異状に対処するだろう者達が、幻

想郷には大勢居る。

この異変も、古代の満月で狂った妖怪達が暴れだす、なんて結末に

は成らないだろう。

「唯、今夜は少し物騒だな。秋の二柱も、うちに泊まっていくと良い」

明け方には解決するだろうが、幻想郷全体が緊迫感を帯びている。

戦いが不得手な者には危険な夜だ。

この娘達とも、彼女らが生まれた時からの付き合い。放っておくの

も気が引ける。

何より、友達と過ごす方が雛も安心するだろう。

心配は無用。我が家の護りは、幻想郷有数を自負している。

千年以上の間、壁や庭すら、誰にも傷付けられた試しが無い。

そもそも、此処を襲撃してくる者なんて滅多に居ないし、辿り着く

前に潰す。

無論、宿泊者は、私と雛の厄を恐がらない者に限るが。

そうして、雛と秋姉妹を寝かし付け、私は独り、亥の四つ時から止まった月を眺め、ぼんやりと酒を呑む。

どうせ朝までかかるだろうが、姉様が関わる以上、寝て待つのも落ち着かない。

かと言って、私が現場に赴いても悪化するだけなので、できることは無いが。

月が動かないお陰で、どのくらい時間が経ったかも分かりづらい。酒の空瓶の本数だけが増してゆく。

今頃、姉様も、博霊の巫女か誰かと弾幕ごっこだろうか。

もう負けてしまったのだろうか。

大怪我をしていないかだけが、心配だ。

「……………会いたいなあ」

ぽつりと、思ったよりも情けない声が洩れた。

雛達を寝かせておいて正解だった。こんな姿を見せるのは、些かきまりが悪い。

停止していた月が急激に沈み、夜が明けた。

異変が終わった。

朝が来て、不可解な月の動きに混乱している人里を宥めに雛が発ち、秋の姉妹神もまた、各々の務めに出た。

彼女達が自身の仕事に向かうのを見送り、そして私は、寝た。

いや、だって、徹夜明けで眠いし。

姉様の安否は気になるが、私から出来ることは何も無い。

眠りに落ちつつ、考えるのは、昨夜から今朝までの異変について。月の異変。

高天原に属するだろう、月をすり替えた術。

偽りの、古の月。

古い時代についてと、月の民について。

そんなことを考えていたからだろう。

だから私は、こんな夢を、見ているのだろう。

十数万年も前の、私が起こした、惨劇の夢を。

地獄があつた。

死が、そこに在った。

散らばる肉片血溜まり臓物脳骨血管糞尿皮膚神経眼球その他諸々。

五十余の、神々の残骸。

死に尽くしている。

私に殺し尽くされている。

私に壊し尽くされている。

私が殺した。

私が壊した。

私が創った、この地獄。

『死にたくない』

私の始まりとは、即ちその願いだ。

前世の思い出も記憶も、とうに摩耗している。

辛うじて、人間で男性だったことは分かっているが、名前すら忘れてしまった。

摩り消えずに残っているのは、極僅か。

それでも尚。

その最期については、覚えている。

痛みや苦しみ。

血液が流れ出す喪失感。

呼吸の度に内臓が訴える故障。

高天原から降りてきた、下位の神々。上位者の尖兵達。人の世に名すら伝わらない者達ではあるが、偵察にしては明らかに過剰な戦力。

彼らは、私のことを『穢れ』と呼んだ。

心の何処かで、その通りだと思った。

厄を穢れを撒き散らす私を、『許されない存在』だとして、『穢れを浄める』と謳い、殺そうとした。

何百年も、私は逃げた。

何万回も、彼らは追った。

彼らの数は徐々に増していき、やがては五十を超え、遂に私を取り囲んだ。

危機察知でも、打開策は導けず。

追い詰められた私は、とうとう諦めようとした。

これが最期だと、充分に生きたと。

厄災を撒き他者を害し永らえ過ぎたのだと、納得しようとした。

走馬灯の思考加速でも処理しきれない危機察知に、脳を揺さぶられ、肌を刺されながら。

死を受け入れようとして、失敗した。

――憎め――

轟轟と嵐の様に荒れ狂う、莫大な数で膨大な量の危機察知。

その中の唯一無二。

それが、私の意識を貫いた。

手の施し様が無い窮地における、たった1つの生存方法。具体性の無い感情論。

それを選ぶなど、本能も理性も叫んでいた。

それを選ぶしか無いと、本能も理性も認めてしまった。

「……………憎い……………」

私は、何が憎いのだろう。
私を殺そうとする彼らだろうか。
他者を害し続けた私自身だろうか。
こんな穢れた能力を持つことだろうか。
それとも、『死にたくない』と願ってしまった前世だろうか。

「……………全てが、憎い」

答えは、不明瞭。それでいて明解。

生きている者達が憎かった。
生を謳歌する者達が憎かった。
存在している全てが、憎かった。
死んだ者達が憎かった。
死を受け入れることが出来た者達が羨ましくて憎かった。
自らの死を認めず留まる亡者達が、私と似ていて、憎かった。

生きている者も、死んだ者も。
その全てを、私は、憎んでいる。
生きて酒を呑んでいられれば充分だ、と。
語らう相手が居れば望外の幸福だ、と。
嘔き、嘔吐き、己を欺き、その腹の底では。
自己も他者も生も死も過去も未来も、全てが、憎い。
どうして。

どうしてお前達は、生きて死ぬ喜びを当然のモノとして享受している。

それが憎い。それ以外も憎い。
それが、でも、誰が、でも無く、この世全てが憎い。

嗚呼。

嗚呼。

知りたくはなかった。

気付きたくなかった。

厄を弾き、他者に移す私。

責を負わず、押し付ける私。

そんな害悪である私が、それよりも更に澱んだ、こんな憎悪（バケモノ）を飼うなんて、知らずにいたかった。

しかし、1度自覚したそれは、自制出来なかった。

もとより、私の妖力は厄との親和性が高い。

憎悪を込めた妖力は、私が弾き周囲に満ちていた厄を、貪り尽くした。

親和性どころか、まるで、全ての厄を支配しているかの様に。

厄を貪って、生きている者も死んだ者も、貪り尽くした。

そして、五十余りの神々、その尽くが、死に絶えた。

妖力の刃に裂かれて死んだ。

妖力の槍に貫かれて死んだ。

妖力の槌に潰されて死んだ。

妖力の波に飲まれて死んだ。

微小な弾丸と化した妖力を肺に吸い、内側から蝕まれて死んだ。

口を閉じて弾丸の侵入を防ごうとした者は、鼻から耳から目から潜られ、脳髓を砕かれて死んだ。

防壁で自身を包んだ者は、その上から覆い被さられ咀嚼され死んだ。

死んだ。

否、それは違う。

私が、『死にたくない』から、憎悪を込めて殺したんだ。

生きているから殺して、死んだから壊した。

憎悪のままに、憎み尽くした。
憎んで殺して憎んで壊した。

その時になって漸く、私は私がソウイウモノであると理解して、折り合つて、それでも『生きる』と決めた。

周囲に広がる真つ赤な光景こそ、私が生きる限り作り出し続けるモノだと承知の上で。

生きている限り、手段を選ばなくなる度に、私は何度でも地獄を産み出すと、思い知り。

それでも尚、『死にたくない』と。

「……………寝覚めが悪い」

好きな言葉では無いが、敢えて言おう、最悪だ。

洩矢神様に初対面で見透かされた時以上に、気分が荒れている。

夢見が悪かった、では済まないくらいに、心が軋む。

千何百年前から身に纏える様になったはずの厄が、無意識に溢れる妖力と混じり乱れる。

気を抜いたら能力の制御をも失ってしまいそうな程、不安定。

締め付ける様に厄を束ねて縛り、どうにか持ちこたえている状態。

「……悪いが、手短かに用件だけ頼む、紫」

目覚めの原因。あの悪夢から覚ましてくれただ切っ掛け。

すぐ隣に現れたスキマの気配、旧友に対して告げる。

「そうね。この話で、少しでも貴女が落ち着いてくれると良いのだけど」

応じる紫の顔を見る余裕も無い。

紫もまた、いつもの婉曲な言葉遊びをする余裕が見られない。

それは要するに、私の現状は、紫から見ても危ういということだ。

「因幡てゐが、貴女に会いたいと言っているわ」
そうか。

ここでその伏せ札を切るか。
相変わらず、こいつの頭の中身は良く分からんな。

「……分かった。支度する」

姉様はいつから幻想郷に居たのか。

紫はそれをいつから知っていたのか。

何故、私にそれを隠したのか。

聞いても良いが、他者の真意など推し測る他に無いし、紫の場合は尚更だ。

私が裏切った時の対策以外にも色々理由があるかも知れないが、分からん。

どうしてここで姉様の存在を私に明かしたのかも、さっぱり分からん。

何か考えがあるのだろうか、ぐらいが、私に出来る精一杯の予想である。

まあ良い。悩んでも仕方が無い。出来ないことに拘る暇があったら、出来ることをしよう。

先の夢についてもそうだ。嫌な記憶を思い出して気が立っても、所詮は過ぎた話。

とりあえず、姉様と会うなら、万が一にも厄を移さない様に、厄の収束を強めなければ。

家の中に漂う厄も、かき集めておこう。ついでに大掃除だ。

あと、酒も用意しないと。昔の姉様の好みからして、気に入るような物は、つと。

うむ。

何だか、姉様をもてなすことを考えている内に、気分が良くなってきた。

「……………親馬鹿酒造馬鹿の上に、シスコンかしら？」

紫が何か言ったが聞こえない。

第判話

「……貴女の罪を、善行であがなうことは、できません」
「だろうな」

私は、どうしようも無い程に黒だ。私の罪は、大き過ぎる。
殺した数すら覚えていない。神殺しも犯している。それも大量に
だ。

無自覚に厄を移し害した罪など、思い浮かべることさえ出来ない。
ならば、地獄に落ちることは、当然であり、必然だ。

「地獄行きを免れる方法を、貴女は理解しているはずです」

「ああ」

「貴女は、それでも尚……」

「そのつもりは無い」

少なくとも、『妖怪としての私』を受け入れてくれた者達が、存在し
ている限りは。

私は、『不運を司るモノ』に成るつもりは無い。妖怪として生きる。

「気遣ってくれたことは、有り難く思う」

「……本当に、罪深いことですね」

いつか、今の私を皆が忘れ去った後には、彼女の言う通り、悪神に
純化するのも、1つの道か。

それまで私が生きていれば、だが。

どちらにせよ、害悪極まる存在ではあるだろうがな。

秋が終わり、冬が過ぎて、今は春。

幻想郷が白一色から、色とりどりに彩られていく。

「……それにしても、色鮮やか過ぎるな」

雪解けと共に、季節を問わず、花という花が咲き乱れている。

何だったか。確か少し前にも同じことがあった気が……雛と出会
うよりも前……吸血鬼異変とは、どっちが先だったか。

忘れた。別に大した問題には成らないし、どうでも良いか。

霊が溢れ花が咲いているだけだ。気にする必要も無し。

念の為に雛は人里へ向かったものの、今頃は花祭りに参加させられているだろう。

言うまでも無く、人間とは触れ合うことも言葉を交わすことも出来ないが。

しかしこの様子なら、厄神様の祭壇には、数え切れない程の花が捧げられているに違いない。

雛も、人里の上空から人々の祭りを眺めて、微笑んでいることだろう。

あの娘も、随分と人間になつかれたものだな。裏で手を回したらしい紫には、感謝しておこう。

私の方とは言えば、特に何をする気も起きないし、庭の花でも着にー

「クロー！ 散歩に行こー！」

「分かった」

よし、出るか。独り酒より姉様だ。

私の姉様がこんなに可愛いわけがない訳が無い。

何だか妙な一文が頭の奥から湧いた。なんだこれ。

まあ、言いたいことは分かる。姉様は可愛い。無論、雛も可愛い。

え、なに？ 聞いてない？ 聞け。何なら一昼夜語り明かしてやる。

とまあ、それはともかくとして。

「タラッタラッタラッタター♪」

歌って踊る姉様が可愛すぎて、私の中に生き残った『前世』部分が喝采している。

何故、名前も人生も親の顔すらも忘れていた癖に、こういう所だけが消えずにいるのやら。

コレのせいで、雛が成長してからは、一緒に風呂に入る際、私は目

隠し装備である。

たとえ『前の私』であろうと、私の娘に欲情させてたまるか。ぶち殺すぞ。

雛に抱き締められたりすることについては、『男として』よりも今の私の感覚の方が強いので問題ない。

……男性的欲求より強いって、他者との触れ合いにどれだけ飢えてるんだ、と思わなくも無いが。

生まれて初めて紫に手を取られた時には、あいつの目の前で泣いたくらいだしな。

百万年の孤独で、潰れかけていた頃といえども、最大級の黒歴史だ。死にたくはないが、穴があったら入りたい。埋まりたい。

相手が洩矢神様で無かったのが救いか。あの方に弱味を見せたら、即座に喰われる。

確かに、「百万年分泣きなよ。一滴残らず飲み干して啼かせてあげる」と言われる。

嫌に具体的に、映像まで脳裏に浮かんだ。怖い。

いや、そんな与太話は良いとしてだ。

「私の前に歌いながらやってくるなんて、なんという挑発。なんというささぎのダンス」

鳥の妖怪が現れた。

あー、月の異変後の宴会で見た覚えがあるな。ミス某だったか？

一先ずは、そこまで危険では無さそうだし、先程の氷精同様、姉様に任せよう。

私がやっても良いのだが、やる気満々な姉様に水を差すのも悪い。

短い口上の後、早速弾幕ごっこに興じ始めている。

勿論、スペルカードルールに則った、遊びの範疇だ。

「平和だ……」

「退屈の間違いじゃないかしら？」

「退屈を受け入れられるから平和なんだ」

お前には分からんかも知れんがな、風見。

殺気が無かったので、傍に着地することは許したものの、警戒は向けておく。

何をしに来たお前。

「花が咲く異変の元凶として、追われているんじゃないのか？」

「かかって来るなら、叩き潰すだけよ」

それはまた、物騒なことだな。平常運転だが。

「あの白い兎も、来るなら相手をしてあげるけれど？」

「ほう？」

言ったな、お前。

「雛の時と同じ台詞になるが、繰り返そう」

今、私の身内に手出しをすると、言ったな？

「もし姉様を害したら、何百年かけてでもお前を衰えさせ、全盛期の半分の力も出させずに、殺す」

「……………ええ、分かっているわよ」

「なら良い」

本気で殺る、などと口にした瞬間に、風見は喜んで姉様と雛を殺す。従って、私の忠告は、「全力を出せないまま死なせる」という、風見にとつて最低の死に様だ。

こいつに対しては、率直な脅しは全く効かない。というか逆効果にしか成らない。

面倒臭いなこいつも。

「……………鬼とかいう奴とは、随分と楽しく戦ったくせに」

本当に面倒臭いなこいつツツ!

何だ!? 嫉妬か!? 何でだ!?

私が誰と馬鹿騒ぎしようと、お前には関係ないだろうが!

こんな事態に成るんだったら、射命丸に記事を書く許可なんて出さなければ良かった!

ああー、もぉーめんどおくさあ…………。

「ねえ、ところで、」

なんて毒々しい笑顔だよお前。悪どいことを企んでいます、と書いてある。

「貴女の姉と『弾幕ごっこ』をするか、貴女と『この前と同じ遊び』をするか、どっちが良いかしら？」

選択肢が無いぞおい。

姉様とお前の『弾幕ごっこ』とか、心臓に悪すぎる。見ていられる訳があるか。

満面の笑みを見せるなこら。

「すまん姉様。この先は別行動だ」

「はいよー」

私と風見の『有効打1発勝負』の余波は、些か以上に大きい。姉様の近くではやれない。

前々回とはかく、前回は山が抉れ大結界に亀裂が入ったらしい。

修復と事後処理に奔走した紫から、秘蔵の酒で機嫌を取り聞いたことだが。

その節は、正直すまんかった。半分は風見のせいだ。3割は狐。

「クロー、死なないようにねー」

「……ああ、頑張る」

さて、今回はどうなることやら。

この戦いが終わったら、自宅に帰って雛に抱えられながら姉様と酒を呑むんだ。

別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？

何となく言わないといけない気がした。理由は知らん。

結果、負けた。でも生きている。どうにか辛うじて。

前回は狐が乱入してうやむやに成ったから、これで1勝1敗1分けか。

それにしても、まさか、私の防御結界が貫かれるとは。

風見の砲撃を受け止めたら、数分間撃ちっぱなしにされて、ぶち抜かれた。

あの火力馬鹿め。かすただけだから死なずに済んだが、直撃した

ら塵も残らなかつたぞ。

殺す気か。

ああ、殺す気だったな、徹頭徹尾。

しかし、あいつの砲撃は、あんなにも持続する代物だっただろうか。まさか私対策に鍛えたのか？ あれの矜持の塊が？ 頭から爪先まで自尊心のあいつが？

本気過ぎる。本気で殺しに来ている。

もう2度と正面からは受けない。次も生き残る自信など無い。

防壁で軽減し、咄嗟に回避はしたものの、右半身が丸ごと火傷で痛い。

吹き飛ばされて、現在地不明。

何やら、頭上に紫色の桜が見える。何処だ此処は。

「しかしまあ、紫に咲く桜とは珍しい。いやはや全く以て実に……業が深い」

風に混じる紫色の欠片。

幻想郷に溢れ返る狂い咲きの中、一際狂った妄執の念。

彼岸桜の花吹雪。

こんな場所で同類に会うなど、本当に、憎たらしい。

一目見れば分かる。この桜を咲かせているのは、地獄行きの定めにある霊だ。

救われる資格を失いながら救いを請い続ける、愚劣極まる罪人共。

「罪を犯して死に世迷い、果てには、桜に憑いて魔性を咲かす。

見苦しいこと、この上無い」

お前達も、私も。

今更になつて悔い嘆くのなら、自覚した時点で往ねば良かったのだ。

「永らえて死に切れず。死して尚も泣き喚くなら」

「桜と散れば良いものを」

私の独り言に重なる声。

「そう、貴女は……余りにも長く生きすぎた」

楽園（ザナドゥ）の閻魔（ヤマ）が、其処に居た。

他キャラ視点及びオマケ等 トウホウ・クロカラス 上

あの化物と、初めて相対したのは、鬼の方々が地底へ移った時。
今後の山の統治を巡る、天狗と厄災の黒兎の話し合い。

何故だか私は、天魔様に唯一随伴することを許され、化物の壻へ赴く羽目になった。

なったのである。

何故私が。

「ああ、そろそろ来ると思っていた」

「こうして相見えるのは、随分と久方振りですな、因幡乃黒兎殿」

「古臭い呼び方は止そうか。」

コクトで構わんよー今は確か、天魔と名乗っているのだったか
「ではコクト殿と。此度は、我等天狗との対談に応じていただき、感謝
申し上げます」

「わざわざ足労をかけて、すまなかった。」

「どうにも、私为天狗の縄張り深くまで入ると、空気が悪くなってな」

「やばい。吐きそう。」

「凄いですね、天魔様。」

「良くソレと会話できますね。」

「何この威圧感。」

「何なのこの押し潰されそうな不吉さ。」

「帰りたい。凄く帰りたい。帰らせてお願い。」

「それで、そちらは？」

「……っ！ は、はい！ 射命丸文と申します！ コクト様！」

「ああ、よろしく、射命丸」

「有り難き幸せ！」

「宜しくしたくありません全力でお断りしたいです。」

「冷や汗が止まらない。」

絶対に、今の私、ひきつった顔になっている。

頭を垂れ、必死に表情筋を緩ませようと試みる。が、駄目。強張る。視線を向けられているだけで、圧倒的な力を感じ、本当にもう、吐きそう。

群をはぐれた妖怪鬼、という肩書きの1つの、何と薄っぺらいことか。

これは、単独で鬼の集団と伍する、正真正銘の化物だ。こうして間近に感じて、改めて理解する。

天狗の噂に語られる姿など、その極一部も表せていない。実際に己の目で見て、初めて解るのだ。

その両目で覗き込まれている、唯それだけで、全身隈無く悪寒に支配される。

想像力がひたすら、ありとあらゆる残酷な死に様を空想する。

そして、きつとそれを超える苦痛を、この存在は実現させるに違いないと、本能が泣き叫ぶ。

吐きそう。帰りたい。

「で？ この会合は、今後の山に関してだと認識しているのだが、相違無いか？」

「御座いませんな」

真つ直ぐに前を見据えて答える、我らが天魔様。

天魔様、本当に格好いいです。

格好いいついでに、私を帰らせて下さい、今すぐ速やかに。

「先日、鬼の方々が住まいを移し、この山に於いては、我等天狗が主導することと相成り申した」

「知っている。まあ何だ、ただでさえ乾いた堅い話の前に、喉を潤すでしょう」

そう言う彼女、傍らに置いてあつた巨大な酒瓶と、これまた大振りな酒盃を取る。

「同じ盃を分かち合うことで、友誼を結ぶ。」

そんな風習が、外の世界にはあるらしくてな」

並々と酒で満ちた盃が、天魔様に差し出される。

天魔様は、それを受け取った。

後ろに控えて見ていた私は、その意味を刹那で理解させられた。

これは、私達天狗という種族全体を試す、儀式だ。

分がち合うと、彼女は言った。

額面通りに解釈するならば、それは酒を半分ずつ分け合う、という意味だろう。

しかし、それは、正答か？

半々に分け合うとは、即ち、対等の立場を主張することに他ならぬい。

天魔様は盃を受け取った。

今この瞬間、天狗が彼女に対して、どのような立場に立つのか、試されている。

前置きも話し合いも飛ばして、結論を出せ、と、突き付けられた。恐ろしい。

威圧感よりも、不吉さよりも尚、その在り方が恐ろしい。

単独の妖怪でありながら、鬼という種族そのものを友とし、今もまた、天狗という種族に選択を迫る。

傲岸不遜。唯我独尊。然れど、それが許される力。

「川で冷やしたばかりだ。温くなる前に、呑んでくれ」

そして、彼女は遅疑逡巡を許さない。悩む時間などを待ちあしな

い。

決断しろと、即断しろと、天狗の長に強いる。

「有り難く」

天魔様が盃を傾ける。

彼女に対する、天狗の立ち位置を明示する。

飲んだ量は、四割、否、四割五分。

それが、天魔様の答えであり、そして同時に、天狗という種族の結論だった。

「良い飲みっぷりだな」

「まこと至上に御座いました」

「それは何よりだ」

楽しげに笑ってから、返された盃を干す黒兔様。

ここに、山の序列は決した。

統治は天狗が行う。

しかしながら、黒兔様の意は、尊重すると。

譲った酒の分だけ、天狗は黒兔様に譲歩する。

「さて、自分だけ素面というのも、ぼつが悪いだろう」

悲鳴をあげなかった私を、私は全力で褒めよう。自賛しよう。

あろうことか、再び満たした盃を、私に差し出す黒兔様。

受け取って良いのかこれは。

既に、天魔様の決心によって、天狗と黒兔様の関係は定まった。

ならばこの盃は、あくまでも私個人に出された物。

私の立場を明確にしると、問う物。

横目でちらりと天魔様を窺うと、静かに首肯された。

いや、頷かれても。

え、受け取って良いの？

どう対応すれば良いの？

断ったら殺されるの私？

でもこうして躊躇っている間に黒兔様の機嫌を損ねるかもしれない。

とりあえず盃を受け取る。

………受け取ってしまった。どうしよう助けて誰か教えて正解は何なの？

恐らく、これまでの相当に長い、いや万年単位ではないけど長めの生涯でも、最高速で頭を回転させる。

一口だけ……は失礼だと取られるだろう。

四割くらい……は天魔様とほぼ同じ立場を主張するということ。

よし、だったら、二割だ。天魔様の半分弱、且つ、そこそこは飲んでみせられる。

そうと決まれば早速……旨っ！ 何このお酒美味しい！

度数は低めだけど米の旨味が清らかな味わいを生み喉越し爽やか

で幾らでもーいかん！

……………あや、やや、や……………。

……………三割以上、飲んじやった……………。

「心底美味そうに飲むなあ、お前」

わー、黒兎様、凄く嬉しそー。

あやややー。お喜びいただけで幸いですー。あやややー。

「……………夢見心地になるほど、美味しかったです」

こうして私は、黒兎様に対して、天魔様に次ぐ天狗であると、主張したのであった。

であったのだったのであった。

逃げたい。

天魔様がどんな表情をしているのか見たくない。

心から逃げたい。

この状況で逃げ出す度胸なんて無いけど。

逃げられる奴が居るならすぐに来い。来てください。そして替わってください。

その後、細部について話し合いが行われるのかと思いきや、極めて短い時間で纏まった。

「我等天狗は、コクト殿の行いを邪魔立ていたしませぬ。

唯、集落付近にまで来られる際は、予め一報をお願い申し上げます」

開口一番、天魔様の言葉。

天狗という種族が、鬼以外に向けたとは思えない、明らかな上位者に対する姿勢。

「まあ、天狗の集落に寄る用件も、特には無いが……………。

何かある時は、哨戒の者に言付けよう」

「では、そのように」

何やら、下っ端哨戒天狗達に酷い仕事が付与された気がする。

黒兎様から天魔様への伝言なんて、私は絶対に承りたくごさいません。怖すぎる。

「もしも天狗から私に連絡がある際は、伝令なり書簡なり、家まで届け

てくれ」

その伝令役、何がなんでも回避できるよう立ち回らないと。でも、何だか嫌な予感が……いやいや、無い無い、気のせいよね。

とにかく、会合はこれで終了。ようやく家に帰れた。疲れた。眠ろう。寝た。

やはり、と言うべきか。

黒兎様への対応について、天狗の間では不満が囁かれた。

余りに警戒し過ぎではないか。

天狗の組織力ならば、容易く従えられるのではないかと。

しかしそれも、次の春までのこと。

天狗が主催する花見に、天魔様は黒兎様を招いた。

ちなみに、招待の書簡を届けたのは、白狼天狗である。お気の毒さまなことだ。あ……助かった。

おそらくは、黒兎様と天狗とが良好な関係を結んだことを、内外に知らしめるための宴。

天狗社会の中で黒兎様に不満を抱く者や、盟約を疑う外部の者を黙らせるためのお披露目。

天魔様が目論まれたであろう狙いは、完璧に達成された。

以前の会合時ほどでは無いものの、それでも纏う妖気は絶大。内に秘めた妖力は測り知れず。

天魔様の隣、敷物1枚分高く設けられた上座に胡座を組む姿は、直視することも躊躇われる強者の居住まい。

誰もが自然と、顔を伏せた。

目を合わせまいとした。

視線が合った瞬間に、黒兎様から溢れた不吉を自身が被る、という悪寒が、その場を支配する。

今は居ない鬼の暴力は、力は、極めて単純だった。

単純だから、読みやすく。

理解できるから、対処できていた。

どれほど大きくとも、我が身を害されないように立ち回れた。

しかし、黒兎様の力は、正反対。

絶大であり不明瞭。

甚大でありながら予測不能。

何が起きるか、何が契機となるのか、想像の範囲外。

分からないから畏れる。

自分に降りかかることが無いよう乞い願う。

さながら、人間が妖怪や神を畏怖するかの如く。

不吉と不運の象徴として、頭を垂れる。

まさに、その銘の如き厄災として。

更に、それに加えて、初めの1杯分、参加者全員に酒を振る舞って
くれるのだ。

前の会合の時もそうだったけど、本当に、酒に関しては良い方であ
る。

ビールというのは聞いたことも無い酒だけど、凄く美味しい。

この苦味がまた癖になる。

間違いなく、来年の花見にも、今回の参加者は何を置いても出席す
るだろう。

怖がりながらも、あの酒を目当てに。

畏れで抑えて、酒で惹き付ける。

事実上、妖怪の山は、たった1体の妖怪兎に屈した。

そりゃ誰だって、争ったらどんな目に遭うか分からない相手に挑む
よりも、美味しい酒が飲みたいですもの。

誰だってそう。

天狗だって河童だってそう。

もちろん、私だってそうです。

それにしても、天魔様だけが物怖じせず向き合えるからとは言え
……。
あの酒を何杯も飲めるのは、正直、凄く、羨ましいです……！

トウホウ・クロカラス 中

「あーもうっ!! 次から次へと!」

現在地点は霧の湖。

現状は、幻想郷へ攻め込んできた吸血鬼一味と交戦中。

「射命丸様! 右翼が押されています!」

「見れば分かりますよ、ええ!」

鴉天狗隊の1から3班は支援に行つて! 持ちこたえなさい!」

私、絶賛大忙しの真つ最中です。

「射命丸様! 左翼が!」

「射命丸様!」

「射命丸様!」

「射命丸様あつ!! 中央が破られましたあつ!!」

「中央に河童砲撃隊の攻撃を集中! 白狼天狗隊は態勢を立て直して! 早く!」

鴉天狗隊の4、5班は左翼に!

残る鴉天狗は全班、中央に向かいます!

もう少し踏ん張りなさい! 私も行きます!

1から3班も戻り次第、中央の援護!

副官! 指揮を引き継ぎなさい! すぐに戻ります!」

本当にもう、大忙しですよ、ええ本当に。

どいつもこいつも……いい加減にしてほしいです。

侵攻してきた吸血鬼達は、迷惑極まりないことに、妖怪の山を第一目標に定めたようです。

住み着いていた妖精達を風ぎ払い、霧の湖に陣取った軍勢。

首魁である吸血鬼と、極めて強力な魔法使い。

それに付き従う、無数の悪魔。

吸血鬼と魔法使いに対するのは、八雲主従。

そして、悪魔の群れと戦う役割は、私達天狗を始めとする、妖怪連合が請け負うこととなりました。

更に言えば、その連合の指揮を執るのは、私、清く正しい射命丸。何ですか本当に何でこんなことになったんですか責任者出てきなさい代われ今すぐ。

幸い、と言うべきか、悪魔1体1体はそこまで強力ではありません。平均的な白狼天狗と同じくらいか、それ以下。

多少容姿の差はあっても、どれも赤髪の女性型であることから、分裂が増殖した同一個体と思われまます。

つまり、十数体が束になったところで、私の敵じゃありませんね。こう見えても、単純な力では鴉天狗有数にして、幻想郷最速ですから。

結構強いんですよ、私。

上空で凄まじい弾幕戦をしている八雲主従と吸血鬼、魔法使いなんて見えません。

黒兎様のことなんて覚えていません。考えません。

あんな規格外と争うのが間違っているのです。

とにかく、今は私の戦場の話。

悪魔は個々の能力は驚異ではありませんが、数が多すぎます。

前線の白狼天狗と八雲紫が集めた妖怪、遊撃の鴉天狗、砲撃支援の河童を合わせたよりも多いです。

更に、倒しても倒しても、何らかの魔術によるものなのか、数分で再構築されています。

一気に倒そうにも、流石にそこまで弱くはありません。

要するに、こちらが一方的に不利な消耗戦。悪夢ですね。

しかしながら、今回の戦で八雲紫に受けたのは、「黒兎様が動くまで持ちこたえる」こと。

消耗戦でも持久戦でも、どうにかして耐えれば良いのです。

あの方の怖さは、天狗の中でも多分、私が最も知っています。

黒兎様が動くというのが、はたして何を意味するのかは伝えられていません。

ですが、この戦いに彼女が参戦するのであれば、敵が大打撃を受け

るのは確実。

私達は唯、その機に乗じて敵を叩き潰せば良いのです。

何時間指揮を執り、押された味方の援護に行ったか。

太陽の傾きを見ようにも、生憎、空は一面の曇天。

敵の首魁は吸血鬼ですから、きつと、魔法使いに天候を操らせたのでしよう。

それはともかく、漸く、待ちに待った好機が訪れました。

地響き、遠い轟音、この距離でも感じられる禍々しい妖気は、敵本陣である紅い館から。

数分の間が空き、再度の妖気。先程よりも更に濃密な、背筋が凍える不吉。

直感的に、館を覆うように妖気を広げているのだと推察します。

つまり、この離れた位置で感じる禍々しさと不吉さは、あくまで余波。

爆心地である館は、まるで地獄のような有り様に違いありません。そのことを、敵も理解したのでしよう。

動揺した隙に、吸血鬼と魔法使いを八雲主従が攻め立てます。

悪魔達に至っては、黒兎様の妖気にあてられて、増殖の術式が崩れたのでしようか。

倒すまでもなく、紅い霞と化し、たった1体の小悪魔に成り果ててしまいました。

言わずもがな、即包囲、確保です。

こうして、後に吸血鬼異変と呼ばれる戦は、幕を閉じました。

戦勝指揮官の功績とやらで、私の権威が強まりました。

地位とか肩書きとかはお断りしたのに、何故か発言権が大きくなつてしまいました。

何故に。

そんなの要りません。要りませんってば！

時は流れて。

黒兎様に、御子様ができました。

訳が分かりません。

誰の子です？

まさか、八雲紫ですか!?

あんな胡散臭い女を選んだんですか黒兎様?!?

え!?! 産んだの!?! 産ませたの!?! どっち!?!

どうやら幼い少女に「母様」と呼ばれていること以外は、全くの不明。

黒兎様も外見は幼い少女なんですけどね。

こういうの、外の世界ではシニールって言うんですけど? 違いました?!

そしてついうっかり、最速でその情報を入手した私は、天魔様から直々に調査を命じられました。

娘と思われる者に対して、黒兎様がどの程度の情を注いでいるか。

これにより、天狗社会が妖怪の山の新参であるその娘に、どう関わるかが決まります。

要するに、今後の天狗を左右する、超重要任務です。

……………もうやだあ……………。

「射命丸様」

「……………はあ……………何です、権?」

問いかけたものの、答えは既に知っています。

私が指示したことですから。

「コクト様とご息女と思われる者が、ご自宅に帰られました」

「そうですか……………」

千里先まで見通す程度の能力で監視させた結果を報告する表情は、どこまでも生真面目な堅物。

なのですが、尻尾はビクビクと、足の間に巻き込まれています。気持ちちは分かります。凄く分かります。

覗き見で黒兔様が気分を損ねたら、間違いないで殺されますし。

このくらいでお怒りになる方では無い、と知ってはいても、怖いものは怖いのですよ。

そもそも、見ているだけで寒気がするほどの妖気です。

本気になった時の不吉さは、普段の比ではありませんが。

もしかしたら、吸血鬼異変で感じた妖気も、まだまだ本気ではないかもしれませんけど。

本当の本気になったら、あれ以上の力を発揮されるのかもしれないけど。

あ、考えれば考えるほど、胃が……。

これから私、そんな方のお宅を訪ねて、質問しないといけないんですよね……。

時間を短縮するために、開口一番「その子誰の子」と単刀直入に………駄目だ殺される。

「はああああああ………」

「……射命丸様」

はいはい、清く正しい射命丸ですよー。

なんですかいったい。

正直、貴女の相手をする余裕は無いんですけど。精神的に。

「私も同行させていただきませんか」
は？

「何のために？」

まさか、護衛だなんて、寝ぼけたことは言わないでしょうね？」

「万が一の際には、命を以て」

「却下です」

馬鹿真面目な仕事馬鹿だと思っていましたが、文字通り死ぬほどとは。

「貴女では時間稼ぎにもなりません。」

それよりも、万が一を考えるのであれば、私が逃げ損ねた時に、上に報告するのが貴女の役割でしょう」

「しかし………」

「くどくどすよ」

周囲の大气が渦巻き、私の支配下に。
風を操る私にとっては、その全てが武器。

「犬死にどころか足手まといです。身の程を弁えなさい、犬走権」
哨戒天狗風情に格の違いを見せ付けるように、冷えた声を突き刺
す。

「千里眼で状況を確認し、もしも私が失敗した時は、代わりに報告す
る。

貴女がすべきことは、それだけです。
分かりましたか？」

私はその気になった瞬間に、権を風で切り裂き押し潰すことも容
易。

それだけの力の差があるのです。

私よりも弱い彼女が、黒兔様に対してできることは、何もありません。
ん。

権も、そのくらい理解しているでしょうに、何を世迷い言を垂れて
いるのか。

或いは、私が指示した以上の仕事がこなせると、本心から思ってい
るのか。

舐められたものです。まったく。

「それでは、行ってきます。

くれぐれも、コクト様から『眼』を離さないようにしなさい」

「……………了解しました」

顔を伏せた権の齒軋りの音が、風を通じて私に届きます。

まだ納得していないのでしょうか。

大体、仕事馬鹿のくせに、私の指示に反発するとはどういう見
えですか。

堅物の考えることは摩訶不思議ですね。訳が分かりませんよ。

「ご幸運を。射命丸様」

深々と礼をする権を置いて、私は黒兔様のご住居に向けて飛び立ち
ました。

幸運も何も、これから行く先は、不運の元締めみたいなお方ですよ。

「ああ、さつきから視線を感じると思ったら、お前の部下か」

玄関前に降り立った直後、庭先から黒兎様の声。

やはり、と言うべきか、椀の千里眼はお見通しだったようです。

大して気になさっていない様子なので、即座に無礼討ちにされる心配は無いでしょうか。

「ご不快であれば、すぐに止めさせますが」

「構わんよ。それにどうやら、今はお前の方に『眼』が移っているらしいしな」

「そうですか」

椀の奴、黒兎様から『眼』を離すなど言っておいたのに、また勝手なことを……。

いえ、ですが、今回は妥当な判断です。

監視を続けながら、黒兎様のご機嫌を損ねる可能性も下げられる、良策と言えるでしょう。

ところで、本当に今、私に千里眼が向いているのですか？

全く何も感じないのですが……これ、隠れて見られていても気付けないのでは……。

まさかとは思いますが、私が知らない間に椀から覗き見されているなんて、そんなことは……。

「かあさまの、おきやくさん？」

おっと。当初の目的を忘れるところでした。

今回のお目当ては、黒兎様の背中に隠れていた、こちらのお嬢さんでした。

遠目に眺めたり情報を集めたりはしましたが、改めて見ると、本当に小さな子供です。

容姿だけは幼い黒兎様よりも、更に頭1つ分は小さいでしょうか。

前に出てきたものの、すがるように黒兎様の腕に掴まる様子は、姉妹にも見えます。

最も、見た目は、ですが。

「初めまして。鴉天狗の射命丸文と申します」

「しゃめーまる、あや……」

「ほら。雛もご挨拶しなさい」

「……うん」

黒兎様の腕に掴まり、その濃密な妖気に触れて平然としている。

それどころか、穢れを受け取り身にため込んでいる。

そんな者が、唯の少女なはずが、ありません。

「かぎやま、ひな、です。ながしびなの、やくじん、です」

「良し。ちゃんと教えた通りに挨拶できたな」

ええつとですね。

名字は因幡じゃないんですね、とか。

流し雛からいきなり厄神って何ですか、とか。

厄神だから黒兎様の妖気も厄として取り込めるんですか、とか。

聞きたいことは山ほどあります、が。

取り敢えず、挨拶できた娘の頭を撫でる黒兎様の顔を見て、理解したことがあります。

まかり間違っても、天狗がこの娘を害することは、絶対にあつてはなりません。

天狗社会そのものが、黒兎様に、塵も残さず滅せられます、確実に。

黒兎様、この娘を、明らかに溺愛しています。

最低限必要な情報は手に入れましたし、さっさと退散させていただきましよう。

長居は無用です。心労で死んでしまいます。

「そうだ射命丸。ちょうど飲み頃の酒があるんだが、付き合わないか？」

「はい喜んで」

これを頂いたら帰りましよう。

ちなみに、黒兎様が熟成具合を見極めた蒸留酒は、かつて飲んだどのお酒より美味しかったです。

巷ではこれが「鬼の酒」として秘宝扱いされているらしい、と笑っておられました。

え、あの、これ飲んで良かったんですか？ 私。

八雲紫にも滅多に出さない酒!?

天魔様も飲んだことが無い!?

いやいやいやいや駄目でしよう!?

そんな品、一介の鴉天狗に過ぎない私に出しますか普通!?

雛の話を誰かにするのは初めてだ、つて、要するに、娘自慢で気分が乗った勢いですか!?

うわあ……。

この件で、八雲紫に目をつけられたり、しませんよね……。

勘弁してくださいよ……本当に……。

………お酒は美味しいですけど………凄く……。

余談ですが、私が黒兎様にお酒を頂いたことは、権には口止めしておきました。

黒兎様と親しくなった、なんて噂が流れたら、どんな厄介ごに巻き込まれるか、想像したくもありません。

既に手遅れな気はしますが、それでもです。

翌日。

一晩で書き上げた、黒兎様の娘、流し雛の厄神、鍵山雛の調査結果を、天魔様に提出しました。

要点を1枚に纏めた物と、随分と分厚くなった詳細資料。

山に住む野良の神や、河童等に聞き込みした内容も盛り込んだら、1冊の本みたいになりましたね。

1文にすると、『あの娘を傷付けたら天狗が滅ぶ』なのですが。

天魔様もそれに賛成して下さったのか、天狗社会の掟に、新たな項目が増えました。

損得利害を勘定し、天狗が取った選択肢は即ち、不干渉です。

何を契機に爆発するか、どうすれば防げるかも分からないならば、静観するのが正解でしょう。

まさしく、触らぬ神に祟り無し、です。

しかし、ここで意外な動きを見せたのは、八雲紫。

私としては、黒兎様の娘について新聞記事にするつもりはありませんでした。

と言うか、どんな噂好きな天狗でも、黒兎様に関する記事を書くことはありません。

貶す度胸がある命知らずは居ませんし、誉めたつもりが逆鱗に触れることだって考えられます。

おまけに、黒兎様の情報を人間に伝えることは、八雲紫との取り決めで禁じられています。

そんな訳で、娘の方についても、情報が規制されると思っていました。

ですが、蓋を開けてみれば、なんと向こうから「新たな神として人里に周知してほしい」との依頼です。

どういうことでしょうか？

厄神として信仰を集めさせて、八雲紫に何の得があるのでしょうか。

……娘と人間の結び付きを強めることで、黒兎様が暴れる確率を低くする、とかですかね？

他にも色々理由はありそうな気がしますが、下手に首を突っ込むと斬り落とされる案件ですね、これは。

問題は、人里に撒く記事を書くのが、私の担当になったことですよ。

分かっていますけどね、ええ。

どうせこうなると、依頼の話を聞いた時にはもう、分かっていますとも。

トウホウ・クロカラス 幕間

妖怪の山の麓上空。

空中でピタリと止まり、後続の鴉天狗及び白狼天狗にも停止を示す。

「……しくじりました」

「申し訳ありません、射命丸様」

「元々、哨戒範囲からは外れた場所です。」

貴女が責任を負ったところで何にもなりません」

謝罪する権に、冷たく言い放つ。

どうせ、自分がもつと早く察知していれば、だとか、見当違いなことを悔やんでいるのでしょうか。

「私が先行して足止めか可能なら討伐するべきところを、部隊を纏めることを優先した。」

判断を誤ったのは私です。

貴女は自分に与えられた職分を全うしていたのでしよう。余計なことを悩むのは無駄です」

そんなことより、と、改めて視線を眼下の光景へ。

どこからか妖怪の山に侵入した、結構な妖気を放つ、おそらく大百足。

おそらく、と付けたのは、その姿が、通常の大百足とはかけ離れているから。

人間の上半身を幾つも幾つも滅茶苦茶に継ぎ接ぎしたような、おぞましい形状。

一抱えほどもある頭部は醜く歪み、体表で血管やら筋肉やらがビクビクと蠢いています。

見た目だけで、生理的嫌悪感を覚えずにはいられませんね、気持ち悪い。

「やっと思付けたぞお……厄災の黒兎とやらあ……!」

「ん?」
そんな化物が今、黒兎様と相対しているのです。

「……本当に、しくじりました」

頼みますから、怒らせるのなら、貴方だけ殺されて収まる範囲にしてくださいよ、名も知らぬ百足さん。

「……………初めまして?」

やめて! そんな緩い対応しないでください!

妖怪の山の者は貴女のことをある程度は分かっていますが、余所者相手は駄目です!

「呵呵、呵呵呵呵あ! 聞きしに勝る弱腰じゃのお! 厄災よお!」

こうやって調子に乗るに決まっていますからっ!!

「纏う妖気だけは大層な物じゃがあ、儂には分かっておるぞお!

貴様の能力はあ、『自らを強大に見せる』程度に過ぎぬう!

そのような張り子に欺かれる儂ではない!」

あ、あいつ阿呆ですね。

見たところ、大妖怪1歩手前の実力はありそうですが、頭が残念です。

何やら、黒兎様を馬鹿にしたり、黒兎様を畏怖する妖怪の山を馬鹿にしたりしています、喋るほど阿呆が浮き彫りになります。

黒兎様も、あの顔は完全に聞き流していますね。今夜の晩酌について考えている表情です。

こんな調子であれば、百足が黒兎様に襲い掛からない限り、状況は動かないでしょう。

今のうちに、阿呆百足を部隊で囲んで一気に——

「箔をつける為か知らんがあ、姑息にも人間を操りい、ちんけな流し雛を厄神に奉り上げるなどお」

——マズイツ!?!

妖力を風に込め、後続の全員を覆う。

その刹那、世界が震えた。

息が、心臓が、止まる。

悪寒が神経を駆けずり回る。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

黒兎様から溢れた妖気の余波。

百足へ向けられた殺気の余剰。

それに気を取られた、僅かな間に、黒兎様は一足で百足の目前に跳ねていた。

速い。

私の最高速度に匹敵する、超音速の踏み込み。

大口を開けて反応すらできない百足の舌の根を鷲掴み。

同時に、膨大な、不吉を帯びた妖気が、百足の体へ。

「あ……ぎ、ぎいやあああああつっ!!!」

百足の舌が、根刮ぎ引き抜かれた。

絶叫を上げ後退りしようするが、無数の足を纏れさせて、のたうつ。その足が胴体が、『不運にも』ぶつかり合いへし折れていく。

「嘘を吐くと舌を抜かれる。知らなかったのか？」

百足の惨状に対する、黒兎様の静かな声。

何の感情も無い。

声にも、表情にも、瞳にも、何一つとして、込められていない。

抜かれた舌は、真つ黒な妖力を浴び、塵も残さず消えていく。

『『お前は、逃げられない、抗えない』』

静かな、余りにも静か過ぎる宣告。

『『お前は、死ぬまで、意識を失うことも、できない』』

私も、見るのは初めてです。

これが、不運を操る時の黒兎様。

敵を意図的に壊す時のやり方ですか。

言の葉を紡ぐ度に、百足へ流れ込んだ妖気が揺らめき、全身へ染み渡っていきました。

「た、た……たす、助け、て………助けて………くだ、されえ………」

全身の関節が砕け、身動きすらできない百足の、命乞い。

「そうだな。私の気は、もう済んだよ」

霧散する殺気。

いつもの状態に戻られた黒兎様。

漸く、私も部隊を覆っていた風を解くことができます。

咄嗟に守ったから良かったものの、私が対処しなかったら、死者す

ら出たかもしれません。

まだ震えていて、飛行も覚束ない者までいる程ですから。比較的、実力がある天狗を集めたはずなんですけど。

「私はもう、お前に何もしないさ」

そう仰って、黒兎様は百足に背中を向け歩き始めます。

そして入れ替わるように、周囲の茂みから現れる、中小妖怪の群れ。

「既に、私から何かする必要は無いからな」

抵抗する余力も無い、そこそこ強力な大百足。

群がる妖怪達にとつてそれは、人間にも勝るご馳走でしょう。

「や!?! やめ!?! やめろ!?! やめろおっ!!」

黒兎様という脅威が離れた途端に、妖怪の群れが死に体の百足に飛び掛かります。

牙を突き立てて、その肉を妖力を貪り始めます。

「嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああっっ!!」

妖怪達を振り払おうと、足を振るいのたうつ度に、百足の体は更に壊れるだけ。

弾幕を放とうとしたのか、目や口に妖力を込めれば、暴発して更に壊れるだけ。

そもそも、黒兎様が妖気を解放した直後に、こんな数の妖怪が群がるなど、普通は有り得ません。

余りに『運が悪い』としか、言えないでしょう。

「厄災のよお!?! 殺せえ!?! せめて、お前の手で儂を殺してくれえ!」

逃げられず、抗えず、意識を失うこともできない百足の、すがり付くような叫び。

先程の命乞いとは真逆でありながら、本質は同一の願い。

肉体的死か、精神的死か。

最期を迎えるならば、雑魚に喰われて死ぬよりも、強者に葬られたという、妖怪の矜持。

百足の懇願に、立ち去ろうとしていた黒兎様は足を止めて、肩越しに返答しました。

「私の気は、もう済んだ。お前に手を下すつもりは無い」

どこまでも静かな、欠片の感情も籠らない声、表情、瞳。

「お前は、蟻に集られた虫のように死ぬ」

そう言ったきり、黒兎様は百足への興味を失い、去っていきました。慟哭が響き、やがて、消えました。

「権」

「はっ」

冷や汗を拭い、隣に控えていた権に声をかけると、恐怖心を押し殺した返事。

全く以て、仕事熱心な奴です。黒兎様の妖気は、私の風で覆われて尚、辛かったでしょうに。

「貴女は、今回の経緯を、ご息女を愚弄した者をコクト様がどのように処したかを、報告に行きなさい。」

他の者については、元の態勢に復帰です」

率いてきた部隊に指示を出すと、各々が散開していきました。

だというのに、権だけは、まだ私の側に残っています。

まあ、何を聞きたいのかは分かっていますが。

「射命丸様は」

「私はこれから、コクト様の元へ、お手を煩わせた謝罪へ行ってきました。」

貴女はついて来ないように」

なので、その先についても予め釘を刺しておきましょう。

前にも同じような、護衛云々の話がありましたし。

「……………了解しました」

無駄を悟ることができた点に関しては、権も成長しましたね。

で、あれば、私も早く用件を済ませてしましましょう。

徒歩で帰る黒兎様を見失うことは無いですが、先伸ばしにしても、悪化するだけです。

迅速な謝罪こそ、この状況では重要なのですから。

「射命丸か。どうした？」

ご自宅へ向かう黒兎様の元まで、息を切らす無様を晒さないくらい

の速さで到着。

勿論、着地の砂埃が黒兎様にかからないよう、能力を駆使して調整しています。

「この度は、私達天狗の不手際によりお手を煩わせたこと、謝罪申し上げます」

「……………ああ、アレか」

今の間、本気である百足の存在を忘れていましたね？

「大した手間でも無し、アレの目的は最初から私だったらしい。気にするな」

「ご厚情に感謝致します」

「こちらこそ、お前が守ってくれたおかげで、余計な被害を出さずに済んだ。手数をかけたな」

「それが私の務めですから」

黒兎様が放った殺気により、私の部隊が潰れかけたことについて言及される。

当然と言うべきか、私達が居たことは、お見通しでした。

……本当に、この方は敵には回せません。仮に勝てたとしても、被害がどれだけ出るやら。

「私も、できる限りは、今の平穏を楽しみたい。今後も、よろしく頼む」
「はい。これからかどうか、共に山で生きる者として」

緩やかに、いつも通りの微かな笑みを見せる黒兎様の様子に、つられて私も、少し笑う。

「なんだ？ 珍しく機嫌が良いな」

「そうですね。ちよつとだけ、良いことがあったんですよ」

畏れるべき貴女。

敬うべき貴女。

貴女は正に、私達が畏敬するに相応しい。

トウホウ・クロカラス 下の前編

紅い霧では、八雲紫から依頼を受け、異変前に厄を撒くのみ。

春の雪では、完全に傍観。

黒兔様は、動きません。

異変関係よりも、紅霧異変直後に、風見幽香と一戦交えたことの方が大事でした。

当事者達には戯れかも知れませんが、幻想郷全体の大気を揺るがす程の決闘。

本当に、ご自身の影響力を自覚してくださいませ。

貴女の砲撃1発で、こつちは全身がピリピリするんです。能力のおかげで空気の動きに敏感な分、余計に。

まあ、異変後の宴会でも、遅れた花見の席でも、ご相伴にあずかりましたが。

そのままずっと酒造にだけ集中してくださいれば良いのに。

あーもう、この1杯が無いとやってられませんって。美味しー。

なんて、安穩としていたバチが当たった、とでも言うのでしょうか。飲んだ分は働けということなのですか。

働いているじゃないですか私。

どうして妖怪の山に風見幽香が攻め込んで来ているんですか?!?!

事の発端は、天狗の領域付近へ現れた風見幽香に、哨戒天狗が用件を尋ねに向かったことから。

あろうことかあの花妖怪は、「うるさい」の一言と共に、その白狼天狗を殴り飛ばしました。

一命を取り留める程度の、失神できずに苦痛に苛まれ続ける程度の、絶妙な加減で。

は？

何です？ 問答無用？ 会話不成立ですか？

貴女、何を考えているんですか。クレイジーですか。サイコパスつて奴ですか。

上空から様子を伺っていた私が呆然としてしていると、風見幽香が真つ直ぐに視線を向けて来ました。

地表から此処まで、どれだけ離れていると思っっているんですか。どんな感知能力ですか。

凝視しないでくださいやめてください帰ってください。

加えて、私への言付けが、普通に会話する程度の声量だったことから、風を操り音を拾っていたこともバレているみたいです。

もうやだ……怖すぎる……。

何なんですか……：最上位級の連中って、どうしてあなんですか。威圧感を放たないと生きていけない呪いか何か患っているんですか。何て傍迷惑な。

応対は柔らかい黒兎様の方が、まだ接しやすいですよ。怖いことに変わりはありませんけど。

ともかく、私への言葉は、端的。

「コクトの居場所を教えないと、このまま天狗の長の所まで行くわよ」

全速力で天魔様の元へ向かいましたとも。

取り次ぎも何もかもを無視して、手順も規則も踏み倒して、直談判しましたとも。

僅かでも読み違えたら、風見幽香のみならず、黒兎様まで同時に敵に回す案件じゃないですかこれえ!?

「……成る程」

「い……如何いたしましょう、天魔様……」

「コクト殿達の住まいは、我らと八雲紫、秋の姉妹神のみが知る、秘中の秘。触れ回ることは罷り成らぬ」

ですよねえ……。

下手を打つと黒兎様から、「天狗が裏切った」と思われますもんねー。

あややややや詰んでませんかこの状況。

ですが、そんな私達を待つはずも無く、風見幽香は動きます。

散歩の様なゆつたりとした歩調は、一瞬すら食い止められません。笑いながら、悠々と、いつそ優雅に、歩みを進め続けます。

天狗達を薙ぎ倒し、防衛線を踏みにじり、縄張りを侵略し続けます。前線から天魔様に届く報告は、どれもが「太刀打ちできない」という悲鳴でした。

最早、悩む暇すら許されない、決断の時です。

内容が想像できるからこそ、少しでも先延ばしにしてほしかった瞬間です。

「射命丸よ」

「はい」

「その最速の翼を以て、コクト殿へ助力を請いに行け」
「直ちに」

いいーやあーでえーすううー。

そう叫べたら、どれほど良かったでしょうか。

私、清く正しい射命丸。現在、黒兎様とご息女の前にて土下座中のございます。

形振り構っていませんから。切迫し過ぎて張り裂けそうな事態ですから。

逃げたいですけど。冷や汗が止まりませんけれど。

ご息女の不機嫌な様子に、黒兎様がどう反応されるかと、身体が震えますけれども。

「……あー。風見に巻き込まれたのは、災難だったな。奴の相手は、私
がしよう」

た……………助かったああああ……………!

生きています！ 私、今、生きていますよおおおツ!!!

よっしゃー！ 任務完了おー!

「……………母様」

と思つたら、ご息女がまだ不機嫌顔おー!? な、何!? 何で!?

「すまん、雛。」

約束していた酒は、また埋め合わせする」

「……………はい……………どうか、無事に帰ってきてくださいね?」

ああ、と頷く黒兎様に、やっと表情を苦笑気味に崩すご息女。

差し出がましいとは思いますが黒兎様。ご息女が不機嫌そうにし
ていた理由は、酒では無いかと。

そうか。それはそうですね。

いくら黒兎様が地獄を煮詰めた様な怪物でも、風見幽香が相手だ
と、心配もしますか。

ご息女の心配は、黒兎様に全く届いていないみたいですから。

私も口に出すつもりはありませんけれど。

この母娘の関係に口出しするとか、何処にそんな命知らずが居ます
か、いいえ居ません。

はい。

そして今、妖怪の山の上空にて、さながら神話じみた戦闘が行われ
ています。

黒兎様が姿を見せた途端、風見幽香は天狗を意識の外に弾き出し、
一直線に襲いかかりました。

対する黒兎様も、以前に感じた以上の妖気を纏い、迎え撃ちました。
私と言えば、開戦からずーっと、山に降り注ぐ流れ弾を減衰させ
続けています。

天狗の集落は天魔様が対処してくださっていますが、他の場所はそ
うも行きません。

風を固めた壁を貫いて尚も木々を根刮ぎ吹き飛ばす砲撃を、放置なんてできません。

いっそのこと放置したいですけどね!? もう休ませていただきたいですけどね!?

疲れたんですよ! いつまで撃ち合っているんですか!?

そんな常識外れな威力を連射し続けるなんて、どういう原理ですか!

化物ですか!? ああ化物でしたね、ええ、忘れてなんていませんよ!

!

止めに来たであろう、八雲紫の式、八雲藍まで参戦して、三つ巴となりました。

被害増えたじゃないですか何をしに来たんですか貴女っ?!?!?

八雲紫や鬼の方々や吸血鬼姉妹や亡霊姫も加われば、幻想郷!最上位が勢揃いですねアハハハ!

余談ですが、騒ぎが終息した後に訪ねてきた八雲紫に、天魔様が多額の賠償を請求なさったそうです。

管理者として云々とか、式の暴走についてとか。

良い気味です。

ただし、その話し合いにおいて、この件に黒兔様が関わったと人間に伝えることは、禁止されました。

あちら側の理由は分かりませんが、天狗側としても、風見幽香に好き放題された記事を出す者は居ないでしょう。

外部には、双方に都合の良い内容だけが知らされて終いです。

そして、さして時間を置かず、新たな動乱が始まりました。

幻想郷中に広がる、鬼の、鬼の四天王の、伊吹萃香様の、気配。

私は、生まれて初めて引きこもることを決めました。はたての如く。

博麗神社の宴会？ 知りませんよ。そんなことより身の安全が最優先です。

こんな、これまで静観していた黒兎様が遂に腰を上げた異変に関わるなんて、命がいくつあっても足りません。

写真機の整備や過去に集めたネタの再確認で、解決まで暇を潰していますから、お構い無く。

唯、今回の経緯については、是非とも取材させていただきたいですけど。騒動が収まった後で。

その為に、黒兎様から記事を書く許しをいただかなくては。八雲紫とも、どこまで書いて良いか、話さないといけませんね。

「お邪魔いたします、コクト様」

「ああ。伊吹との馬鹿騒ぎについて聞きたい、だったか？

良く来たな、射命丸」

先日、風見幽香の件で伺ったばかりの、黒兎様のお住まい。

……不覚ながら、応接間で黒兎様と向き合っても、緊張感に慣れてきた自分が居ます。

いけません。

これはいけませんよ。

危機管理がなっていません。

黒兎様の危険性を忘れたわけでは無いはずでしょう、私。

馴染んで鈍ったら、すぐにでも取り返しのつかない失態をしてしまいかもしれないんですからね！

慣れこそが事故の元なのですよ！

「米酒と果実酒、どっちが良い？」

「あ、では、今日は果実酒の、醸造酒の方で」

「ふむ。仕事中に蒸留酒は飲まない主義だったか？」

「強いお酒も好きなんですけどねー」

「そうか。なら、そちらはまた今度だな」

「あやややや。楽しみにさせていただきます」

そう！ これはあくまでも、和やかな空気を作る取材テクニクな

んですからね！　嘘じゃないですよ！

「そう言えば、伊吹とやる前に、博麗の巫女とも手合わせしたな」

「詳しく聞いてもよろしいでしょうか!？」

その後、伊吹様との戦いは勿論、そこに至るまでに戦った相手についても取材させていただきました。

……道中が、それぞれ異変扱いできる規模の決戦なんですけど……段々驚かなくなってきました。

その上に、『妖怪が博麗の巫女に勝利した』という一大事。

これ、確実に、書いても八雲紫の検閲で削除される内容ですね。

強行したら、私が削除されること間違い無し。待ったも無いでしょう。

ええ当然、聞かなかったことにしますとも、はい。

フエイト・クロウサギ

【前書き】

知り合い全てを看取り、「因幡コクト」を知る存在が居なくなる程の未来。

彼女は、「妖怪」であることをやめた。

悪神、厄災の黒兎。

不運を司り、不吉を創造し、災厄を操る、絶対悪の女神。

【第三次聖杯戦争編】

最強厨アインツベルンが「アンリマユ召喚したら最強じゃね？」している頃。

遠い遠い、異なる世界の神霊の座で。

アンリ（神）「?%●*（訳：なんかあ喚ばれちよおが、こんな召喚式じゃワシ出れんわなあ）」

コクト（神）「そうなのか。貴方まで届く時点で、稀だろうに」

アンリ（神）「# \$ ◆（訳：こんじゃあワシの名前え押し付けられとお英霊が精々じゃけえ。せめてワシに『形』がありやあなあ）」

コクト（神）「……勿体無いな……私の分霊を『殻』に貸そうか？」
アンリ（神）「# \$ ◆（訳：ええんか？ 助かるわあ）」

コクト（神）「分霊が召喚されるのは、私も初めてだ。これも良い経験、かな」

暇を持て余した、悪神達の、遊び。

喚ばれて飛び出たアヴェンジャー！

マジモンの神霊だよ！

真正正銘の悪神だよ！

やったねアハト翁！ やっちまったね！

性格と胸はリーゼリット、性能はセラなホムンクルスをマスターに、冬木へ投入！

何してくれてんだジジイてめえ！

魔力供給そこそでお人形さん（巨乳）なマスター。

酒を飲ませてみたら、ちよつと笑った。可愛い。

インプットされた物でも、使命に一生懸命な所もよし。

触るとホムンクルスの元々短命な寿命が縮むから、距離は取るが、割りときに入った。

段々「人間性」に目覚めるホム子と、戦争そつちのけでマスター好みの酒を模索するコクト。

が、悲しいけどこれって戦争なのよね。

戦闘の余波を受けて、肌身離さず守っていた「聖杯の器」が壊れた。

そして、芽生えかけた自我も壊れた。

使命を失い、死ぬ気力さえ失い、ニンギョウと成ったマスター。

かき集めた小聖杯の残骸に、厄が染み入る。

「あの娘は、道具だ。

聖杯を完成させる為に铸造された道具だ。

だが、いや、だからこそ、か。

最期に、『悔しい』と、泣いたんだ。『役に立てなかった』と。

最後まで、何も成せなかったと。

……………故に、この行為は何の意味も無い、単なる私の八つ当たりだ。

マスター主人の身心すら守れなかった、サーヴァント不良品の癩癩だ。

マトモ幸福など夢に見るなよ？

厄に塗れ、厄に沈み、厄に溺れて朽ち果てろ」

その日、大聖杯が山ごと吹き飛んだ。

小聖杯を通じ神威で犯され、内側から厄に穢されて、泥が噴き出した。

マスターもサーヴァントも残らずモグモグされた。

冬木の聖杯戦争は、第三次イサン大事惨で終わった。

※ コクトからホム子への好感度は、『コレ』でも友達レベル

ホム子「?◆?@ (訳:おお! なんじゃあこの身体、えらい馴染みがええのお!)」

コクト「ちゃんと『殻』を被れ」

ホム子「▼……ごめん、アヴェンジャー。はしたないところ、見せたね」

コクト「はいはい。それで、互いに受肉した訳だが」

ホム子「私は、受肉というより、憑依?」

コクト「どちらにせよ、大聖杯を食った魔力が尽きるまでの間、死にはすまい」

ホム子「つまり、暇?」

コクト「暇だ。どうしようか」

ホム子「人類殲滅？」

コクト「物騒だなおい。アラヤだのガイアだのとやり合う気は無いぞ、私は」

ホム子「残念」

コクト「とりあえず、雇い主への挨拶がてら、ドイツにでも行くか」
ホム子「分かった」

お客様が（悪）神様×2でアインツベルンオワタ。

【FGO編】

召喚

「サーヴァント、アヴェンジャー。」

悪神アンラマンユの『殻』として参上した。

他者を守る戦は不得手だが、仕事はしよう」

開始

「始めようか」

「さて、生き残ろう」

スキル

「さあ、どう出るか」

「では一献」

コマンドカード

「ああ」

「うむ」

「分かった」

宝具カード

「全く素晴らしく、運が無いな」

アタック

「よつと」

「そら」

「はっ！」

エクストラアタック

「嘆いて沈め」

宝具

「私那不運。私那不吉。私那不災。

——私を呪え、世の不運は我に由来す！」

ダメージ

「ちっ」

「っ、効くな」

戦闘不能

「……撤退する」

「……しくじった」

勝利

「悪運も運の内、だ」

「酒蔵を開こうか。勝ち戦の酒は美味いぞ？」

レベルアップ

「幾つに成つても、自身の成長は喜ばしい」

霊基再臨1

「これは……妖怪の頃の姿か。懐かしいな」

霊基再臨2

「多少はマシになってきた、かな」

霊基再臨3

「……こういう派手な装いは、如何にも『神です』と主張しているよう
で、些か気恥ずかしい」

霊基再臨4

「ふむ。『命をかける。或いは、この身に届くかもしれん』なんてな」

絆Lv. 1

「本来よりは弱まっているといえども、私が纏うのは『この世全ての不

運』の嘆きだ。余り近寄らないことを勧める」

絆L v. 2

「マスターが呪詛や毒の類いに耐性を持つことは知っているが……。忠告する。誰かを助けたいのなら、先ずは我が身を惜しむことだ」

絆L v. 3

「こんな形ナリだが、妖怪として二百万年近く生きた挙げ句、悪神に成った身だ。

……何が言いたいかというと、だな。頭を撫でるな今すぐやめろ！」

絆L v. 4

「不運を恐れず、考えるよりも先に他者の為に動ける……。

……マスターと居ると、どうにもあの子を思い出すな。

自慢の可愛い娘だよ。本当に、私には、過ぎた子だ」

絆L v. 5

「不運を撤くしか能が無い悪神だが、あらゆる障害の破滅を以て、貴方の幸運を成そう。

神の加護という奴だ。御利益の程は、まあ、期待に沿えるよう努力しよう」

会話

「外へ出る際に、果実なり穀物なり、もっと集めるべきだったな。

英雄共め、酒を造る端から飲み干しおって」

「……酒造の神では無い。これは趣味だ」

「私に触れようとする者など、娘以外では、古い友くらいだったのだが……まったく」

好きなこと

「好きなもの、か。娘と姉と、それから酒だな。

語らう友が居れば、更に良い」

嫌いなこと

「嫌いなもの？ 聞く耳を持たない義勇軍だ。

マスターも『世界を救う』のであれば、独善に固執しないよう心掛けると良い」

聖杯について

「聖杯に興味は無いが、貰えるなら……器に見合う酒でも注ぐか」

イベント開催中

「宴は良い。酒宴であれば、更に良いな」

誕生日

「永らえて百かそこらの人の身だ。1つ1つの齢を、大切にな」

キャラクター詳細

異なる世界において、「厄を弾く程度の能力」を生まれ持ち、周囲に不運を押し付けた化生。

生きるだけで他者を害し、「不運を司るモノ」と認識され、悪神の権能を宿した。

彼女がどうであろうとも、世界にとっては、「この世全ての不運」を支配する無銘の悪性である。

パラメータ

筋力E+ 耐久E 敏捷A+ 魔力EX 幸運↓ 宝具A↓A+

絆Lv. 1で開放

身長／体重：132cm・30kg

出典：不明

地域：不明

属性：中立・悪 性別：女性

永い年月の果てに、悪神の座へ至った妖怪兔。

絆Lv. 2で開放

本来この世界と何ら縁を持たない、平行世界より遠い異界の存在。

そちらでは悪神アンラマンユと同一視されることもあるため、今回の召喚に便乗した。

定まった形が無いアンラマンユの「殻」を担い、神格も元の彼女を

再現している。

絆Lv. 3で開放

○厄移し：C++

接触した対象へ、厄、即ち不運の性質を持つ魔素を流し込む。

サーヴァント化に伴い緩和されているが、魂を穢す始原の呪詛。

常に不運を弾くために、彼女は「幸運」のステータスを持たない。

絆Lv. 4で開放

○危機察知：B+

能力で弾くことのできない「危機」を感じ、死に至る可能性を予知する。

危険性、致死性が高いほど、より強く「察知」できる、理論上の不死。

○秘蔵の古代酒：A

材料にも製法にも一切の神秘を用いず、技術と熟成で神域に至った酒。

個々の好みに最適な酒を彼女が選ぶことで、上戸下戸を問わず魅了する。

絆Lv. 5で開放

『世の不運は我に由来す』

ランク：A↓A+ 種別：対人宝具

身に纏う「この世全ての不運」を束ね、「この世全ての悪」の名を冠した、災厄の神威。

種別は対人だが、その余波で撒き散らされる「不運」は、対軍宝具に匹敵する。

仮に、悪神としての権能を發揮し使用した場合、種別は対国宝具となる。

幕間の物語クリアで開放

生まれてくる前に「死にたくない」と願った。

生まれた後も妖怪になっても「死にたくない」と願っていた。

誰かを害しても犠牲にしても殺してでも「死にたくない」から生きて生きて生きて。

絶対悪に成って尚も願い生き続けた、彼女は今でも「死にたくない」と願う。

保有スキル

○厄移し：C++ 初期チャージタイム7

敵単体の攻撃力・防御力ダウン（1ターン）、自身の攻撃力・防御力アップ（1ターン）

○危機察知：B+ 初期チャージタイム7

自身に回避付与（1ターン・1回）、自身にガッツ付与（1ターン・1回）

○秘蔵の古代酒：A 初期チャージタイム9

味方単体のHP超回復、低確率で魅了付与（デメリット）

クラススキル等

○復讐者：A 自身の被ダメージ時に獲得するNPアップ、自身を除く味方全体の弱体耐性ダウン（デメリット）

○忘却補正：EX 自身のクリティカル威力アップ

○自己回復（魔力）：C 自身に毎ターンNP獲得状態を付与

○女神の神核：EX 自身に与ダメージプラス状態を付加、弱体耐性アップ

○厄を弾く程度の能力：A+ 自身の弱体耐性アップ、敵全体のクリティカル発生率ダウン

宝具『世の不運は我に由来す』：アーツ属性

敵単体に大ダメージ ※2万前後

敵全体の強化状態を解除

敵全体の弱体耐性・攻撃力・防御力・クリティカル発生率・クリティカル威力・宝具威力ダウン（3ターン）へオーバーチャージで効果アップ

敵全体に確率で呪い付与（3ターン）へオーバーチャージで効果アップ

強化後「敵全体にスキル封印状態を付与（1ターン）」が追加

絆礼装 『厄災の黒兎』

説明文

極陽の中に陰あり。極陰の中に陽あり。陽中の陰。陰中の陽。

厄を纏いながら自身は穢されない彼女は、まさしく陰中の陽。

穢れ無き身に押し殺した心は、まさしく陽中の陰。

生も死も有も無も美も醜も善も悪も自も他も人も神も妖も、壊し尽くす憎悪の念。

効果

自身に毎ターン何らかの強化状態を付与（1ターン）

敵全体に毎ターン何らかの弱体状態を付与（1ターン）

イラスト

第1段階：黒い靄を纏った黒ウサミミ幼女

第2段階：黒ワンピース

第3段階：悪神衣装

最終再臨：ラスボス綺礼のポーズ

表情差分：ジト目・やや開眼・瞑目・不機嫌

絆礼装：厄に溢れたコクトちゃんマジグレモード、つまり厄い

運用例

基本的に火力は他に任せて、デバツファア兼回復役に専念
宝具によるダメージは添えるだけ（デバフが本体）

古代酒を自分に使うと、馬鹿高い弱体耐性によって、ほぼデメリット無し（稀に良く魅了）

ステータスは低いが、スキルが上手くハマれば、長期間生き残れる

幕間の物語『生死享受す全てに不運を』

アヴェンジャーとして「憎悪を解き放った」コクトの撃破

開始時点で「厄を弾く程度の能力」により、控えを含めてスター発
生率ダウン

火力担当のシャドウバーサーカー「ハードラック」を複数連れて、ス
キル連打してくる

HPが減ると「危機察知」と「秘蔵の古代酒」を自身に重ねる

死なない、クソウザい、宝具ウザい、ハマると削り負けしかねない、
ウザい

トウホウ・アカアクマ

——禁忌、フォーオブアカインド——

「お母様を私が殺した♪」

「お父様を私は食べてる♪」

「砂糖と」「スパイスと」「素敵な物♪」

「嘘の涙と仔犬の尻尾♪」

「お母様を」「40回」「お父様を」「40と1回」「めったうち♪」

「薔薇」の「花輪」と「花束」で♪」

「みんなみんな落つこちた♪」

「頭も手足も」「バラバラに♪」

「散らかしっぱなし」「出しっぱなし♪」

「だれがお父様殺したの♪」「だれがお母様殺したの♪」

「あなた?」「あなた?」「私と私が言いました♪」

「お馬も」「家来も」「殺してしまつて」「2度と元には戻らない♪」

「あなたも死ねば腐るのさ♪」「鼻から顎に蛆が這う♪」

「お姉様が」「骨を拾つて」「埋めてあげるの」「マイ・フェア・レディ♪」

おいてけぼりの、一人ぼっちが首を吊り、そして誰もいなくなる。
そうなる、はずだった。

くらいくらいへやのなか。

なにもみえないまっくらやみ。

ただどこにはぜんぶがあるの。

わたしはわたしでたりているから。

なんて怖い！
すごく怖い！

私が！ 私が、誰かを怖いと思っている！
頭がどうにかなりそう！

とつくに狂っていたと思つたのに！
割れそう！ 砕けそうに痛い！

視線を合わせただけで心も体もギシギシ鳴っている！
見たくない！ あなたを見たい！

見られたくない！ 私を見て！
怖い！ 痛い！ 苦しい！ 嬉しい！

弾幕を放つ。防がれる。
炎の剣で凧ぎ払う。避けられる。

四人が増えて包囲する。一人撃ち落とされて逃げられる。
壊れない！ 壊せない！

壊したいのに！ 私が壊そうとしているのに！
なのに全然壊れない！

私が撫でたらみんな挟れてしまうのに！
抱き締めたらバラバラになつてしまうのに！

壊れない！ 壊れない！ あなたは壊れないでいてくれる！
壊したい！ 壊したい！ あなたを壊してしまいたい！

早く壊れて！ まだ壊れないで！
遊ぼう！ 遊ぼう！

イライラするの！ ワクワクするの！
もつと楽しませてよ！ あなたが壊れる瞬間が待ち遠しいの！

あなたと遊ぶのが楽しいの！
まだ遊んでよ！ 壊れないで！ 壊れて！ ああもう私の頭が壊

れそう！
イライラしてワクワクしてドキドキしてゾクゾクしてウキウキし

てソワソワしてグツチャグチャ！
ほら捕まえたわ！ 掴まえたわよ！

さあ、きゅつとしてー

ドカーン、と。
真つ黒な光の束が、私を飲み込んだ。

「フラン！ しっかりしてー！」

おねえさまのこえがきこえる。

でも、どこからののか、よくわからない。

ちかいような。とおいような。

すがたもみえない。なにもみえない。

てあしもぜんぜんうごかない。

「こんな……！… こんなこと……！…」

おねえさまのこえがきこえる。

「お願いよ……！… 目を覚まして……！… フラン……！…」

わたしをよんでる、おねえさまが、わたしを。

「お、ねえ、さ、ま……！」

こえがだせない。のどがひきつる。

「フラン！ ああフラン……！… よかつた……！…」

「おねえ、さま……どこに、いる、の……？」

なにもみえない。

よくきこえない。

においもわからない。

なにかにふれているのかどうかすら。

「……フラン、私の血を飲みなさい。応急処置くらいにはなるわ」

「うん……！」

かすかに、おねえさまのにおいがする。

たぶん、すぐそば。

なら、このおぼろげなかんしよくは、だきしめられているのだろうか。

早く早く今すぐに。

「やだ！ やだやだやだやだやだ！」

「フラン!? 大丈夫!？」

壊したい壊したくない憎い愛しい食べたい大好き。

「だめ！ こっちに来ないで！」

「あ……！」

地下室から出て来た時の穴に飛び込む直前、私の拒絶で傷付いた表情をするお姉様に、堪えきれず弾幕を放って、壊したくなくて壊したくて、私は逃げ出した。



「……パチエ。フランはどうなったの……？」

「私も、今ちようど追いついたばかりなのだけど……」

妹が落ちていった、恐らく地下室へと繋がる穴を覗き込む。

深い深い。まるで私達姉妹の距離みたいに深い穴だ。

「とりあえず状況を説明するわ、レミィ。」

館の戦力はほぼ全滅。生き残っているのは、妹様と門番の二人だけ。

そして、見ての通りだけど、館内は瘴気が溢れているわ。生き残りの体を蝕んでいるのも、同じ物ね」

濃さは比較にならないけれど、と、肩を竦めるパチエ。

「……唯の瘴気じゃなさそうだけれど、これって、どういう物か分かるかしら？」

「予想はつくわ。私も知識でしか知らなかったけれど、厄、と呼ばれる物を、妖力で強めているみたい」

「厄？」

「東洋独自のーいえ、西洋にもあったのかしら？ 名称が異なるだけの可能性も……」

「考察は後にして」

知的好奇心を刺激されたのか、脱線しようとする話題を戻す。

優秀なのだけど、優秀な魔女という探求者だからこそ、彼女の知識欲は状況を選ばない。

「簡単に言うくと、運が悪くなることに特化した、極めて原始的で、だからこそ対抗手段の限られる呪いよ」

「運が悪くなる？ でも、その程度なら……」

「門番は、正門を砕いた攻撃を生き残ったことで気に入られたのか知らないけれど、『運悪く意識を失う』だけで済まされた。

そして、館内にいた者は、『運悪く』死んだ。

私が館とこの周辺に構築していた術式も、残らず『運悪く』ガタガタになっていたわね」

淡々と文面をなぞり読み上げる様に、魔女が告げる。

「汎用性高すぎるでしょ……反則じゃないの」

「運命を操る貴女が言うことかしら？」

そんなに乱発できるものでも……と、また話が逸れた。

「襲撃してきた相手の能力は分かったわ。それなら、フランはどういう……」

私が言い終える前に、パチエは視線を落とす。

珍しいことに、そこに滲んでいる感情は、悲哀、憐れみ。彼女は今、フランのことを、哀れんでいる。

「……あの子の力は、破壊衝動と狂気は、生まれついていたもの……」

そんな彼女が、『力と破壊衝動はそのままに、正気を得た』としたら、どうなるかしら？」

そして言葉にするのは、余りに惨い、余りにも不運な、現状。

「両親を殺したこと。周囲を無差別に殺戮したこと。姉である貴女も、何度も殺そうとしたこと。

その事実を、妹様は、『運悪く』手に入れた正気で、見せ付けられているのでしょね」

声も出せない程の激情が、私の内側で荒れ狂った。

「とまあ、貴女が私達の館をボロボロにしてくれた後、そんなことがあったのよ」

「戦争は嫌なものだな」

「他人事かしら?」

「当事者意識ならあるが、よくあることだな、としか言えん。

出力重視で厄を放つ場合に、『相手が忌避する不運』が発動することは、何度もあった」

私もまた、ヒトデナシだからな、と、月明かりに照らされるテラスで、ワインを嗜む妖怪兔。

遊び疲れたフランは、自分の部屋で眠っている。

「ちなみに、もし貴女の家族が似たような目にあったら?」

「報復で関係者を皆殺しにする」

当然だろう? なんて小首を傾げる、不運の支配者。

ああ、全く本当に、どうしようもないくらい、妖怪らしく我が儘だ。

「それなら、私にも報復の権利があるのかしらね?」

「無論だ。だが、この酒を飲み終えてからにしてもらいたい」

「……冗談よ」

「それは良かった。せっかく良い酒を出してもらったからには、味わって飲みたいからな」

表情は、一貫して変化無し。僅かに目元や口の端が動くくらい。

覇気も無ければ気力すら無く、野心や自己顕示欲なんて微塵も感じない。

妖怪らしくなくて、だけどそれでも、彼女は妖怪だ。

在るがままに、己のままに、在り続ける化物。

「結果論としてだけど、あの時に正気を得たからこそ、今のフランがあるもの。」

その点は、貴女に感謝しているわ」

そうか、とだけ返して、変わらないペースでワインを飲むコクト。「聞く限りでは、自力でどうにかなる状態ではなかっただろう。」

貴女の努力による成果か」

「妹に対して姉がすることに、努力も何もないわ。当たり前のことよ」
「成る程、道理だな」

家族愛なんて、妖怪なら大抵が鼻で笑う。己だけで生きられない弱者の戯れ言と嘲る。

だけど彼女は笑わない。賞賛もしない。

唯、その通りだ、と頷くだけだ。

「……本当に、不思議だわ、貴女は」

「その台詞、初めて顔を合わせた時にも言われたぞ」

「知れば知るほど不思議なもの」

「何がだ」

少しだけ訝しげな雰囲気を纏った様子に、小さく笑う。

明らかに破綻していて、どう見ても壊れていながら、唯そこに居続ける。

その上に力まであるのに、尚もバランスを崩さないなんて、どうなっているのやら。

「面白いわ」

「そうか」

それだけ言って、飲み干した私のグラスに、ワインを注いでくれる。

お返しに、私も彼女のグラスに注ぐ。

月を見上げて、もう一度笑って、そして、軽い仕草で互いに乾杯した。

——自力でどうにかなる状態ではなかっただろう——
そうだ。その通りだ。

正気と狂気がさざ波の様に寄せては返し、叫びながら自分自身の肉を傷付けるあの子の姿は、廃人になる瀬戸際だった。

私が幻想郷への侵攻を決めたから、館の防衛をあの子の戦力で充分だと判断したから、そもそも、相手の力をまるで読み損ねたから。

厄災の黒兎を、単なる伝説に過ぎない、と捨て置いたから。

だからあの子は傷付いた。こんなことになってしまった。

それをどうにかできるなら、私の体が何度裂かれようと千切られようと碎かれようと、構いはしない。

私は姉だ。

あの子は私の妹だ。

狂っている時に狂ったままで襲いかかって来ようが。

正気の時に破壊衝動を抑えられず泣きながら襲われようが。

妹の為に体を張る理由なんて、姉だから、で足りている。

パチエが満月の魔力を込めた護符により不死性を高め、私の全身で、あの子の全てを受け止める。

何度壊されようと私は死なない。だって、そう決めたのだから。あの子を救うと、既に私が決めたのだ。

壊されて壊されて壊されて壊されて壊されて。それでも止まらず、語りかける。

この程度、何ともないと見栄を張る。妹に情けない姿など見せられない。

欠損した部位を再生しながら、優しくゆっくり語りかける。少しでも優雅に、格好良い姉でいたいから。

何年かかっても良い。

いくらでも、何度でも付き合ってみせる。

だって、四百年以上も、私はあの子を閉じ込めて、誰とも触れ合わない様にして、壊さない様に、壊れない様に、ほったらかしにしたのだから。

あの子を一人にしていたのだから。

だからそう。これは唯の埋め合わせだ。

フランが本当に正気になって、破壊衝動を制御して、能力を暴走させない様になったら。

そこからようやく、私達は姉妹を始められる。

そして今、やっとあの子は、紅魔館の者や、霊夢や魔理沙、コクト等の限られた相手であれば、会話ができるまでになった。

最近では自分から新しい知り合いを作ろうとするくらいになっている。

もしも、あのままなら、『不運』があの子に降りかからなければ、今も変わらなかったかもしれない。

あのままずっと、地下に閉じ込めていたかもしれない。

そう考えれば、この目の前でひたすらワインを飲み続ける、かつての敵で、新たな友に、少しくらいなら恩を感じても良いだろう。

「む。酒が尽きた」

「咲夜、新しい物を持ってきなさい」

「かしこまりました、お嬢様」

だって、こんなにも月が綺麗なのだから。

トウホウ・アカイスズ

「近頃、フランに勝てん」

「そうなんですか!？」

「驚き過ぎだ。隙だらけだぞ」

「あいたあっ?!」

懐に滑り込んで来たコクトさんの掌底に、顎をかち上げられる。舌
噛んだ……。

手合わせということで、両手足に妖力を纏って、厄を弾いてくれて
いるものの、代わりに、打撃を受けると体ごと弾き飛ばされる。

ちやうど、飛行した訳でもないのに打ち上げられている、今の様に。
何とか空中で体勢を持ち直して着地したが、完全に一本決められて
しまった。しかも、自ら隙を晒した挙げ句、だ。

残心を終えたコクトさんも、無表情ながら呆れた様子で、私を見て
いる。

「いくら稽古と言えど、気を抜きすぎだ。……初めて会った時も、投げ
られた後に混乱し隙を見せていたしな」

「えーと……あの時はですね、その、未熟だったと……」

「その未熟を克服できないでどうする」

「はい……」

ぐうの音も出ませんその通りです。

でも言い訳させていただきますとですね……。

「私がフランに勝てんと言ったことが、そんなに意外か？」

「驚いて固まるくらいに」

「その程度で動きが鈍るのが……これ以上はくどいな。止そう」

良かった。説教回避。

「それで、妹様に勝てないっていうのは、弾幕ごっこで、ですか？」

「実戦で勝てなかったら、私は死んでいる」

ですよ。特に妹様の場合だと。

「要所要所に、非殺傷の弾を交せてくる様になってな……小癩な真似

を覚えおって……」

「あーなるほど」

納得した。

「コクトさん、致命傷にならない攻撃だと、察知できないんですね」
「そういうことだ。以前のフランは、一つ残らず殺意の塊だったのだが……」

要するに、相性の問題だろう。致死性の攻撃であればあるほど、危機察知は鋭敏になる、と。

「全部が致命傷級の場合、どのくらいまで読めるんですか？」

聞きながら、踏み込みから眉間、と見せかけて喉狙いの突き。

「ほぼ未来予知、かな。読み損ねたことは無い」

私の攻撃を最小の動きで避け、流れる様に、リーチの差を埋める前蹴りが放たれる。

辛うじて防御が間に合ったけれど、触れた瞬間に、足先に束ねられた妖力で弾かれ姿勢を崩された。

「まあ、もしも読み損ねていたら、私はとつくに、幾度と無く死んでいく訳だが」

息つく暇無く、私の防御を弾いた反動で、くるりと回転するコクトさん。

空間を切り裂く、鋭利な回し蹴りが、私を襲う。

単に防ぐだけでは、また弾かれて連撃を受けてしまう。じり貧。対抗策。直感。

咄嗟の閃きに身を委ねる。

「おっと。気功の……硬功か」

「よくご存じで」

「……まあ、色々あったからな」

気によって体を堅固にし、額で蹴りを受ける強引な防御で凌いだが、相手の動揺は無いも同然。

本当にやりにくい人。

人、と呼んだら、毎回律儀に「妖怪だよ」と返されるけれど。きつと、何かこだわりがあるのだろうか。

それはそれとして。

先ほどの会話で、思い付いたことがある。

たとえば手合わせでも、当たり所が悪ければ死ぬ可能性のある打撃では無く、動きを封じる関節技ならー

「急に慣れん技を使おうとするな。初動の隠し方が雑だ」

あつさり読まれて投げられた。

「弾幕の中に、私の回避する道筋を読み非殺傷の弾を交ぜるならともかく、体術をそれに応用するのは無理がある」

「ですよー……」

地面にめり込む勢いで叩き付けられた。

私も妖怪なので、このくらいで死にはしないが、痛いものは痛い。

「と言いますか、妹様ったら、そんな器用なことなさっていたんですか」

「遊ぶからには勝つ為に工夫する、と。子供らしくはあるな」

ふっ、と目尻を緩めるコクトさん。外見は幼いのに、おばあちゃんみたいな表情だ。幼女なのに。

「もう一度投げられたい様だな」

「心を読まないでくださいよ」

「顔に出過ぎだ」

さてさて。いつまでも埋まっていられない。

まずは下半身を地面から垂直に伸ばし、脚を振り下ろす反動を使い立ち上がる。

うわっ。服が土まみれ。後で洗わなきゃ。

「ですけど、非殺傷の弾は察知できないってことは、もしかしてコクトさん、弾幕ごっこ苦手ですか？」

「ああ。弱いぞ」

いやそんなあつさり自分を弱いとか言って良いんですか妖怪が。

妖怪なんて、自尊心と他者の畏怖で形成されている様な存在でしよう？

お嬢様が何度も仰っていたが、本当に不思議な人、もとい妖怪だ。

私も、妖怪らしくない、とは言われることがあるけど。

「今のところ機会はないが、私の厄弾で死ぬ相手とかだと、最悪だな。手が出せん」

「威力を弱めればどうでしょうか？」

「最小なら、十六夜辺りであれば数発は耐える、かもしれない」

「……人間に向かって撃つちやダメですね」

「だな」

意外に不器用、なのだろうか？ 既に付き合いは、初対面時を除いても、紅霧異変以来、それなりの期間と頻度だが、知らなかった一面だ。

二、三千年くらい前までは、無差別に周囲へ厄を撒き散らしていた、なんて聞いた覚えもある。

聞いた時は、物騒だとしか感じなかったけれど、改めて考えると少し微笑ましく……無いな。全く無い。

この人の纏う厄がバラまかれるって、それなんて地獄絵図？

「対人間用のスペルカードも、一応作ってはみたが……どうにもない……」

「未完成なんですか？」

「殺傷力の高い弾幕を放つ相手には対応できん」

「どうして両立させようとしてるんです!？」

あと、意外に欲張りなものも、今日初めて知ったことだ。

「……さて、休憩は充分か？」

「ふう………かしこまりました。お相手させていただきですよ、お客様」

言葉を交わし、拳を蹴りを交わす、武を介した交流。

初めて見た時は、完全に災厄が形を成す魔王だった相手と、こんな関係になるとは、想像もしていなかった。できる訳も無いけど。

だって、あの時のコクトさん、本気で怖かったし。

何が起きたかも分からず仲間全滅、守るべき門は崩壊。

決死の覚悟で、せめて一矢報いようとしたら、気付けば投げられ地面に仰向け。

不吉極まるその右手が、私の顔に、ゆつくりと……あ、寒気が……。言うまでも無くトラウマである。今でもたまに夢に見るくらい。紅霧異変後の宴会で、唐突に再会した時のことも、良く覚えている。膝が震えて仕方が無かった。

ああ私ここで死ぬのかな、的な走馬灯まで……凄く気安く話し掛けられて霧散したけど。

怖くて、気安くて、気紛れで、面倒見が良い時もあった、お酒が美味しくて、武術が好きで、娘が大好きで、意外と不器用で欲張り。

そんな良く分からない妖怪兎さんは、こうして付き合ってみると、思ったより何も考えていなかったり、かと思えば思慮深かったりで。

結局、良く分からない人なのであった。

「何か腹が立つことを考えられた気がする」

「気のせいでウギャーッ?!?!」

ついでに、やけに勘が鋭くて、割りと容赦が無い。

……………やってしまった……。

「……コ、コクトさーん？」

眼下にはちよつとしたクレーター。

やらかした……。

「生きて……はいると思いますけど……無事ですか……?」

いや本当にもう、やってしまったのである。

「ああ。もちろん生きています、メイリン」

クレーターの底から、弾け飛ぶ砂礫。

ゆつくりと浮かび上がってくる小柄な人影。

魔王が居た。

「見事だ。実に見事だ素晴らしい。」

なるほど、周囲の気、そして龍脈の力をも取り込む、か。

確かにそれならば、肉体が維持できる限り、際限無く自身を強化できる。

「どこことなく、伊吹の奴の能力にも、通じるところがあるな」

両手足に纏っていた妖力は、厄と混ざり合い、否、厄を貪り喰らい、生物じみた脈動をしている。

私の『奥の手』を防いだのも、あの力か。

出会った時よりも更に禍々しい、悪夢よりも悪夢な、その威容。

「では、手合わせを続けよう」

私は今日、ここで死ぬのかもしれない。

第2部：風神録く地霊殿 第風話

「お帰りなさい、母様」

「お帰りなさいーい！」

「コクトさん……お帰りなさい……」

帰宅するや否や、雛と秋の姉妹神がお出迎え。帰る所があるというのは嬉しいものだ。美少女達に迎えられるなら尚更。

と、そんな『前世』が暴走しかけた妄言はさて置き。

「ただいま。怪我は……大きなものは無さそうだな」

頭から爪先まで、三者の姿と神力を確かめる。博麗の巫女達とやりあつたと聞いて、気が気でなかったが、どうやら無事なようだ。

負傷は掠り傷と軽い打撲程度。消耗し存在が薄れている様子も無し。服は着替えたらしい。

「母様つたら……ちゃんとルールに則った弾幕ごっこなんですから、問題ありませんよ？」

「ほら。コクトさん心配性だから」

「……ご配慮いただき、ありがとうございます」

「まあ……方が一規則を逸脱しているようであれば、少しばかり『話し合い』に赴く必要があるしな」

「「やめてください」」

完璧に異口同音で止められた。解せぬ。

とある秋の日のこと。妖怪の山の頂上付近に、随分と懐かしい気配と共に、神社と湖が出現した。

何となく、いつかまた会うだろう、とは思っていたが、それでも懐

かしく感じるのは、私もあの日々を楽しんでいたからか。

嘗ての諏訪の国で過ごした、あの日々を。

「……久しいなあ……洩矢神様よ……」

山頂から吹き下ろした、秋の風が頬を撫で、過ぎ去ってゆく。

「その妖怪鬼！ 止まりなさい！」

で、思い立ったが吉日と、酒を手土産に社まで挨拶へ出向いたところ、緑色の巫女に阻まれた。

ちなみに、天狗にはちゃんと『古い知己に会いに行くから通せ』と伝えてある。問題無い。やけに慌てていたが私は知らん。

「見たところかなりの大妖怪！ しかし！ この先には進ませません！」

元気な娘である。これが若さか……。

それに、なによりも。

「……ふむ……現人神か……しかも、洩矢神様の末裔とは……」

髪の色といい、気配といい、諏訪の国に居た洩矢神様の直系そっくりだ。隔世遺伝という奴か？

ますます懐かしい。人間で例えるなら、親戚の子供を久し振りに見る様な感覚だろうか。

人間の感性なぞ覚えていないので、違うかもしれないが、まあどうでも良い。

「え？ 諏訪子様を……存じなんですか？」

「その諏訪子様が、私の知る洩矢神様と同じであればな。昔、世話になった方だ。叶うならお目通り願いたい」

「え、ええつと……あれ？ この場合、通しても……いやでも確証がないし……もし敵なら……」

おー混乱しとる混乱しとる。

幻想郷の住民達は、雛等の例外を除いて、どいつもこいつも常識を投げ飛ばした連中ばかりなので、こういう初々しい反応は貴重だ。

よく分からん相手は叩きのめしてから考える、が標準である。狂つとる。

それに比べて、この娘は……いやー、若い若い。実に和む。

「そうだ！ 諏訪子様ご自身に確認してもらったら……！ あ、だ
どそれだと諏訪子様を危険に晒すことに……！ えーと、えーつと
……」

「ゴ！ ク！ トー！」

悩める若人を鑑賞していたところに、崇り神襲来。まさしく襲い来
る様な勢いで、弾丸の如く突撃してきた。

危機察知に従い受け止め、ぐるりと一回転して、柔術擬きの応用で
力を流す。

「……ご健勝で何よりだ、洩矢神様」

「コクトー！ コクトー！ ひっさしつぶりー！」

下手すると肋骨がやられていたぞ今の突進。と、突っ込みたいのは
山々だが、満面の笑みに毒気を抜かれた。

どう見ても唯の幼女である。しっかりしろ土着神の頂点。

いや、『唯の幼女』は、亜音速で突撃したりしないか。もう少し加減
しろ崇り神め。

些かの非難を視線に混ぜるも、それにすら嬉しげな笑顔を浮かべる
洩矢神様。相変わらずな御仁である。

「はーこの酒精と厄が絶妙にブレンドされた匂い……くんかくんか
すーはー」

「嗅ぐな」

僅かに妖力を込めた拳骨一撃。

何をしとるか。

本当、まるで変わらん、この色魔。

「あうう……再会を喜ぶくらい良いじゃない……」

「言いつつ尻を撫でるな」

拳骨2発目。先程よりも妖力を増やした結果、なかなか良い音が
鳴った。

「ああーうううううー……っ！！」

「だ、大丈夫ですか諏訪子様!？」

慌てて緑巫女が駆け寄って来るが、それでも私にしがみつくと洩矢神

様。

まったく……その気概を他に活かせば良いものを……。

「それで？ 少しは回復したか、祟り神様？」

「んー……ちよつとは、かな。昔に比べると、受け取れる畏れも減っちゃってねー」

「歳か？」

「あんたがそれ言う？」

「それもそうか。」

そもそも、全盛期の洩矢神様が抱え込んでいた厄の方が、明らかに常軌を逸していたのだ。

今の、私が纏う厄と妖気を祟り神としての呪いに変換して吸収する、という芸当も、充分に異常なものなのだろうけれども。

「あのう……それで……諏訪子様のお知り合い、で間違いないのでしょうか？」

放置されていた緑巫女がおずおずと聞いてくる。

なんか小動物っぽいな。追い込まれたり思い込むと暴走しそうなところを含めて。

「うん、私の嫁」

「誰が嫁か」

本日3度目の快音が、秋の空に響いた。

「……まだ頭ヒリヒリする……」

「自業自得だ」

守矢神社の本殿にて、祟り神と妖怪兎が酒盛り。

こう表現すると、何か陰謀でも企んでいそうな雰囲気だが、本当に酒を飲んでいるだけだ。

洩矢神様は、余計な荒事を計画しているかもしれないが、まあ、山が崩れん程度に楽しくやってくれ。私を巻き込まずに。

……どつかから、お前が言うな、という念を感じた。多分、紫か誰かだろう。

「それで、洩ー」

「諏訪子って呼んで」

「いやしかしだな……」

「す・わ・こ」

「……………諏訪子様」

「様は禁止。殿もさんもね。ちゃんは許す」

許すじゃないわ。歳を考えろ歳を。

「話を進めよう、諏訪子。……これで良いか？」

うむ、と偉そうに頷く洩矢神様、もとい諏訪子。ふんぞり返っても張る胸が無いぞ。私もだが。

「幻想郷への引越は……えーと、何て名前だったかな？ あのオ
ンバシラ」

「神奈子のこと？」

多分それだ。

諏訪子との戦争で私の蒸留設備を吹き飛ばしたのと、初対面でやたら突っ掛かってきた印象しか無いおかげで、顔や名前をすっかり忘れていた。

「その神奈子とやらが主導してこちらに移ってきた、という認識で、間違いないか？」

「……その通り、っていうか、私は正直、何もしていない内に飛ばされてきた感じだけどね」

それはまた災難な。

「コクトと再会できたし、その件はもういいんだけど、それがどうかした？」

「いや。てつきり諏訪子は、信仰が薄れ行くならそれも時代、などと受け入れるかと思っていたからな。

自ら幻想郷に来ようとしたなら、認識を改めようかと考えていた」
「それはあんたもでしょ。そもそもあんた、こんな箱庭、必要ないよね」

確かに。

未だ人間が運に左右され、不運を畏れる以上、たとえ外の世界でも私は『妖怪』、『不明なナニカ』として存在できる。

万物は粒子の塊で、万象は科学的に説明できる、と謳う科学主義が相手でも、正面から喧嘩できる訳だ。しないけど。

崇り神もまた、同様。

私達は、誰かが不運を嘆く限り、不幸を神やら天命やらのせいにする限り、消えることは無い。

「ともかく、こうして会えたのだから、良しとするか」

「だね。一段とお酒も美味しくなっているし」

ああそうだ。それが結局、私にとって最重要だ。

美味しい酒を造り、友や家族と語り呑む。それさえ叶えば、私は私で居続けられる。

暫くの間、呑んで食って呑んで風呂入って呑んで寝て夜這いに来た色魔を吹っ飛ばして二度寝して起きて呑む生活を送った。

持参した酒が尽きてからは、神社の倉にあった酒で呑み直し。

人間が造った酒も、千年前より遥かに向上している。なかなかイケるな。今度、紫に外から買ってきてもらおう。

と、酒三昧に墮落しつつ酒代に酒を求め、酒中毒な思考を弄んでいたところ、危機察知に反応有り。

まだ遠いが、山の上に神社が出現する、というこの『異変』が、『解決』される時が来たらしい。いつも通りの流れか。

不安要素としては、雛や秋の姉妹神、ついでに山の妖怪達の無事くらいだろうか。

あと、私も博麗の巫女とは遭遇したくない。前回、不意討ちしたことを根に持たれていたら面倒臭い。逃げよう。

「どーしたのー?」

「服を着ろ」

だらけきつた声と共に、背中へしがみついてくる色情幼女。寝る前は着ていたはずの服は、部屋の隅に脱ぎ散らかされている。

添い寝にいかかわしい意味は無いと力説していたのはどこのどいつだコラ。

この状況を東風谷に見られたら詰むぞ、私が。

「詰めばいいじゃない」

「黙れ服着ろ」

東風谷が朝食に呼びに来るまでに、どうにか服を着せることに成功した。

もし2、3分遅れていたら、無理矢理着せている最中、見方によっては脱がしている様に取りられるところだった。色々な意味で際どい。

余談だが、博麗の巫女を避けて帰る途中、危機察知に全く引つ掛からなかった白黒の魔法使い未満に絡まれた。

異変と無関係であることを主張しても、関係者である諏訪子が奥の本殿に居ることを教えても、頑なに勝負勝負と……若者の考えることは良く分らん。

当然、私が弾幕なんぞ撃つと、当たれば殺してしまうので、適当にやってお茶を濁す。

真面目に相手をするには、彼女は些か脆すぎる。

何か後ろの方から、怒号が聞こえてくる気がするが、放置である。さっさと帰って、雛達の無事を確かめなければならんからな。

トウホウ・ホウキボシ

「は？ 霊夢が負けた？」

「言つてなかった？」

「まったく聞いてないぜ!」

いつもの神社で茶飲み話。

話のネタに、拾った新聞にあつた、鬼とかいう奴と妖怪兔の戦いを
持ち出してみたところ、ああ私そいつに負けたのよね、という大爆弾。
聞けば、まさにこの記事の異変の際に、その妖怪兔から、今回は自
分に任せろ、と退けられたとか。

任せろと言われて大人しく引くだなんて、霊夢にはありえない。
当たり前のように勝負に。

それも、普通の弾幕ごっこではなく、限りなく実戦に近い形式で
戦つたらしい。

そして負けた。

あの霊夢が、博麗の巫女が、妖怪に負けたのだ。

「て言うか、その話、聞いて良かったのか？」

「天狗には記事を書かないように、紫から圧力なり何なりかけられた
んでしようね」

「でしようねって、お前な……」

他人事かよ、と言おうとして、言葉が引っ込んだ。

「次は勝つわよ」

ピリピリと肌を刺す、研ぎ澄まされた霊力。

やはりまだまだ、自分ではこいつに敵わない。そう、思った。

同時に、なら、こいつを倒した妖怪つて、どんな奴だったんだ、と
も。

因幡コクト、という妖怪兔に関して、魔理沙が知ることは少ない。
異変後の宴会には、酒を届けに姿を見せるものの、知り合いと軽く
会話してすぐに帰る。

その時の印象だけでも、ろくでもない妖気を纏った化物だとは感じていたが。

記事にあった『鬼』本人である、博麗神社に居着いた萃香に聞いても、勝負したら分かるんじゃない？ と笑うだけ。

同じ山に住んでいて取材魔の文なら何か知っているだろうが、生憎あのお方については口外厳禁なんですよ、と口を割らない。

紅魔館の連中とも付き合いがあるらしいが、どいつもこいつも口裏を合わせた様に、不思議な妖怪、面白くて楽しい、良く分からない人、と曖昧な証言ばかり。

咲夜とパチュリーに至っては、挑むのはやめておきなさい、と先んじて釘を刺してくる始末。

結局、分かったことはごく僅かだ。

てるが、あたしの妹だよ、可愛いでしょ、と言っていたが、名字と顔形はともかく、妖気が明らかに違い過ぎるだろ。

ないない。いくらなんでも、アレは無いつて。

ホラ吹くにしたりって、もうちよい現実味のある嘘にしろよな。

兎繋がりで何か分かるかと思っただが、当てが外れたぜ。

他に得られる情報と言え、人里では子供だって知っていることばかり。

自ら動くことは滅多に無いが、逆らう者には容赦しない、不運を操り人間に人間を殺させ弄ぶ、残虐な妖怪。

もしも遠目にも見かけてしまったら、すぐさま逃げて、厄神様にお供えをしないとイケない。

厄神様と対を成す荒魂。厄神様を祀ることで、その災厄から逃れることができる。

幻想郷のみならず、外の世界も含めて、あらゆる不運には、あの妖怪が関わっている。

いや、最後いくらなんでも盛りすぎだろ。この世全ての不運って何だそりゃ。スケールがデカすぎるぜ。

まあそれはとにかく、そんな、子供だって知っているのに、詳しい

ことは分からない存在。

それが、厄災の黒兎と呼ばれる妖怪だ。

「こうなったら、出たところ勝負だなー！」

相手は未知数で意味不明。霊夢に勝った以上、とんでもない実力者であることは間違いなし。

嘘か真か、幻想郷の成立に携わった賢者の一人、何て噂もあるくらいだ。

なら、まずは1度勝負してみて、どんなものか確かめる。

挑むのはやめておきなさい、という忠告は、魔理沙の頭からは、すっぱりと切り捨てられていた。

そして今、目の前には、件の妖怪、因幡コクトが居る。

その視線からは、こちらに対する僅かばかりの関心も感じられない。

完全無欠に興味無し。

お強い大妖怪様は、人間なんぞ眼中に無いつてか。吠え面かかせてやる。

「見つけたぜ！ 弾幕ごっこで私と勝負だ！」

気がはやっていたのも確かだろう。

今回の異変では、道中の強敵は、人里で信仰を集める厄神様も、最速の鴉天狗である文も、霊夢が倒した。

どちらも、自分では勝てるか怪しい程の強者。

そして、緑色の巫女との弾幕ごっこで疲労した魔理沙を置き去りに、霊夢は敵の親玉の所へ向かってしまった。

それはまるで、自分は霊夢のおまけの様な、単なる露払いの様な。

そんな、対等で居られない、友人であれない関係なんて、魔理沙には我慢ならない。

だから倒す。

こいつを倒す。

霊夢にも勝ったくらいに強いこいつを、私が倒す。

「そういきり立たずとも、私は今回の異変とは無関係なのだがな……」

「その辺は勝った後に考えるぜー!」

「ああ、うん。そうだよな。いかにも幻想郷の住民らしい理屈だよ」

短く溜め息を吐いて、やっと視線を向けてくる。

だがそれでも、やはりこいつは私に、まるで意識を向けていないままで。

そこいらの雑草でも見る様な目だ。

上等。雑草根性見せてやる。

「この先の本殿に、今回異変を起こした神とは別の、もう一柱の神が居る。」

私としては、ここは力を温存しておき、そちらに注力すべきと提言するが?」

「知ったこっちゃやないぜ! 今この瞬間に全力だ!」

「だろ? ……はあ……仕方が無い……早く帰りたいのだがな……」

気だるげに無気力に、いかにも面倒臭そうに、そいつが告げる。

「スペルカード1枚、耐えきったら貴女の勝ちだ」

「はん! 耐えきる前に撃ち落としてやる!」

飛ばして行くぜ! 様子見なんてする暇も無しだ!

「弾幕はパワーだぜツツ!!」

ありったけの弾を撃ち込む。

これだけで倒しきれぬ相手では無いだろうが、何かしらの対応は――

相も変わらず億劫そうに、しかし滑らかに、因幡コクトが片手をかざす。

宣言、と呼べる程の覇気など込めず、どこまでも静かに冷ややかに、スペルカード名を告げる。

鏡符『ミラームーンボール』

前方にかざされた右手を起点に、大量の鏡、いや、結界か、とにかくそれらが、一瞬で展開された。

上も下も右も左も前も後ろも、私の周囲を覆い尽くし、鏡面の球体に取り込まれた。

「私が自分の弾幕を放つのは、最低限、死にはしない相手だけだ。ごっこ遊びで殺す趣味は無い」

その向こう側から、出会った瞬間から温度が変わらない、冷めた声が響いてくる。

「設定しておいた時間は1分間。耐えれば勝ちで、当たれば負けだ。

跳ね回る自身の弾幕を避けきって見せろ」

それはまさに、歯牙にもかけない態度。

ではご機嫌よう、と言ったそいつは、1分後、何発撃つてもビクともせず、反射する弾幕を増やすだけだった鏡が一斉に砕けた時には、影も形も無く。

こちらの意気込みなど、まるで意に介さず。

嘲笑いすらせず無関心に。

どうでも良さそうに、通り過ぎて行った。

自分の喉から溢れ出た咆哮が、どんな感情によるものなのか、魔理沙自身にも分からなかった。

分からない。分からない。分からない。

力が及ばないことは何度もあった。

力が足りないことは何度もあった。

その度に、踏ん張って、立ち上がってきた。

立ち塞がる壁を乗り越えて、或いはぶち壊して、ここまで来た。

自分がまだまだ未熟なことは、理解している。

だけど、もつと新しい魔法を覚えて、今ある手札をもつと鍛えて、

もつともつと強くなれると信じている。

スペルカードルールなら、弾幕ごっこなら、人間だって、普通の魔法使いだって、妖怪と競い合える。

霊夢や咲夜のような、『特別』と並び立てるはずだ。

そう思つて、今日まで進んで来た。

なのに、なににアレは何だ。

この有り様は何なんだ。

人間だからか。

だから相手にもしないのか。

赤ん坊の癩癩の様に、宥めて終いにされるのか。

何をすれば良い。

どうしたら良い。

どうすれば、私の方を見させられる。

見向きさせられる。

畜生。

畜生。

畜生。

お前のスペルカードを攻略してやったぞ。私の勝ちだ。

そう言ったところで、ああそうかおめでとう、で終わりにする気だろう。

誰だったかな、なんて言いやがるかもしれない。

そのくらい、あいつは私に興味が無かった。

あいつの視界に、私は映つてもいなかった。

畜生。

畜生。

声が掠れて尚も叫ぼうとする口を閉ざし、漏れ出る息を噛み殺す。

「必ずだ……必ずお前に、私の名前を覚えさせてやるぜ……因幡コク

ト……！」

それでも、碎けない、諦めきれない、俯けない。

へし折れたプライドを叩き起こし、絶対に、と誓いを立てる。

道筋なんて、ほんの僅かにも見えないし、目標は遙か彼方だけれど。そうだとしても、やると決めた。

通り過ぎる人間の内の一人ではなく、『私』を刻み付けてやると、決意した。

まあ良いか。雛が可愛いし。

異変後の宴会。

酒を届けに行ったことはあれども、考えてみると、参加者として赴くのは初めてだ。

そう、白黒のに絡まれた為か、何やら私にも異変関係者への招待が来た。

いやまあ、雛や秋の姉妹神も招かれているので、帰りを家で待つ羽目になるよりは良かったのだが……。

しかし、私みたいな、見るからに明らかについでに実際に厄種が参加して、空気が悪くならないかがだな。

「では、行きましようか、母様」

「そうだな、行こう」

あ。悩む前に、反射的に即答してしまった。

悩んだところで、私が雛の誘いを断れるはずがないので、結果は変わらないか。為る様に成れ。

そして現場に到着。とりあえず手土産を兼ねた酒を届けて、後は隅の方でまったり呑むことにー

「よく来たわね。一応、客として迎えるわよ。歓迎するかは別にして」
なんでこっちに来た博麗の巫女。

「他の参加者の相手で忙しいだろうに、わざわざ済まないな」

だから早く、他の連中のところに戻ってくれ。

うわ。諏訪子やら射命丸やら、聞き耳立てていやがる。何も面白いネタなんぞ話せんわ。散れ散れ。

「あんだとこうやって話すことって、今までなかったと思ってる」
て、腰据えおったこいつ。

「確かに、まともな会話したのは手合わせの時くらいだったか。しかし、特に話すこともないだろう?」

「かもしれないわね。あんた、よく分かんないもの」「良く言われる」

それもどうなの、と、微かに笑う博麗の巫女。

「霊夢でいいわ」

「……なら、私もコクトで良い」

思考を読まれた気がする。単なる偶然であれば良いのだが……。

とりあえず、杯が互いに乾いたままなのも何なので、持参した酒を注ぐ。

意外なことに、博麗、いや、霊夢も私に注いでくれた。

うむ。何だこの状況は。誰か解説をしてくれ頼む。

はつきり言って、人間と酒を酌み交わしながら会話するなんて生まれて初めてで、まるで勝手が分からない。

十六夜はスカーレット嬢の従者としての関わりだし、それ以外の相手も半分神だとかそんな経験しかない。

そういえばスカーレット嬢もといレミリアも「名前前で呼んでちょうだい」と言っていたな。ってああ考えが他所に飛んだ。

何だ。人間相手って、何を話せば良いんだ。妖怪や神と同じ感じじゃ駄目だよな?

元人間の感覚など、時の彼方に摩りきれて消滅しとるわ。

前世もそんな喋る方じゃ無かっただろうしな。覚えてないが。

むしろ人間の頃の感性が残っていたら、とつくに精神が壊れて……ん? 既に壊れているのか? 自覚は……結構、心当たりがあるな……。

いや、今はそんなことどうでも良い。とりあえずこの場をどう対応するのがだな……。

「思ったより、表情に出るわね」

「……そうか?」

「ええ。随分と困った顔してたわ、コクト」

うぬう……何か敗北感。

「ま、あんたが好き好んで人間を傷付ける奴じゃないってのは分かってたし、確認もできた。

もちろん、騒ぎを起こしたり関与したらシメるけど」

「巻き込まれん様に善処する」

「ほんと、逃げ腰ね」

「そういうのは、戦闘好きな連中だけでやってくれ。霊夢と戦うのは勘弁だしな」

「あら？ 一度勝ったくせして？」

「次やったら、一切容赦せんだろう？」

「当然」

「だから勘弁なんだ」

奥の手は奥の方に隠しておいてくれ。少なくとも私に対しては。

負けると分かっても挑む程、私は酔狂ではない。酔って狂うことも無い。

「ほんつと、変な妖怪だわ」

それも良く言われる。

……割りと会話できているな。相手が誰に対しても自然体な霊夢だからだろうが。

「しかし、想像していたより好意的に迎えられたな。驚いたよ」

「だってあんた、お賽銭入れてたでしょ？」

「一応今回は、酒屋としてでなく、参加者として呼ばれているからな。多少なり気は遣う」

「ちよつと爪の垢ちようだい。あいつらに飲ませてくるから」

何を言つとるんだおい。

「なにになに？ コクトの爪垢を煎じて飲む会？」

「む。出たわね商売敵」

「諏訪子まで何を訳の分からんことを……」

頭に乗っかるな。重いわ。

霊夢の言う商売敵とは、神社の経営的な意味だろうか。

そうになると、雛や秋の姉妹神も商売敵か？ 人里に祠があるらしいし。それも複数。

「……別に、あなたの娘達を目の敵になんかしないわよ」

「考えていることが、そんなに分かりやすいか、私」

つい先程も、内心の困惑を読まれたな……自他共に認める無表情だと思っていたのだが。

「勘よ」

勘かよ。

「慣れてくると、意外に表情豊かだよ？」

「貴女の場合、付き合いの長さが桁違いだからだろう。」

それより、そろそろ頭から下りてくれないか」

重い。

退け。

「なにさー若い子にデレデレしてー私と過ごした夜は遊びだったって言うのー」

「棒読みで何を言っているんだ」

「あんたたちそういう関係だったの」

「悪乗りするな霊夢」

何だこの意味不明な状況。いや霊夢が私の所にわざわざ来たのも良く分からなかったが、余計に訳が分からんことになっている。何だこれ。

「……確かに、割りと表情豊かね」

「でしよ？」

私をだしにして意気投合するんじゃない。

「あやややや。この度はお疲れ様でした」

霊夢と諏訪子が他の参加者のところへ移ると、入れ替わりに、次の客がやってきた。

「そちらも、山に立ち入った霊夢とやり合ったそうだな」

私の言葉に対し、それが役目ですから、と慇懃に応じる射命丸。と、会話していて思い出した。

「諏訪子……新たに山の住民となった、守矢神社に関して、天狗はどんな立ち位置を選ぶ予定だ？」

私の発言を受けて、射命丸が僅かに身動きする。

おそらく、あちらも、会話の流れでその話題に持っていくつもりだったのだろう。

意図せずして機先を制した形になったか。別に心理戦などしたくはないが。

「古い知己とは伺っていましたが、親しいのですね」

「親しいと言えるのは諏訪子だけだが、二、三千年くらい前まで、居候させてもらっていた。二万年程」

「……時間感覚がおかしくなりそうです」

「至極真つ当な意見だな」

あの頃は、何千年があつという間だったからな。

雛と出会ってから、そして、ここ数年の異変続きで、やけに時間が長く感じる様になった。

密度の違い、という奴だろうか。日々が目まぐるしく充実しているとも言える。

「私と新参者の関係を探って来る様に、上から指示された、か？」

相変わらず天狗は忙しないな」

「情報と組織力こそが、私達の強みですから」

だからこそ、山の統治者である、と。

誰が統治しても、害が無ければ構わんのだが。正直、どうでも良い。

「心配しなくて良い。

仮に、諏訪子達が天狗に敵対するとして、私は肩入れせんよ。どちらにもな」

なので、どちらが勝とうが、騒動に加担する気は無い。

山の覇権争いが異変扱いされ、巻き添えで霊夢にしばかれるのは御免だ。

「……まあ、天狗に協力を、なんて頼めはしないですけどね。

我々としては、あちらが現状を崩す気が無いのなら良し。それ以外は交渉、といったところですよ」

「ああ。お前達の好きにしろ。私は私の好きにする」

「かしこまりました」

納得したのかは分からないが、深々と頭を下げる射命丸。

「それはそれとしてですね。」

名前を呼び合う新参の神とのご関係を、もう少し詳しく教えていた
だければ……」

「記事にでもするのか？」

「いえいえ。天狗以外には広まらない様にいたします。ですので……
ぜ、是非とも取材をさせていただきたく！」

こいつの性格上、軽く凄んで断れば大人しく退くのだろうか……。

「隠す程のことでも無いか。何から聞きたい？」

「では！ 馴れ初めからお願います！」

「馴れ初めねえ……当時まだ能力を制御できず、周囲に厄を撒いてい
た私が、諏訪子の治める国に踏み込んだことが、切っ掛けだったな」

ほうほう、と相槌を打ちつつ素早くメモを取る。

毎度のことながら、表情は作り笑顔だが、真剣な眼だ。酒も美味そ
うに呑むし、見ていて飽きんな。

この様子と昔話を肴に呑むのも、悪くない。

ところで、射命丸が少しばかり汗をかいている様に見えるが、どう
かしたのだろうか。今夜は涼しい秋の夜なのだがな。

飲み過ぎたのか？

「……コクト様が『逃げる余裕が無い』ってどんなのよ……いやでも、
勝てないとは言っていないし、今は全盛期より弱体化してるし……。

ああでも、それに勝って国を奪った神と組んでいることを考えると

……末裔とかいう現人神の巫女も要注意ね……。

胃の痛い思いして聞き出した情報でもっと胃が痛く……もおや
だあ……普通に取材だけしたい……」

取材を終えて、何やらブツブツと呟きながら、射命丸は飛んでいっ
た。

宴会は早退するらしい。忙しいな、あいつ。

その後も、次から次へと、絶え間無く客が続く。

私が持参した酒目当てだろう。いつも宴会に供しているより良い物だからな。

だがしかし、分身を使つてまで、二杯目以降を呑みに来た伊吹。お前は自重しろ。

……当初予定していた、まったり呑む時間は、欠片も無し。疲れた。

トウホウ・タタリガミ

天狗の長の屋敷にて、会談場所である部屋に通され待たされる。もてなしは茶が湯飲みに1杯。それだけ。

全く以て、不敬千万つて奴である。茶菓子を要求する。あとお茶のお代わり。

「……気に入らないわね」

「そんなピリピリするなつて」

ピリピリというかビリビリというか。

とりあえず殺気を仕舞いなよ、神奈子。

「ここは敵地。警戒してし過ぎることはないでしょう」

「敵意を露にして、あつちの警戒を強める必要もないでしょ。ていうか、無駄な誤魔化ししなくて良いよ。」

この扱ひより何より、比べられてるのが気に食わないんだろ?」

私の指摘に一層眉間の皺を深くする。

凶星か。

昔っから、あいつ絡みとなると、いつも以上に分かりやすいこと。

「厄災の黒兎に比べれば脅威度は落ちる。」

そんな軽視が、透けて見えるわ、天狗の連中」

他者と比較されて侮られる、しかも相手はあのコクト。

要するに神奈子は、特に後者に対して苛立っているのだ。

可愛い顔しちやってまったく、組伏せて啼かせてやろうか。

「諏訪子。今、余計なこと考えてなかつた?」

「そんなことないよー」

「……帰ったら殴るから」

やっぱ可愛くないわこいつ。

「お待たせいたしました。」

天魔様と因幡コクト様がお越しです」

それからまた、暫くして、先触れの鴉天狗が襖を開けた後ろから、天狗の長とやらが入ってくる。

第一印象は、浮遊する巨岩。

なるほど、強い。自負に相応、といったところか。

んで、その更に後ろに、心底面倒臭そうなコクトの姿。

絵面だけなら、巨体の天狗と並ぶせいで、いつもより小さく見える。ただし、それは妖気を別にした話。

祟り神である私をしても、背筋がゾクゾクするくらいに不吉。

これがいざ喧嘩の時になったら、妖力と混ざり合い更に色濃く薫るというのだから……ああ、堪らない。

戦っている姿は見たことがないけれど、初対面で内心を透かし見た私にぶつけられた苛立ちには、思い返してもーあ、ちよつとやばい。自重自重。今日はお仕事。

「とりあえず、挨拶だの何だのの前に乾杯だな」

そして空気読まないねコクト。

どこからどう話を切り出すか図っていた神奈子が、ぼかんとしてるよ。

ああ、天魔は慣れてるみたいだね。またか、やはり、つて顔だ。

しかし、ここで動けないのはマズイ。

今回の天狗と私達の会談にコクトまで呼ばれた理由は、私達とコクトの関係性の見極めだ。

場合によつては、天狗にとって、そちらが主目的の可能性もある。要するに、私達も空気読まず、ある意味読んで、仲良しアピールする場なのだ。神奈子には無理かも知れないけど。

「それじゃ、お言葉に甘えて」

なんて思考を刹那の間に転がしつつ、コクトが並べた枡を1つ取って、酒を注いでもらう。

注ぎ返そうとしたが、先に天魔の出した枡へ注がれてしまった。

コクトに枡を向けるその所作も、威厳を保ちつつ敬意を表す絶妙なもの。お見事。

そしてようやく状況が読めたのか、我に返って枡を突き出した神奈子にも酒が注がれる。

……マズイなあ……こんな早い段階で、私はコクトと親しくても、

神奈子は関係が薄いことを確信された。

間抜け、と隣に視線を向けると、先に言つてよ、と恨みがましい気配。そのくらい予測しておけ戦馬鹿。

まあ、あたふたする神奈子が見られたから、とんとんかな。別に私、山の覇権が欲しい訳じゃ無いし。

どうせ神奈子には、コクトと親しい演技なんかできないから、露見するのが早いか遅いかだよ。

「ではコクト様、失礼いたしますね」

「ああ、ありがとう」

神奈子に注ぎ終えたところで、横に控えていた鴉天狗がコクトから酒瓶を受け取る。

しかし、ここで私の予想が少しズレた。

「……注ぎ過ぎじゃないか？」

「ご安心ください。風を操り溢れないようにしています」

「能力の無駄遣いだな……」

やりやがった、この天狗共め。

コクトの性格からして、相手によって量に差は付けない。誰だろうとなみなみ注ぐ。

それ以上は無いと、気を緩めていた。

あつさり「風を操り」と言ったが、どんだけ繊細な使い方だよ。大気圧を支配できると想定しておくべきか。規模の上限は不明。

能力を使わせてまで、そんな器用な手札（ヤツ）をこんな初手で晒してまで、『天狗が誰を最上位に置いているか』を示しやがるとは、やってくれる。

そんな思惑をコクトが察するとは思えないし、あちらも考えていないだろう。示す相手は、私達。

これに対する動きによって、こちらの手の内も晒さざるを得ない。しかも既に後手だ。

『こちらが最大級の敬意を向ける御方に、そちらはどんな立場なのだ』と問われた訳である。

先手は譲ったが……このくらいならまだ……まだ主導権を取られた訳じゃない。

「ほら、射命丸、お前も呑め」

「うえええっ?! え!? えっど……。」

……はい、いただきます……」

って思った矢先にコクトあんたあああああっつ?!?!?!

こんな場面で! 世話役に対して! 酒を勧める奴があるかあっ

!?!

変わってないね! まっつったく変わってないねっ!!

しかも他の面子と同じ量かい! やっぱりね! だと思っただよ!

これでこの場に、「コクトから形式上同列に扱われている者」の数

が、三から四に増えたわ!

私達と天狗で二対一だったのが二対二になったわ!

てゆうか天魔! あんたここまで読んで、その射命丸とかいうの連

れて来たな!?

コクトに勧められた時に、ビビって顔色うかがってきたのに対し

て、即座に頷いたし!

宴会で親しげにしていた時点で、注意するべきだった! 予測でき

ても回避できない状況だけど!

このあんぽん兎が、親しみを感じた相手にベタ甘なことくらい、

とっくの昔に知っていたのに!

あーうー……こっから先の展開……どう持っていこう……。

とりあえず現状確認。

天狗は、コクトを自分達より上位に置き、それをわざわざ私達に示してきた。

コクトは、天狗という種族に対してか、あの鴉天狗個人に対してかはともかく、少なくとも友誼以上の感情を持っている。

まあ、つまり、権力争いには不干涉としても、私達が天狗を『潰そう』としたら、コクトが敵に回る訳だ。

同じことが、天狗から見た私とコクトの関係にも言えるだろうか。過剰な危害をくわえられないのはお互い様か。

敵勢力を相手取りながらコクトと敵対するなんて、馬鹿馬鹿しいにも程がある。やってらんない。

個の妖怪でありながら抑止力になるって、あんた本当に相変わらずだね。何も考えてないんだろうけど。なんにも考えてないんだろうけど！

よし、方針変更。

今回の会談で、天狗の譲歩を引き出すのは、見送ろう。代わりの手なんか、いくらでもあるんだから。

それはそれとしておいて、すぐ横で事態の推移が読めなくなった挙げ句、酒に夢中な神奈子は、後でシメる。

あんたうちの主神でしようが表向き！

「んでさー、コクトの娘の雛ちゃんって子、人里で信仰集めてて、秋の姉妹神と併せて祀られてるんでしょ？」

「私も噛ませてほしーなー、なんて」

「その辺りのことは、紫が主に動いていたな。私は良く分からんぞ」「いやいやー。コクトからの口利きがあるとないとじゃ大違いだった！」

八雲紫にちよつと一言！ ね？」

視線と仕草で天狗を牽制しながら、コクトと交渉、というかおねだり。

鍵山雛や秋姉妹に関することは、天狗は関与したからない。これまでの観察でそこは読めた。

なら、今のうちに突いておくべき箇所はここだ。

天狗の目の前で、守矢神社と鍵山雛達の間伝手を構築する。

口は挟ませないし、挟めないだろう。後になって、知らなかった、とは言わせない。

連中は、コクトの地雷が何かを測りあぐねている様子。愛娘のことに口出しして、爆発に巻き込まれては堪らない、と考えているはずだ。舐めるなよ。こっちは、コクトが『厄に影響されない娘』に対して、どこまでの感情を傾けているか、ほぼ誤差無く推量できるんだ。

「私らが信者を増やしたら、雛ちゃん達の知名度も上がるし、良い関係が築けると思うんだよね」

「……詳しい話は、雛達を交えて、だ。」

私が勝手に決めることではないだろう」

「それなら、早苗も連れていって良いかな？」

あの子、外の世界じゃ心を許せる友達なんていなかったから、雛ちゃん達と仲良くなれたら嬉しいな」

「ああ……それは良いな。私からもよろしく頼む」

思った通り！ 利害云々ごちやごちやした話よりも、あんたが食い付くのは、『娘に友達が増える』こと！

あつはつはつはつはつは！ ざまあみろ天狗！ 悔しい？ 悔しい？

ねえ今どんな気持ち？ 自分達に不都合な話が進むのを指くわえて眺めて、ねえ今どんな気持ち？

「……細かいことは良く分かんが、あの子らの付き合いに関して、邪な企みは持ち込むなよ」

「はいはい分かってるよ。そんなことはしないって。あんたを怒らせたくないしね」

なら良い、と首肯するコクト。

話に割って入れない天狗。あと神奈子。

ま、神奈子には、帰り道にでも解説してやろう。

先手を打ったつもりが、私の返しに、内心で齒軋りしているだろう天狗は、良い気味だ。

妖怪の山における布教の自由化や、参道の件は後回しになったけど、総合的に見れば悪くない。

人里における習合は、コクトの娘が神で、その友達の姉妹神と一緒に信仰を集めていると知った時点で、大まかに考えてはいたけれど、天狗に対する揺さぶりも兼ねられた。

コクトと娘、その関係者を、丸ごとうちの友好勢力にできれば、この山での権益なんていくらでも引き出せる。

問題になるのは、次の八雲紫との交渉だろう。

幻想郷の管理者という立場上、無駄な争いは起こさないはずだけど、余計な言質取られない様にしないとね……。

その準備もしないといけないが、とにかく今は。

いやー。久し振りに楽しい戦だった！ 快勝とは行かなくても、一杯食わせてやった！

「因幡コクトについて天狗は、特に武力や能力の面で重きを置いている。

対して私達は、娘達を介した人里への影響力という、未着手の資源をうちの領土に繋げた。

っていうところ、かしら？」

「喩えが戦争臭いのがあんたらしいけど、うん、概ねそんな感じ」

むう、と唸り声を漏らす神奈子。

まどろっこしいとか考えているのだろう。

「殴って奪うのは無理だからね」

「分かっているわよ」

昔のことを持ち出して茶化したら、ちよつと悔しげな表情。……イイな今の顔。

「天狗の長や、同席した鴉天狗も、かなり手強そうだったけど……因幡コクトは、あれほどの穢れを、自分の妖気として完璧に制御していた。

そして……それだけでも充分な脅威だというのに、昔、初めて会った時にも感じた、奥にまだナニカ居る感覚……」

へえ、と、感嘆が零れた。

戦争馬鹿と思っていたけれど、意外と……ああ、戦争馬鹿だから戦力には敏感なのか。

「ま、良い勘してるよ。」

あいつの本領は、制御じゃなくて無差別だからね。もしも、下手に追い詰めたら、取り返しがつかなくなる」

せっかくだし、気分も良いので、もう少し掘り下げてやろう。

「厄を弾く、穢れを周囲に押し付ける、災厄を撒き散らす。それこそがあいつの本領。」

死なない為に死に繋がる全てを滅ぼし尽くす延命が、あいつの本質だよ」

危機察知とかは、あくまでもその本性を晒さない為の予防線。

死を拒絶した末路の更に行き着く先を突き抜けてしまったモノが、あいつ、厄災の黒兎と呼ばれる怪物だ。

「……どうして諏訪子は、そこまで分かって、彼女に拘るの」

呆れに満ちた眼差しと声に、笑って応えてやる。

「そんなあいつの蕩けた様子なんて、想像するだけでたぎるじゃない」

結果は、余計に呆れられるだけだった。

トウホウ・アキノカミ 姉

「あー！ 静葉さーん！」

もうすぐ秋が終わる頃。

山の獣道を、ほとんど散らせ終えた紅葉を眺めつつ歩いていると、空からの呼び声。

「お出かけですか！」

目の前に急降下し、元気いっぱいな笑顔を見せる、最近知り合った巫女。

「ええ……早苗も外出？」

「はい！ 人里まで布教に。静葉さんは？」

「私も人里に。雛から、流し雛の無人販売所の売り上げ回収を頼まれたの」

「ご一緒しても良いですか？」

「散歩も兼ねて、歩いて行くわよ？」

「なら私も散歩します！」

元気な子……ちよつとだけ疲れるけれど……嫌いではないかしら……。

「無人販売所についてなんですけど、どういうシステム……仕組みなんですか？」

道中も、話題があつちこつちに飛びながら、色々と話しかけてくる。

「それは普通に……外の世界には、無いのかしら？」

「自動販売機ならありますし、畑の近くに野菜とかの無人販売所がある、みたいなことは聞いたことありますけど……」

私には『自動販売機』の方が分からないわね。自分で動くの？

聞いたらそつちに話が逸れそうだから、聞かないけれど。

「防犯とか、商品やお金を盗まれないように、幻想郷ならではの術か何かあるのかな、って」

「無いわね」

「無いんですか!?!」

反応が激しい……穰子も、似たところがあるから、二人揃うと余計

に賑やかなのよね……。

今日は朝早くから、「畑見てくる！」と信者のところに行つて、ここにはいないけれど。

「厄神様から盗みを働く、罰当たりな泥棒はいないわよ」

「はー……篤い信仰の賜物ですか……」

それもあるかも知れないけど、発覚した時の『罰』が怖い、というのが大きいでしょうね。

厄神様の怒りは黒兔様の怒りである、とは、人里の……幻想郷の常識だから。八雲紫も情報操作をしたとか何とか。

コクトさんに自覚が薄いし、気軽にご近所付き合っている私達が見えることでもないかもしれないけれど、あの大妖怪さんは、かなり影響力が強い。

具体的には、人里近くの上空を通過しただけで、人々が建物に飛び込み、通り過ぎるのを待つくらい。天狗の集落に行った時も、似たような感じらしい。人里に立ち入ったらどうなるのかしら。

……改めて、どうして私達の面倒を見てくれているのか、不思議ね。

私達姉妹がこの幻想郷で自我を持った時から、ずっとお世話になっているおかげで、それが当たり前前に感じていたけれど。

幻想郷一危険、なんて言われている妖怪なのよね……酒好き娘大好き母にしか見えないわ。あと、竹林に住んでいるお姉さんも大好きね。

「静葉さーん？ 聞いてますー？」

「ごめんなさい、聞いてなかったわ。何かしら？」

「はい。静葉さんから見たコクトさんって、どんな人なのかな、って」
あー、こういうのを、外の世界ではタイムリーって言うんだっかしら。

「そうね……一言で纏めると……」

本当に色々ややこしいけれど。

「気の良いご近所さん、かしらね」

私からしたら、そんなものである。

その後も、弾幕ごっこについてとか、普段何をしているかとか、初めて飲んだお酒が美味しかったとか、そんな話をした。

……繰り返しになるけど、話題の切り替えが激しい……。

さつきから、ぽんぽん話に移り変わって、目まぐるしいわ……。

「女子高生ですから！」

「じょしこうせいって何……?」

「女子高生というのは……あれ? だけど、今の私は高校に通っていない……なら、私は……? つまり、女子高生とは……?」

何を言っているのかしら、この子。

「私には、何を悩んでいるのか良く分からないけれど……早苗は早苗でしょう?」

「静葉さん。結婚してください」

本当に、何を言っているのかしら、この子は。

「私、というか私達姉妹、冬から夏は活動していないわよ?」

特に冬は、口を開くのも億劫なくらいに、何もする気が起きない。

今も口数が多い方ではないけど。

「なら、その期間は私が遊びに行きます!」

活動してないんだってば。寝かせてよ。

「眠っている静葉さんを、隅々までお世話します!」

「やめて」

何か怖いから。嫌な予感がするから。

そうこう話しているうちに、人里に到着。

……疲れたわ……もう帰ろうかしら。

「おお! 静葉様だ!」

「ありがたやありがたや」

「しずはさまー!」

「えっと……うん……ありがとう……」

いつものことだけど、出迎えが凄い……急速に集まる信仰で、ちよつと酔いそう……うう……。

「大人気ですねー」

「……黒兎様と厄神様の関係者だから、つてというのが大半……ほとんどでしょう……」

正直、分不相応というか、過剰というか……はあ……。

「信仰は信仰です！ 貰えるものは貰っちゃいましょう！」

……………そういうもの、なのかしら？

「静葉様の隣に居るのは誰だ？」

「分からん。巫女がお仕えするようになったとは聞いていないが……」

「どうも皆様！ 山の上の守矢神社の巫女、東風谷早苗と申します！」

守矢神社！ 守矢神社を、どうかよろしくお願いします！

黒兎様の友である神々を奉り、厄神様や秋の姉妹神様ともお友達
の、東風谷早苗でございます！

他の神々と併せて、よろしくお願い申し上げます！

守矢神社！ 守矢神社でございます！

……………なんだろう……私の知っている布教と違う……これじゃない……。

「何!? 守矢神社!？」

「知っているのか!？」

「うむ！ 聞いたことがある！」

……………盛り上がっているから良いのかしら………ついていけないわ……。

まあ、とりあえず、雖に頼まれた無人販売所の売り上げの回収に行かないと……。

「お団子美味しいですねー」

「そうね……」

回収が終わったらすぐに帰るはずだったのに、気が付けば早苗と茶屋にいた。

「静葉さんと一緒だから、いつそう美味しいです！」

「……………そういうことは、あまり軽々しく言わない方がいいわよ」

原因は……見ての通り、押しに負けたから。誘われて断りきれず……。

これが若さかしら……私も神の中では若輩者なのだけど……。

「軽くないです！ むしろ重いです！」

「それもどうなの……」

本当に、重ね重ね、何を言っているのかしら、この子。

「優等生演じたり深く踏み込ませない程度に人間関係調整したり……。

そんな面倒なことしないでいい友達なんて、静葉さん達が初めてですから！」

「……そう」

この子はこの子で、色々あったんでしようね。外の世界の事情には、特に興味ないけれど。

「……幻想郷には、『そんな面倒なこと』を考える人は誰もいないわよ。気にする必要はないわ」

「はい！」

だから別に私に拘ることないのよ、と言外に込める。が、間違いなく伝わっていない。

……どちらにせよ……早苗も、もつと他の、明るくて賑やかな……穰子みたいな知り合いが増えれば、そちらの付き合いを優先するようになるでしょう……。

「静葉さんって、優しく見守ってくれるお姉さん、って感じで、一緒にいると落ち着きますね！」

「……落ち着いているようには、見えないわね」

私の返事に、あははと笑う早苗。

どうしてかしら……今ちよつとだけ、早苗の顔が見られないとか、顔を見られたくないというか……。

「静葉さん？ 風邪ですか？ 顔赤いですよ？」

お願いだからこっちは見ないで。

もう少ししたら治まるから。

「……ふう……」

まあ、実際に妹がいるし、年長者ぶっているところはあるかもね
「そうですね！ とっても素敵です！」

……………この子、わざとやっているわけじゃないわよね？

結局、人里のお店を見て回るのも、帰り道も、早苗と一緒に。

「少し疲れたけれど……楽しかったわ……」

「私も楽しかったです！」

「そう……」

疲れたし、何だか早苗の笑顔を見ると変な気分になるけれど……楽
しかったのは、間違いない。

「……じゃあ私、雛の所に寄って帰るから」

「……………そうですね……私ももう、帰らないと……」

「そうね。遅くなったら、『ご両神』が心配するわ」

私の不慣れた冗談に、柔らかく微笑む早苗。

「では、また今度！」

「ええ。また、次の『秋』に……」

この感情の名前を、私は知らない。

きつと、知る必要も、無いのだろう。

もうすぐ、冬が来る。

秋が終わる。

次の『秋』が来る頃、彼女の隣には、誰がいるのだろう。

トウホウ・シゴクイロ

彼女を見つけて、関わり始めて、およそ百万年が過ぎたあの日。
今の時から、八十二万四千七百年と三月と十二日前。

きつとあの時、私は彼女に執着（コイ）をした。

「……冬にお前が出歩くとは、明日は真夏日だな」

「いきなりご挨拶ですこと」

「挨拶は大事だな」

「ですわねえ。朗らかなら尚良しですわ」

「……ふむ……これといって用は無い気紛れ、かな？」

「あら、ご明察」

「……………そう思わせて、裏があつたり無かつたりするから、お前は油断ならんがな」

「大なり小なり、誰しもそうではなくて？」

「お前の場合、謀（ハカリゴト）の規模が大きすぎる」

「あらあらまあまあ。本当にご挨拶ですわね」

顔を合わせて早々に、軽口の弾幕合戦。

それが終われば、彼女と隣り合い縁側に腰掛けた私へ、無言で杯が差し出される。

彼女の無表情と相俟って、無言無愛想無遠慮な所作は不機嫌そうに見えるが、そうではない。

と言うか、愛想を振り撒く彼女など、彼女の姉兔の変装に違いない。万が一そんなことがあれば、冬に真夏日どころか、妖怪の山が噴火するだろう。

長年の付き合いで、機嫌の良し悪しくらいは分かるから、今のままで特に問題無し。

まあ、その百数十万年の付き合いの中では、誰の目にも明らかなくらい表情を動かす彼女を見たことも、泣き顔を見たこともあるけれど。

私が狙って泣かせただけけれども。

「……………不愉快なことを考えられている気がする」

「気がするだけでお酒を取り上げようとするのはやめてくださるかしら？」

面倒臭がりな彼女が、自分で熱燗を用意することなんて滅多にない。

これを飲む為だけにわざわざ冬眠から起き上げふんげふん。

ともかく、この酒は譲れないのである。

「では、何を考えていたのかを言ってみろ」

『お願いだ……………しばらく、このままでいさせてくれ……………』と私の手にすがって泣く貴女は可愛かったなあ、と」

「記憶を失え」

眉間目掛け飛んできた厄と妖力の塊を隙間で回収。

冗談で受けてあげるには、些か威力が高すぎた。

「……………少しだけ、殺意なかった？」

「否定はせん」

「してよ」

——いやだ……………もういやなんだ……………——

嗚呼、それにしても。

——このまま……………ひとりでも生きるくらいなら——

本当に、心から。

——死んでしまいたいんだ——
あの時の彼女は、可愛かったなあ。

いつも通り、口元を隠し、表情を繕い、表に出さない様にした胸の内。

どろりと笑った。

あの時、死にたい、死にたくない、死ねない、死にたい、死にたくない、と、謔言の様に呟いていた彼女の姿を、繰り返し、繰り返し、思い返して味わう。

「……全力で撃つてみようか」

「ちよつと、やめてよ。大結界まで壊れるじゃない」

「お前が残らず受け止めれば良いだろう。体で」

「いくら何でも死ぬから」

きつと、彼女の口から『死にたい』なんて言葉が漏れるのは、あれが最初で最後だ。

だから私は、何度も何度も、あの日のことを振り返る。

「……久しいな、隙間の」

「ええ。お久し振りね、厄災の」

私と彼女、それともう一人、宵闇のと呼ばれる妖怪。

まだ人類が生まれてすらいない、神が地を統べていたあの時代において、この三人が、特に名の売れた妖怪だった。

特に畏れられていた、とも言う。

自分で言うのも何だけど、殆んどの騒動や水面下での策謀に関わり、それを適度に周知させていた私。

空腹を感じたら、満たされるまで目についた全てを喰らい尽くし飲み干す宵闇の大妖怪。

そして、不運の台風、周囲に不吉を撒き散らす、厄災の黒兎。

単純な戦闘力では、私達に匹敵する妖怪も幾らか居る。

しかしながら、畏れられる、危険視される存在としては、私達が抜きん出ている。

誰かと同列に語られることなんて、妖怪としての自我を得てから、久しく無かったので、どうにも不思議な気分だ。

とりわけ、今日の前で、酒を注いでくれている彼女。

妖力は重ねた年月に相応。

身体能力は速度特化。

妖気は私から見て尚凄まじい。

能力は『自身の不運を押し付ける』ことと推測。

神々と一部の者が独占しているはずの、『酒』を造る技術を持つ。

性格は、この何十万か百万年くらいの間に、随分と変わった。

スレたとも荒れたとも言う。

相手の強弱に関わらず、基本的に戦闘は回避していたのも、今は昔。今の彼女は、敵対するなら神も殺す。噛み付いてくるなら虫けらでも潰す。

自分よりも強いなら、『運悪く』実力を発揮できない様に崩して殺す。

荒んだ目。疲れ果てた顔。言葉を紡ぐのは、数少ない知り合い相手だけ。

この列島の各地を放浪し続け、立ち塞がる者や足元に転がる石ころを砕き、また放浪する。

とうに壊れているのだろう。

目的も無く生きていただけなのだろう。

壊れて壊して殺されかけて殺して、死んでいないから生きている。

実力が伴わなければ、とつくに朽ち果てている在り方。

事実、もしも彼女が『事前に危険を察知する』ことに秀でていなければ、いずれ行こう神との戦争における不確定要素として、私が始末していた。

だけど、彼女は死なない。

死なずに、生き足掻き、だけどとても「生きている」とは言えない有り様。

無様だと思う。

滑稽だと思う。

惨めだと思う。

憐れみは、感じない。

唯、惜しい、とは感じる。

いつか、地上から穢れが払拭され、或いは神や妖怪を構成する非物質の要素が失われ、妖怪が生きられない時代が来る可能性がある。

現在では可能性に過ぎないが、零では無い。

それに備える為もあり、世界に穢れを蔓延させ、妖怪の存在を強める、神との戦争は不可欠。

そして、もう一つの計画も。

私達を形成する非物質要素を囲う箱庭。

失われるものを留める為の楽園。

不運の瘴気を撒き散らし、周囲にある種の異界と化す彼女は、箱庭の楽園における、核たる存在に成り得る。

故に、惜しい。

このまま腐らせてしまうには、彼女は有用だ。

彼女は、使える。

だからこれは単なる打算。

荒んでいく、壊れていく彼女を傍観し続けてきた。

動かせる、私に不都合な神や妖怪を彼女にけしかけて、追い詰めて、追い込んで。

荒んで、戻れないくらいに壊れ果てる寸前の、今この瞬間に、私が現れる。

私なら幸運と不運の境界を操れる。

私ならば、彼女の手を取れる。

私であれば、彼女を私に、すがらせられる。

そうして彼女を私に依存させて、掌の上に乗せ、手駒に。

そのはず、だったのに。

彼女の嗚咽を、耳で聴く。

彼女の嘆きが、鼓膜を震わす。

彼女の泣き顔を見て、見詰めて、凝視して。

彼女の、意外に高い体温が、右手を包み込む。

その涙を、空いた左手が、無意識に拭い、指先を濡らす水滴に口付け唇を湿らせる。

甘い。

嗚呼、何て甘露。

何て甘美。

甘い。

甘い。

甘い。

甘い。

脊髄に走る雷。

震えを抑えるだけのことに、嘗て無い自制心を費やした。

たったそれだけに、どうしてこんな、と思考が空回りする一方で、心が納得する。

これが欲しかったのだろうか。

私はずっと、これが欲しかったのだろう。

どうしようもないくらい、私はこれが、欲しいのだ。

微笑む。

慈愛に満たした微笑を浮かべる。

内心の喜悦を僅かに溢した、全霊を尽くした自制で薄めた笑み。

彼女から私は、どう見えているだろう。

私の姿は、どう映っているだろう。

嗚呼、だけれど、そんなことよりも。

今は唯、彼女を見て、聴いて、感じたい。

だからきつと、あの日、あの時、あの場所で。

私は貴女に執着（コイ）をした。

「そういえば、また月を攻めるらしいな」

「あら？ 協力してくれるの？」

「まさか」

「この時間が愛しい。」

だからどうか、どうか貴女と私で、この
幻想郷／箱庭／楽園
を、
永遠に。

たつてことは！ 殺してほしい、とか何とか言ったね!」

「見てたの!？」

「予想的中だよこの大馬鹿っ!!」

だー! と叫びながら、天を仰ぐてる。

それはまあ、自分自身でも、先走ってしまったことは認めるけれど……でも……。

「……気持ちは分かる、なんて軽々しく言いやしないよ。あたしらの場合、生きたくてこんな長いこと生きてるんだ。

でもね、だからって、突っ走って上手くいくことといかないことくらい見極めなよ。

あの子にとつて、あんたは多分、世界で唯一、『確たる理由を持って憎む』相手なんだから」

「……………ごめん」

「分かればよし」

鼻を鳴らし、てゐは笑う。

つられて私も、少し笑った。

「次はあたしも一緒に行くけど、あんたは何も言わずに引っ込んでること。良いね?」

「はい……」

まったく、どうしようもないくらい、ひねくれものの癖にお人好しなのだ、この幸運の素兎は。

「馬鹿ね」

「お前には言われたくない、馬鹿輝夜」

「他にどう言えつてのよ、馬鹿妹紅」

いつもの殺し合いの最中に、弾幕と共に言葉を交わす。

「厄災の黒兎がどんなモノなのか、分かっているいでしよう」
それらを止めて、輝夜が溜め息を吐く。

「……姿を見せるな、と、言ったはずだが」

「まーまー。頭下げられても苛つくだけだろーけど、ここはお姉ちゃん顔に免じて、ね？」

「姉様がそう言うなら………気に食わんが……」

露骨な舌打ち。眉根を寄せた、あからさまに不機嫌な表情。

無表情だと聞いていたけど、私が見た因幡コクトは、前回も今回も、不愉快だと言わんばかりの顔だ。

「まったく不愉快な……」

言われた。

「私は……」

「黙ってなつての。何を言っても、あんたじゃクロを怒らせるだけ」

「そうだな。率直に言つて、視界に入ることも不快だ。」

月の連中の方がマシなくらいだな」

「そこまでかー。凄いな妹紅。ここまで嫌われたの、多分史上初だよ」

少しも嬉しくない、と思うが、何を言っても駄目らしいので、口を閉ざす。

死にたくない、と願った末に生きて生きて生き続ける黒兎。

成る程、それは、その先を考えずに不死を得て、原因である輝夜と意味の無い殺し合いを続ける私とは、相容れない。

彼女にしてみれば、私の何もかもが癪に障るのも当然だろう。

況してや、そんな私から、殺してほしい、だなんて頼まれたら……。

「で？ 姉様の用件を聞こうか」

「ま、紹介しちやった手前、妹紅の件を謝りに来たのが主だけどね」

「姉様に非は無い。許す。それについては以上だ」

「うちの妹マジかわ」

私を放置して、話が進む。

てゐるの用件とやらは、以前に因幡コクトが贈った酒を輝夜が気に入ったらしく、酒の注文だった。

あいつ、私には厄災の黒兎云々と語っていたクセに、酒は好みだったのか。

言っても、それはそれこれはこれ、と流されるだろうけど。

「月の姫が私の酒を注文するって……穢れだの何だのは良いのか……」

「お師匠……八意永琳も、検査の結果は問題無し、ってさ。」

美味しい酒に罪は無いからね」

「その点は同意する」

うん……美味しいに越したことはない。

「品目と納期は？」

「注文書預かって来たよ。時期はいつでも良いらしい。」

高々十年百年なんて誤差な人らは、そこら辺が適当だよねえ」

「……結構な数だな……受け取りは姉様か」

「他の連中にやらせるわけにもね。月出身者がクロに近寄るはずないし」

「出来上がり次第、少しずつ渡す様にしよう。一度に持ち帰るには、些か量が多い」

「助かるわー」

と、そんな感じで、和やかに姉妹で交流するのは良いんだけど……。

「あつ、ごめんもこたん、忘れてた」

もこたん言うな。

「なんだ……まだ居たのか」

ずっと居たよ。

黙っていると言われたので、無言で抗議の視線を向けていると、因幡コクトが、今回の訪問で初めて、私の方を見た。

「意味も無く、『生きている者』を殺す趣味など無い。」

いつか『死んだ』ら、その時は、私が殺してやる」

……どうということ？

「うおおおっ!?! クロが歩み寄った!?!」

「紹介した姉様の顔に泥は塗れんさ」

「……………ヤバイ……………今一瞬理性が揺らいだ……………」

「何の話だ」

「あんたそのうち襲われるぞ、つて話」

「本当に何の話なんだ？」

死んだらつて、私はそもそも死なないし……………。

分からない。彼女達が何を話しているのか、私には分からない。

「…………『生きている』なら生きておけ。」

永遠の命だろうが何だろうが、『死ぬ』時は『死ぬ』んだ。

本当に『生きていないモノ』なら、身体が治ろうと『生き返り』はせん」

「饒舌だねえ。呑み過ぎじゃない？」

「その『小娘』が見苦し過ぎたせいだろうさ」

「辛辣うー」

ふん、と鼻を鳴らす妹を、ケラケラと笑う姉。

ああそうか。

きつとこの姉妹は。

千年を千回以上繰り返した昔から、こんな風に、変わらず居るのだ。どんなに離れ離れの時間が在ろうと、変わることなく。

『小娘』だなんて呼ばれたのは、いつ以来だろう。

——まだ心が動くなら、今日の貴女と昨日の貴女と明日の貴女は別人だ。

で、あれば、私は貴女を『生きている』と定義する――

だから殺さない、と言われた様な、そんな気がした。

口に出して聞けば、また不愉快そうな顔をされるだろう。

だから、聞かずにおこう。

だけどいつか、私が『死んだ』と判断され、あんたに殺される日ま
では。

あんたと一緒に、酒を呑みながら、昔の話を、してみたい。

愚痴だらけになるかもしれないけれど、私の思い出を聞いてくれ。

私の千倍以上の、あんたの思い出を、聞かせてくれ。

楽しかったことも辛かったことも、お互いに、酒の肴にしてしまお
う。

そしていつか、『死んで』しまった私を、あんたが看取ってくれるな
ら。

それは、なんて、幸いだろう。

番外編：トウホウ・ダイヤモンド

「馬鹿……な……」

それは悪であった。

それは魔であった。

それは不運であり不吉であり不幸であり厄災であり。

「あらあら。どうなさったのかしら？ その程度かしら？ もう終わ

りなのかしら？

鉄を朽ちさせる手品で、貴女の芸は品切れかしら？」

そしてそれは、祟りでもあった。

「終わり？ 終わりなのね？ そうね、それなら、だったらもう」

悪神にして魔王にして厄災にして祟り神。

「貴女、終わらせてしまっても、良いわよね？」

地上に顕現した地獄。

人の形を真似た絶望。

美しき少女の姿をした魔性。

黒い太陽が、墜ちてくる。

「お か あ さ ま」

「首筋を舐めるなくすぐつたい。

お帰り、怪我は無いか？」

「ええ勿論。わたくしは全く無傷ですよ？

あちらはまあ、心身共に面白可笑しい愉快痛快抱腹絶倒な御覧の有り様無様ですけれど」

あー、と、諏訪の国の王妃、因幡乃黒兎は、愛娘の足元に転がされた、黒い塊を見る。

「殺したのか？」

それは、この諏訪の国を制圧せんとした侵略者。その成れの果てだった。

「いえいえそんなまさかまさか。」

この御方、ダイコク様の御息女でいらつしやるのでしょうか？

御母様の愛して止まない伯母様の恩人に連なる御方を弑し奉るなんて、そんな恐ろしいこと出来せんわ」

「……現在進行形で、殺してくれ、と思っっているだろうけれどな」

わたくしの存じ申し上げることは御座いませんわ、と嘯く娘に対して、母は溜め息一つ。それで済ませた。

彼女にとつても、ようやく得た安住の地を脅かす輩は、姉の恩人の娘だろうと、敵だ。

報いとして何をされようが、極論、どうでもいい。

「コークーとごぶおべいえらあつ!!!」

「あら御機嫌よう洩矢神様」

音を置き去りに突撃した幼女が、少女のアップercutで上空へ
かつ飛んだ。

四肢が千切れるのでは、と感じる程に激しく高速で錐揉みしながら
天高く舞い上がり、体勢を持ち直して急降下。

「い……っ！ い、痛いじゃないのさあつ?!」

親に対して何してくれとんじゃあつ?!」

「おや？ 親？ おやおや？」

御母様に迫り続けて押し押してやつとのこと一夜の過ちを犯
させて調子に乗り、それ以来、添い寝もさせてもらえない御方なら存
じておりますが？

他の奥様方にうつつを抜かしていらつしやれば宜しいのでは？

嗚呼、それとも、今度は多満留異母姉様辺りとても近親で致される
のですか？

どうぞどうぞ止めませんから何なら全国民を集めた催事として為
されば如何でしょう？

見られて盛る、しかも実の娘となんて、畜生にも劣るまさに劣情と

呼ぶに相応しいまぐわいですが、貴女様にはお似合いですわよ」

「良い度胸だ表に出ろ」

「やめんか馬鹿共」

不本意ながら旦那になってしまった洩矢神と、その結果生まれた娘による喧嘩を、黒兎の一声が止める。

せつかく危機が去ったのに……危機だった侵略者が厄と崇りまみれの半殺しにされたのに、親子二柱のいさかいで国が滅ぶなど、冗談では無い。

「……こんちくしょう……！」

見た目だけなら……見た目だけならコクトが成長して乳が張って尻も括れも完璧な理想の美少女だったのに……！！

なのに……なんでそんな性格に……！！」

「種が腐っていたのでしようねきつと」

「クソツタレ！ コクトの代わりに相手させるぞお前！」

「不能にして差し上げますわよ？」

「やめろと言うとるだろうが！」

そんなこんなで、諏訪の国に平和が訪れたのであった。

平和なのだ。

「……ところで……その……あー、何て名前だったか……」

「たけ何とかですわ」

「なら、タケで良いか」

「この母娘……何というか本当にもう……」

あんたも災難だったねえ……」

「私は負けた……帰る場所も無い……好きにしろ……」

厄と崇りを混ぜ合わせた束縛を解かれ、力無く項垂れる建御名方神。

徹底的に痛め付けられた全身の傷は癒えず、鉄を朽ちさせる藤の枝は砕かれ、象徴にして権能である御柱はへし折られた。

抵抗する気力など残されていない。

既に彼女は、自身の言葉通り、敗北している。叩き潰されている。「いけませんわあ。この色魔を前にして、貴女の様な女性が、好きにしろ、だなんて」

怪物によって、地獄を見せられているのだから。

「これなるは諏訪の国主、洩矢神様。」

女と見れば孕ませずにはいられない、色欲の権化にして崇り神様。

心折れた美女なんて、この御方にとって、膳に盛り付けられた御馳走ですよ?」

「否定はしない」

「おいこら馬鹿共。数日酒抜きで良いか?」

「怖がらせて御免なさいませタケさん。貴女はわたくしが守ります。御安心下さい」

「心配なくて良いよタケ。この嗜虐趣味の外道が何かしても、あんたは私が守るから」

「は?」

「あ?」

「喧嘩をするなど何度言わせるんだお前らは!」

建御名方神は、この国における力関係を理解した。

小さい方の黒い兎が、頂点なのだ。

「この度の御戦勝を、お妃様の友として、お慶び申し上げますわ、諏訪の国を統べる偉大なる王」

「初めまして、隙間の大妖怪殿。……そうだねえ。ずっと、ずうつと、あんたとは、話がしたいと思っていたよ」

「嬉しく存じますわね。私としても、貴女とは、ええ、是非ともお話ししたいと、願っておりました」

両者、表情は笑顔である。

どこにも非の打ち所が無い、完全なる笑顔である。

芸術家が精魂を刻み創り上げた美の極致たる仮面の様な、笑顔であつた。

「……何だ？ 寒気が止まらない」

「それはいけませんわ御母様。今日はもう寝ましよう寝てしまいましよう今すぐに」

「むう……隙間の奴が来ているらしいから、久し振りに呑みたかつたのだが……」

「体調を崩しては、御酒も楽しめませんわ。

お友達も分かって下さいますわよ。

一眠りする間は、洩矢神様が持て成されることでしょう」

「それもそうか……って、何を布団に入つて来ている」

「わたくしも少しだけ眠くて……駄目、でしょうか……御母様……？」

「まったく……仕方の無い子だ……」

こちらも両者笑顔である。

ただし、母は慈愛が滲む微笑で、娘は愉悦に満ち嬉々とした笑みだが。

諏訪の国は、今日も、実に平和である。

実に平和である。

やがて遙かな時の末。

諏訪の国は、幻想郷と、名を改めた。

人の世に最早、神が続べる国は不要とし、国そのものを異界とした。

玉座に座す洩矢諏訪子。

隣で杯を傾ける因幡コクト。

〔治世を預かる八雲紫。〕

その他の、幻想郷の成立に携わり、維持に尽力する賢者達。

そして、もう一柱。

幻想郷という、崇り神の王国には、最強の姫が居る。

悪神にして魔王にして厄災にして崇り神。

あらゆる侵略者にとっての絶望。

反乱に対する例外を赦さぬ地獄。

守護者にして断罪者にして魔性。

かの国に、異変は無い。

そんなもの、まさしく瞬く間も待たず、黒い太陽に吞まれ、押し潰されるだけなのだから。

諏訪の国、幻想郷は、全てを受け入れて、残酷で、平和である。

トウホウ・キングツネ

因幡コクトとの出会いは、八雲藍が『八雲』と成る以前だ。

一匹の妖狐として生きていた頃。

大陸において、一大勢力の長として、他の妖怪や神々との戦争に興じていた頃。

アレは、ふらりとやってきて、そして、全てをぶち壊して通り過ぎた。

通り過ぎた。

唯、通り過ぎた。

王である己を。

最強の妖獣である己を。

何者をも引き裂き弄び蹂躪してきた己を。

一瞥すらせずに、通り過ぎて行った。

何をしても上手く行かず、同士討ちと自滅の混沌と化した戦場を横目に。

――騒がしいな――

溜め息一つ残し、過ぎ去ったのだ。

厄の台風。

厄災の黒兔。

その異名に相応しく、まさしく災害の様に。

不運と不吉と不幸を撒き散らして、通過した。

あの時のことを、今も八雲藍は、繰り返し思い出す。考えようとしなくても、脳裏を過る。

気に入らない。

気に入らない。

あれほどの力を持ちながら、日々を無為に過ごす在り方が、気に入らない。

宝を持ち腐れにし、酒にばかりかまけ、平穩などというぬるま湯に浸る、妖怪らしからぬ生き方が、気に入らない。

日和った老いぼれ兔を、主たる紫様が友として遇していることが、気に入らない。

主がアレに執着して、時には、極僅かとも言えども隙すら見せることが、気に入らない。

己の矜持に泥を擦り付け過ぎ去ったなど、全く覚えていないだろうことが、気に入らない。

何よりも、あの日、『不運』に対して為す術が無く、唯々「早く過ぎ去ってくれ」と祈った己こそが、許せない。

驕った若き日の苦い思い出、などと流しはしない。

あの屈辱を、八雲藍は忘れない。

八雲藍と因幡コクトの出会いは古い。

八雲藍に対して因幡コクトは、何故か突っ掛かってくる、としか思っていない。道端に転がっていたことなど覚えていない。

だからこそ、両者の和解は、有り得ない。

「……またお前か、狐。酒の受け取りならチエンとやらを寄越せ。お前よりマシだ」

「何故、私がお前に気を遣わねばならん。」

お前の様な輩と橙を関わらせるなど、紫様からのご命令が無い限り、有り得ん」

一瞬だけ交差する視線。しかし、同時に逸らす。

どちらかが意地になっては、延々睨み合い、スペルカードルールに辛うじて収まる勝負に発展しかねない。

要するに、人間はおろか、中堅程度の妖怪すらも、当たれば蒸発する弾幕の応酬だ。以前、風見幽香を交えて、妖怪の山を消滅させかけた時の様な。

無論、自己の感情で主の手を煩わせるという愚行を、ここで繰り返すつもりは無い。

あちらもまた、自ら仕掛けるつもりは無いだろう。

平和主義などでは無く、面倒臭い、という理由のみにより。

「お前と会話するのも面倒臭い。さっさと品を持って帰れ。」

対価は、紫から後日直接受け取ることにする」

「……お前……また紫様のお手を……！」

「放っておいても勝手に来るのだから、ついでに用件を済ませても、問題ないだろうが。」

お前の意見なんぞ聞いてない。文句があるなら紫から聞く。さっさと帰れ」

酒瓶を詰めた箱をこちらに滑らせ、再度呟く、面倒臭い、という言葉。

苛立つ。

こいつのこれは、私を苛立たせようと意図したものでは無く、『気を遣おうと考えていない』が故の態度。

それは理解している。

意図したものであろうとなかろうと、それに噛み付き激昂することが、己と主の品格を下げることも、理解している。

だがそれでも、そうだとしても、堪らなく、苛立つ。

殺せるだろうか、と考える。

今の己ならば、嘗て苦汁を舐めた時よりも遥かに強い。

主から『殺せ』と命令されない限りは、『八雲の式』としての全力は発揮できないが、逆に言えば、『殺すな』とも禁じられていない。

ならば、可能性は有るのでは無いか。

異界に封じて仕留めれば、幻想郷に被害を出すことも無い。

独断の咎で、主に処刑されるかもしれないが、この妖怪兔をのさばらせておくくらいなら、その方がー

「試すか？」

「何？」

「危機察知が反応した。僅かばかりの『可能性』はあるということだ。

だから、ここで、試してみるか？ 狐よ」

表情は珍しい笑み。

微かに口角を上げた、挑発的な笑顔。

これだから。

これだからこいつは嫌いなのだ。

戦闘嫌いを自称しながら、その実、理由さえあれば内心は嬉々として臨むのだろう。

意味の無い殺しはしないなどと謳いながら、必要なら躊躇わず殺すのだろう。

通り過ぎただけで死に逝く有象無象など、気にも留めずに歩み去ってしまうのだろう。

ならば何故、常日頃からそう在り続けないのだ。

あの日、あの時、あの場所で、私達の戦場を蹂躪した『貴女』のままで、居てくれないのだ。

ああ、分かっている。

分かっている。『こいつ』はもう、違う。

「……なんだ。やらないのか」

「無意味だ」

私がいくら苛立ったところで、届きはしない。

「だったらさっさと帰れ。用は済んだだろう」

「当然だ。お前などに、用は無い」

私が何を思おうと、何も変わりはない。

「ただいま戻りました、紫様」

「お帰りなさい、藍。早速だけど、一瓶空けましょうか」

「はい。かしこまりました」

持ち帰った荷物から酒瓶を取り出し、既に杯を手に待ち構えている紫様の元へ。

注いだ酒を、まずは香りを楽しみ、ゆっくりと一口。

艶やかな唇から、感嘆の吐息が漏れる。

「また腕を上げたわねえ。私が外の世界から持ち込んだ技術まで吸収しちゃって。」

人類の研鑽の成果をあっさりと奪うなんて、酷い話。

「そう思わない？」

「人間であれ何であれ、それが紫様の為と成るのであれば、よろしいかと」

「あらまあ、と笑いつつ、もう一口味わい、満足そうな表情。」

「貴女は、何だか不満そうね？」

杯に向けていた眼差しを私へ移し、また笑う。

「紫様を満足させうる酒が、因幡コクトの物のみである点については、世の者らに不満はございません」

くすくすと、主は笑う。笑う。笑う。

「品質だけを見ても、彼女の酒が最上だもの。それに――」

――彼女自身への思い入れを加味すれば、一層ね。

「長年仕えている主だ。」

言葉にしない部分も読み取れる。

そして、それが私の因幡コクトに対する隔意を踏まえた、からかいであることも。

この御方は、私が因幡コクトに挑むことを望んでおられるのだろうか。

その為に、こうしてことあるごとに煽る様な態度を取られるのだろうか。

或いは、私が悩むことを見越した上で、暴発しない様に釘を刺されているのだろうか。

分からない。

私ごときでは、未だ紫様の深謀遠慮を全て理解することなど、出来はしない。

「ねえ藍。コクトは、何も変わってなんていないわよ」

考えが纏まらぬ内に、更に深く私の内心を読み取った言葉。

この御方の前では、私の心理を掌握する程度、書いてある文を読み上げるのに等しい。

脳を開き、さらけ出す様に、紫様は言葉を続ける。

「理由があれば戦うし、必要なら殺す。」

時代によって『理由』と『必要か』の判断は変わっても、そこは変わらない。

荒んでいた頃みたいに、視界に入った知り合い以外が死の遠因に関

与したから、なんて殺しはしなくなっても、同じことよ」

だって、と一拍空け、もう一口、酒を飲む。

「姉や娘を慈しんで、想って、愛して、それでも。

友と交流し笑っていても、いつだって。

彼女はずっと、変わることも無く、この世全てを憎んでいる。

今も昔も、きつとこの先も変わること無く、憎んで憎んで憎み続ける。

全てを壊したくて、愛する者も壊してしまいたくて、でも壊したくなくて」

私に対してそうした様に、ここに居ない因幡コクトの心もまた、切り開きさらけ出す。

「必死に我慢して、生き続けて、あらゆる死の可能性に殺され続けて、我慢して」

愛しげに、愉しげに、鑑賞する様に告げて、酒を、もう一口。

「本当に、健気で可愛らしいこと」

これまで数えるほどしか見たことが無い、どろりとした粘性を帯びた笑み。

執着心を露にしたそれは、杯に残った酒を飲み干すと共に、普段通りの微笑に覆い隠された。

「……私は、紫様ほど、奴を理解することはできません」

漸く絞り出せた言葉は、そんな愚にもつかぬもの。

今更な話だ。私がこの御方に並び立つなど、不可能なのだから。

「唯、殺せ、と命じられたなら、殺します。」

手に入れる、と命じられたなら、如何なる手段を用いても、必ずや

御前に」

故に、私が宣言できるのは、こんなものだ。

「そうね。その時が来たら、よろしくお願いね、藍」

「御意」

私には因幡コクトが分からない。

奴が何を考えているのかなど、理解したいとは思わない。

私が「変わった」と思う奴のことを、紫様は「変わっていない」と仰る。

それが何故かも、私には理解が及ばない。

だから、主が奴に対して何らかを為せと命令を下されたなら。

一切の私情を持たず、完遂しよう。

「その時が来るまで、もう少し悩むのも面白いかもしれないわよ、藍」
再び、くすくすと笑う主の杯に、次の酒を注ぐ。

第緋話

「……まだやるのか？」

「当然！ 何？ もう限界？」

「年寄りに無理をさせんでほしいのだが……」

見た目は幼かろうと、高天原やらの古き神々を除けば、かなりの高齢者なのだ。

腰だの肩だのが痛む訳では無いが、精神的な疲労がしんどい。

「心が老いれば気力も老いる。気力が老いれば生命までも老いていくでしょう。」

不老であれど、不老であるからこそ、若くあろうとせねば朽ちゆくのみよ」

「私に忠言は要らん。気持ちだけは貰っておこう」

「そこで完全に拒否せず、『気持ち』は受け取る辺りが、貴女の歪さね」
知つとる。

「まあそんなことより！ せつかく来たんだからもう少し付き合いなさい！ お楽しみはこれからよ！」

……天人ってこんなだったか……？

昔に見た連中は、もつとこう、悟った様な顔をしていたのだが……。
「変わり者、か」

まったくもって本当に、私に勝負を挑んで来る奴は、どいつもこいつも何というか………変なのばかりだ。

月に攻め込んだ連中が帰ってきたり、何やかんや理由をつけて宴会したり、理由もなく宴会したり、姉様が中有の道の出店を過半数傘下に置いたりなんなり。

えむあんどえーとやらが何かは、私には良く分からんが、さすがは

姉様である。姉様は本当に賢いお方。そして可愛い。

姉様と言えば、先日会った際、鬼の酒虫が品質向上していたと話していた。

……アレが、か……マシに成ったとはいえど、自分から飲みたいとは思わんなあ……昔のが酷かっただけに。

何？ 月への侵攻？ 興味ないな。

面倒事に巻き込まれる予感を危機察知抜きでも覚えたので、ロケットお披露目パーティーとやらも、祝いの酒だけ届けた。

その他諸々、何やかんやあり、そんなこんなで、夏が来た。

博麗神社が倒壊した。

誰がやったか知らんが、死んだな、間違いなく。

などと、完全に傍観していたのだが。

それから少し経って。

我が家に向けて、巨大な岩が降ってきた。

勿論、危機察知にかかったので、出現するまでに練り上げた厄砲で迎撃した。察知から出現まで八秒弱あったおかげで、伊吹に対し撃つた以上の破壊力。

天に向かう黒い光の柱は、岩を消し飛ばし、更に高く高く延びて行った。

初手必殺とは、しかも家ごと潰しにくるとは、なかなか良い度胸だ。どこのどいつかは知らんが、今ので死んでいなければ改めて叩きのめし……あ、今の厄砲、大結界に被害が出ているかも……不味い紫が怒るでしょう。

もう少し出力を控え目しておくべきだったか……やってしまった……。

「し……死ぬかと思った……生まれて初めて、本気で死ぬかと思ったわ……！」

下手人——見たところ天人だから、一応『人』の区分で良いな——とにかくそいつは、生きていた。

よし。責任は全部こいつに押し付けようしよう。

先に手を出してきたのだから、間違っではない。私は悪くない。

「ふ、ふふふ。いきなり、随分なご挨拶ですね、厄災の黒兎」

「いきなり要石を叩き込むのが、天界流の挨拶なのか？」

「あら？。一目で私が天人と分かるなんて、引きこもりのくせに物識りだわ」

喧嘩を売っているのだろうか。

いや、不意打ちで襲い掛かってきた時点で、既に喧嘩を売っているのは間違い無いが。

物言いがいちいち、相手の神経を逆撫ですると言うか……殴られたのか？。この娘は。

「神社を壊して博麗の巫女に退治されてみたり、天人を虐める祭とやらを返り討ちにしてみたりしたけど、あんな攻撃されたのは初めてよ！

さつきは驚いて避けちゃったけど、今度は正面から迎え撃ってあげましょう！」

さあ来なさい！ と両手を広げる天人。

ああ、分かった。

こいつ被虐趣味だ。殴られたいんだ。

だったら、遠慮は要らん。

「え……う。あれ？。ちよつと？」

先程放った厄砲の残滓を妖力で絡めとり、手練り寄せる。

周囲一帯に存在する厄も同様に。

絡めとり、束ね、萃め。

私が纏う厄も混ぜ合わせて。

妖力を注ぎ。

厄と妖力を反応させ合い、互いに強めさせ。

圧縮し、凝縮し。

繰り返し、繰り返し。

強く。

もっと強く。

貫通させると、大結界にまで被害が及ぶので、命中した対象を中心に、渦巻く様に。

装填、完了。

「迎え撃つてあげる、だったか……」

「すつごく前言撤回したい」

「吐いた唾は飲めんど、天人」

「……うわあ……」

安心しろ。殺す気は無い。

見た限りでは、お前なら死なん。

凄まじく痛いだろうが、そこはまあ、望むところなのだろう？ 被虐趣味としては。

「耐えきって見せろ」

発射。

「や……やあってやろおじゃあないのおっつ!!」

気合い充分な天人を、厄の超局所的嵐が飲み込んだ。

「ぬぐぐぐぐう……おぐえ……うぎぎぎぎぎぎぎ……ぐひえ……!」

少々、美人が出してはいけない声が漏れているものの、力尽きる様子は無い。

「呆れた頑丈さだな」

予想以上。

身体にまとわりつき渦巻き、身心を削ぎ取る、妖力で強めた厄を受けながら、天人の目は、衰えること無き戦意でたぎっている。

むしろ、負傷すればするほど燃え上がっている気が……被虐趣味って凄いな。

「……興が乗った。もう少し付き合おう」

風見とやり合う時は、お互いスペルカード宣言なんぞ無視した、あくまでもルールに『準じた』有効打一発勝負。これまで三勝三敗一分け。

フランの場合、あの娘がスペルカードを使いたがるので、毎回、私が避けながら撃つ側。メイリンとは武術の方が主になる。

伊吹については、言うまでも無し。半ば以上、単なる殺し合いだった。あいつの気も済んだらしいし、もうやらん。絶対にやらん。

紫や諏訪子となら、と思ったが、彼女らには立場があるからなあ。余り軽々しく遊ばせんか。

白黒の……名前何だったか……相手には、対人間用のしか使っていないので、実質、まともにスペルカードを使うのは、未体験。

そう考えると、益々興が乗る。
面白い。

強度は充分。厄への耐性も上々。

多少無茶をしても死にはしない相手。

神社を壊し霊夢を挑発することで、わざわざ『異変』として退治されたらしいので、弾幕ごっこを拒みはせんだろう。

作りはしたものの、陽の目を見ないままだった、私のスペルカード達。

それがついに！　とうとう！　やっと！

うむ！　こういう時、人間は「テンション上がってきた」と言うんだったか！

「……ぐ、うううう……耐えきって、やった、わよ……！」

って……へ？　ええ？　なに、それ？」

私が選んだスペルカードは、5枚。

「耐久力は見事。

では、次は回避力を見せてもらおうか」

思わず、笑みが溢れる。

命を賭けずに『遊ぶ』ことができるとは、まったく、良い時代に成つ

たものだ。

「拒むのであれば、追いはせんが？」

「安い挑発ね！ 乗ってあげましょう！」

本当に面白いな、この娘。

「まずは一枚目」

それでは、楽しもう。

兎符『兎の鮫肌剥ぎ』

宣言と共に、海を横した青色の弾幕が波打ちながら広がる。

間隔は広めに取ってあるので、当たりはしないはず。これで落ちられても興醒めだ。

続いて、人間大の魚影、鮫の形をした弾が、私から相手に向けて、ポツポツと順番に現れる。

進行方向は敵の前方。そこまで到達すれば次は敵の右側、後方、左側へ進路を変える様に設定してある。

「こんな低速で誘導弾……？」

「じゃないわね。囲むつもりか！」

「ご明察だ。そして、ここからが、私版の『因幡の素兎』だよ」

私自身から飛び出した、黒い兎型の弾。

それが、まさしく神話の様に、和邇（ワニ）の上を跳び移る。

無論、ただ渡って行くだけではない。

これは、白では無く、黒い兎なのだから。

「鮫が次々に真っ赤に弾けて……!?! 飛び散った弾幕が血飛沫みたい……」

うわ?! これって皮を剥いでるってこと!?! えぐっ!!」

「理解が早いな。作った側としては嬉しくなるよ」

「貴女、鮫に何の恨みが……あ、素兎の妹なんだっけ？ そりや恨むわ」

「良く知っているな。正解だ。もし時間が戻せるのなら、あいつら一匹残らず『素和邇』にしてやる」

「発想が怖いし鯨が困んでくると赤と青の小玉で避けづらいう段々兎が近付いてくるし！」

怖いわ！ 何これ滅茶苦茶怖い！ こつち来るな！」

一面の青色に、皮を剥がれ赤に染まった鯨と飛び散る赤い弾幕。そしてピヨンピヨンと跳ねる黒い兎。

実戦で使うのは初めてだが、我ながら『美しさ』という理念に沿った弾幕ではなからうか、と自画自賛。

皮を剥がれた鯨が悶える動きも、なかなか上手く出来た。満足だ。

まあ、厄の塊である以上、使える相手は限られるが。

殺傷力は落としているものの、並の人間だと、当たれば死ぬほど不運になる。

「だから怖いっての！ 恨みつらみベタ塗りじゃないの！」

「スペルカードには性格が出るらしいからな」

「それで良いの貴女!? ちっ！ 1枚目から、回避に集中させられて反撃もできないなんて！」

文句を言いつつ、弾幕を見事に掻い潜り、最初のスペルを攻略する天人。

……そう言えば名前を聞いていなかったな。後で良いか。

「さあ、2枚目と行こうか」

「休む暇無し!?!」

いやあ、たまには攻める側に立つのも楽しいな。

毎度毎度、殺意全開の連中から、しつこく追われるばかりだからな！
本当に毎度毎度！

2枚目、厄符『リベンジ・ブラック・ラビット』

3枚目、禍符『八百兔夜行』

4枚目、天変『七十六年周期の接近遭遇』

5枚目、禍福『糾（アザナ）える塞翁が馬の縄』

6枚目、災禍『因幡の厄災の黒兔』

「……5枚……って……言った……のに……」

「5枚目を終えた時点で、勝負は貴女の勝ちだと言ったろう？」

取って置きも見るか、と聞いたら、かかって来い！ と答えたじゃないか」

「あんなフリされたら仕方無いでしょうが！」

何やら不服らしく叫んでいるが、いやはや……あー、楽しかった。

「さて、酒呑んで寝よう」

「待ちなさい」

気分良く遊んだし、もう満足したのだが、待ったがかかった。

「5枚クリアで私が勝っていても、6枚目で当てられたんだから、まだ1勝1敗、決着が付いていません！」

「……要するに、次は自分がスペルカードを使う番だ、と？」

「当然よ！」

当然らしい。

それにしても回復が早い。流石は天人。

いや、もしや、虐められるほど元気になるのか？ どんな生態だ。変態か。

……断つても食らい付いてきて、面倒事になるな、間違いなく。

「仕方が無い……手早く済ませよう」

「その次は、さっきの6枚目、もう一度使いなさい！ 今度は攻略してあげましょう！」

手早く済ませようと言つとるだろうが話を聞け。

これ、既に面倒事になっている気がする。

そんな私の予感、実に喜ばしくないことに、大正解だった。

トウホウ・アキノカミ 妹

拝啓

今年もまた、風の中に秋の香りを感じる、心地好い季節となりました。

稲田姫様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

お姉ちゃんに彼女ができました。

彼女ができました。

彼氏じゃなくて彼女でした。

去年引越してきた神社の巫女に押し倒されてー

「つてー！ 何を書いてんの私いつ?!」

自分が見た光景に驚き過ぎて、混乱したまま帰宅して稲田姫様に手紙を書いていた。

何を言っているのか分からないと思うが、私自身も分からない。頭がどうにかなっている確実に。

「よし落ち着こう。とりあえず、まずは落ち着こう」

大きく息を吸って吐いて……。

冷静になって考えてみたら、何かの見間違いだった可能性もある。

草の上に仰向けになったお姉ちゃん。

覆い被さる早苗。

早苗の両手が、お姉ちゃんの真つ赤に染まった両頬に添えられ、段々と縮まる距離に、お姉ちゃんは抵抗もせず、ぎゅつと両目を閉じて……。

「誤解の余地が皆無じゃないの!」

お姉ちゃんはお姉ちゃんで、完全に据え膳だったよ!

緊張と恥じらいはあっても受け入れ準備万端だったよ!

てゆーか何なのあの表情えっちい！ あれが雌の顔ってやつか！
違う？ いいや違わない！

あんな顔されたら、仮に早苗に理性が残ってても一瞬で消し炭で
しょ！ えろいよお姉ちゃん！

あれを誰かに伝えなければ！ 何だかそんな使命感が湧いてきた
！

「そうだ！ あの時のお姉ちゃんの様子を詳細に書いて稲田姫様に送
……………つてどうするの私!?!」

そんなの送られても稲田姫様も反応に困るよ！

駄目だ頭がこんがらがって訳が分からない！

「落ち着け……………落ち着け……………大丈夫……………冷静になれ私……………」

何が大丈夫か分からないけど大丈夫……………

落ち着いて冷静に……………その後、お姉ちゃんと早苗がどうなったか考
えれば……………

「冷静になれるかあつ?!」

何をやってんのあの二人!?!

そもそも！ いつからあんな関係になったの!?!

「あーもー駄目！ ちょっと外に出よう!」

信者達にこんな錯乱した姿は見せられないけれど、少し秋の風を浴
びないと。頭冷やさないと。

じゃなきや、早苗に全身をまさぐられるお姉ちゃんの姿が脳裏に
……………

「つて！ 最早これ妄想でしょ！ 落ち着けての!」

高く青い秋の空に、私の叫びは、やけに虚しく響いた。

「あら？ 一人だけで来るなんて、珍しいわね?」

「うーん、まあ、たまには、ね」

特に行く宛てを決めずに家を飛び出したら、気が付けばコクトさん
の家。

「ご近所だし、通い慣れてはいるものの、雛が言う通り、ここに来る時はいつもお姉ちゃんと一緒にだった。」

「……話したいことがあるなら聞かし、気を休めたいならご自由に。母様のお酒は勝手に出せないから、お茶とお菓子くらいしかないけれど」

「あ、コクトさん留守なんだ」

「賢者の集会ですって。凄く嫌そうにしながら、八雲紫に連れて行かれたわ」

「そういえば、賢者の一角だったね、コクトさん」

全くそんな素振りを見せないから忘れてた。

幻想郷が作られた時に関わったとか何とか聞いた気がする。

いやしかしそれよりも、少々マズイ事態になっている。

これは、ちよつと……いや、かなり機嫌が悪い時の雛だ。

妖怪の賢者を、「紫」では無く「八雲紫」と呼ぶのは、コクトさんの仕事関係ならいつものことだけど、名前を言う時の目が怖かった。

そんな厄はため込まなくて良いから。

溢れさせるのもっと勘弁してください。

「洩矢の神様といい伊吹さんといい風見幽香といい最近よく来る天人といい、隙あらば母様にちよつかいを出して……!」

「フランドールさんも、私より年は上なのに、あんなに母様に甘えて……っ!!」

「ひ、雛ー？ 厄が漏れてるの抑えてくれたら、う、嬉しい、かなー？」

少し空間が歪んで見えた。怖い。すっごく怖い。

「つと。ごめんなさい」

「ううん。いいのいいの。ありがとうね」

思わず棒読みに。表情が引きつっているのが自覚できる。

いやでも本当、怖かったわ。

コクトさんが絡むと、たまにああなるのよね。普段とのギャップが怖い。

それにしても、考えてみると、コクトさんって結構、色んな相手から言い寄られてるのかしら？

ただし、同性ばかりだけど。
いや待てよ。

お姉ちゃんと早苗も女の子同士だよね？

そもそも、幻想郷の神様や妖怪って、大体が女の子よね？

え？ 今まで考えたことなかったけれど、もしかして、女の子同士とか普通なの？

どうなんだろう……？

今まで誰かとそういう話をしたことがないから、全く分からない……。

「ねえ……雛は女の子同士の恋愛ってどう思……なんで距離を取ったの今」

「身の危険かと思って」

「違うわよ!」

私がそういう趣味な訳じゃ無いわ!

雛の誤解を、お姉ちゃんと早苗のことを伏せつつ解くのに、結構な時間がかかった。

……別に、私がお姉ちゃん達の件を秘密にする必要も無かった気がする……つい隠しちゃったけど……。

「自分や好きになった相手の性別とか、神や妖怪には、どうでも良いんじゃないかしら？」

「変えようと思えば、好きに姿を変えられる人も、割りと居るらしいし」

「言われてみれば、それもそうね。」

「だから、養母と養女だからなんて気にしなくて良いじゃないかって、最近思うのよね」

「ちょっと待ってお願い。」

「今、いきなり話が飛ばなかった？」

「そう？」

「うん大分。」

「まあともかく、穰子だって、姉妹だからなんて気にしなくて大丈夫よ、きつと。ちゃんと話せば、静葉も分かってくれるかもしれないわ」
いやもう本当に待って。

「話が飛びすぎてどっか行ったよ!？」

きよとんとする雛。いや、そんな「何を言っているの?」みたいな顔されても。こつちが「何言ってるの!？」だよ!？」

「てつきり……静葉のことが好きになってしまっただけで悩んでいるのかと……」

「別の誤解が生まれてた!？」

「何か悩んでいそうな表情で、珍しく一人でうちに来たから、静葉関係で何かあったのかな、って」

「それは合ってた!？」

「あら? そつちは正解なのね」

しまった!?! 畏か!?!

「……最初に言ったけれど、話したいことがあるなら聞くし、気を休めたいならご自由に。」

話したくないことなら、無理に聞き出したりしないわよ」

「畏か!?! とか思ってたごめんなさい」

「気にしなくて良いわ。私も、ちよつとからかい過ぎたみたいだし」

「ごめんね? と謝る雛に、いえいえこちらこそ、とまた謝る私。」

この件はおあいこ、ということ、二人並んでお茶を飲んで一息あー落ち着く。

考えてみると、お姉ちゃんと早苗を見てから混乱しっぱなしだった気がする。ようやく人心地が付いた。

「やっぱり外に出て正解だったわー」

「随分と悩んだ表情をしていたものね」

クスクス笑う雛に、少しムツとした顔を向けて見せるけれど、余計に笑うのみ。

何だか微笑ましげな、幼い子供を見守るような視線。

……可笑しいな……私の方が年上のはずなんだけど……小さい頃の雛に、「神様の心得」とか教えたりしていたんだけど……。

まあ良いわ。妹分が立派になった、ってことで！ うん！ 私が教えた成果もきつとある！ と思う！

年齢の話をしたら、雛や八雲紫から着せ替え人形にされて可愛がられていたコクトさんはどうなる、って話だし！

当のコクトさんは全く気にしていなかったけどね！

あ、八雲紫がやたら布が少ない衣装を持ってきた時は、厄砲撃つていたっけ。

肩やら背中やらお腹やらを露出する服は苦手らしい。

基本的には無頓着だけど。

その後、うっかりコクトさんの服装について話題にしてしまい、大興奮で「母様に着せたい服」を語る雛に、しばらく付き合うはめになった。

「ただいまー」

「おかえりなさい……信者の人達のところに行っていたの？」

「ううん。ちよつと雛とお茶してただけだよ」

そう、と呟いて黙るお姉ちゃん。

元々綺麗でお洒落で、それが羨ましくてついつい信者とのことを自慢したりしていたけれど、何だか、余計に綺麗になった気がする。

端的に言って、やたらと色っぽい。

「……………何かしら？」

「……………何でもない」

やっぱりアレかな。

恋をすると綺麗になるとか愛されると綺麗になるとか、そんなのかな。

そもそも、アレは本当に……………えーと……………その……………アレな感じのアレだったのだろうか？

実は早苗が転んじやってお姉ちゃんはそれに巻き込まれて、的な勘

違い……にしては雰囲気……なんというか、その……うん……。

お姉ちゃんに聞いてみれば、何かしら答えは出ると思うけど……。

むむむむ……！

「……穰子？　どうかしたの？」

とりあえず保留ってことにしておこう！

「何でもないよ。本当に、何でもない」

お姉ちゃん自身から言われるまでの間は、気付いていない振りで過

ごそう！

第肆話

「……母様。何か良いことがありました？」

「うん？ ふむ……上機嫌に見えたか？」

「かなり」

「そうか」

雛と言葉を交わしつつ、紅魔館から貰った葡萄を使い、造ったばかりの蒸留酒を煽る。

熟成されていない若い酒なので、売り物にはならないものの、これはこれで美味し。

無論、年月を経た深みのある酒も好きだが。

「きつと、帰り道に、『人間』と『勝負』したせいかな」

酒を味わい、娘と会話し、愉快な記憶を振り返る。

嗚呼、これだから生きるのは面白い。

「……また新しい人が母様にちよつかいを……う？」

ただ、何故か雛が不機嫌なのが気にかかる。

妖怪鬼である以上、聴力には自信があるのだが、呟かれた発言だけでは考えまでは読み取れない。

「飲むか？」

こういう時、我ながら貧困な発想ながら、私に出せるのは酒くらいである。

「もちろん、喜んで」

それで正解だったのか、機嫌は良くなったらしい。善きかな善きかな。

そんなこんなで、私は今日も生きている。

賢者の集会などという、極めつけに面倒な催しに呼び出された帰り

道。

議題は、紅魔館以来の「力ある新参者」である守矢神社がこの一年間でどの様に動いたかだの今後の対応だの何だのかんだの。

繰り返しになるが、面倒臭い。

そんなものに何故参加せねばならんのか、とも思うが、紫曰く、私が居るだけで過激派が黙るからやりやすい、らしい。

……何度目か分からんが、改めて。

私は爆弾か何かか？

聞いたら「自覚が無いのかしら」と即答されるに違いないから言わんが。

人も妖怪も神も悪魔も魔物やら諸々も、積極的に害した覚えは無いのだがな。少々の過剰防衛はあれど。

ただし何十万年前の荒れてた頃は除く。

あの時期は、まあ何と言うか、うん、色々あったのだ。

視界に入った者が僅かでも「死に繋がる可能性」であればとりあえず潰しておこう、的な。今は反省している。

とまあ、若気の至りで……当時およそ百万才だったのはともかく……やらかしたことなど思い返しながらの、帰宅中。

「……一年ぶり、だぜ」

魔法使い未満の黒白に絡まれた。

「………あー、そう言えば、前の秋、だったか？」

諏訪子達が幻想郷に来たくらいに、勝負を挑まれた気がする。覚えている覚えている少しくらいは。

……名前は何だったかな……？ 五月雨？ 時雨？ 村雨？ 村

雨が一番近いかな？ 雨っぽい名字だったのは確かだ多分。

「はー！ どうせ私のことなんて、ろくに覚えちゃいないだろ!？」
はい。

……黙っておこう。何を言っても怒りそうな予感がする。

危機察知には大した反応が無いので、無意識に回避できる程度の危険度だが、好き好んで神経を逆撫ですることもあるまい。

いずれにせよ、私の弾が掠めただけで死んでしまう相手と、争うつもりは無いしな。

「確か……前に使ったのも、これだったかな？」

鏡符『ミラームーンボール』

そういえば、この少女に使って以来、全く使わなかったスペルカードだ。

風見やフラン、あと天人相手には、まるで強度が足りない。即座に壊される。

もつとも、彼女に対してであればこれで充分――

――私の頭があつた位置を貫く光線、絞り込まれた魔力の束を、首を傾けることで回避する。

当たつても即死する威力ではない。

多少よろけるくらいのものだ。

相手の周囲を覆う面積の代償に脆くなった反射結界を貫通する為に、殆んど力を費やした残りかすだ。

だが。

だが、しかし、だ。

「……へへ……今で当たっていれば……私の……勝ちだったんだけどな……」

彼女は、この少女は、真の魔法使いに至らない、未熟な『普通の』人間は。

汗だくになって、全身全霊を尽くして。きっとこの1年間、努力と研鑽と探究を積み重ねて。

私の結界を、打ち破ったのだ。

「……素晴らしい……」

スperlカードを攻略されたことで、結界が崩壊する。
穿たれた穴からひび割れ、砕け、砕けて砕けて砕けて。

無数の輝く粒が風に舞い踊り、『勝者』を祝福するかの様に、幻想的に空間を飾る。

本当に、美しい光景。

美しくて、素晴らしい、夢の様な瞬間だ。

自分がかつて、前世において、人間であつたことなど、主張するつもりは無い。

そもそも、どんな人間だったのかも、記憶に微塵も残っていない。だけど、それでも。

きっと私は、人間に惹かれていたのだろう。

脆く儂く容易く死んでしまう者の、刹那に輝く流星の光を、我知らず追っている。

死にやすく、死に近く、それでも尚、『生きて』いる。

その美しさに、焦がれている。

ひたすらに『死にたくない』と生きて生きて生き続ける私は、どんな妖怪より神より『生きて』いる人間にこそ、憧れる。

「……改めて名乗ろう。因幡コクトだ」

故に、貴女に敬意を表しよう。

「失礼なのは承知しているが、もう一度、貴女の名前を教えてください、『人間』よ」

貴女は脆い。

貴女は弱い。

貴女は壊れやすく、貴女の力は私を殺せない。

その上で、私は貴女を敬おう。

「霧雨魔理沙だぜ。」

「今度は忘れないでくれよな」

「ああ。少なくとも、百年は覚えておく。

それ以降については、この先、貴女がどれだけ印象深いか次第だ」

「上等！・百万年経つても忘れられなくしてやるぜ！」

「楽しみだな」

短い生で、微かな力を、情熱を以て燃やす者よ。

「私に『貴女』を覚えてくれ、霧雨魔理沙」

この人外（ヒトデナシ）に、どうか『人間』を魅せてくれ。

さて、とは言うものの、私の弾幕では霧雨が死んでしまう事実は変わらない。

ほんの1年で、スペルカード用の反射結界を貫通できる魔力加速と圧縮を修得したことは素晴らしいが、耐久力は大きく変わっていない。

と、なると。できる勝負としては、霧雨がスペルカードを使う側、私が回避する側か。

非殺傷の弾幕を避けるのは苦手だが、フランの相手で慣れていると言えば慣れているか。そう不様は晒さないだろう、多分。

「行くぜ！」

恋符『ワイドマスター』ツ!!」

っとうおおっ!?! なんじゃこりゃ!?! 津波か!?!

当たっても死なないが、その分、危機察知は役に立たない。

霧雨のスペルカードは知らないの、予備知識無しの反射神経任せな見てから回避である。

「あつさり避けるか！ こないだ作ったばかりのとおきだったんだけどな！」

「余裕な訳では無いさ」

「綽々な顔してよく言うぜ！」

叫びながら、星形の弾幕をバラ撒く魔理沙。

そして再び放たれる放射状の光線。

初動と魔力の流れと視線と意識の向きから読んで回避する。二回目は通じんよ。

この程度で当たっていたら、風見やらに何度殺されているか分からんからな！

……自分で考えて少し悲しくなった。平和に生きたい。

ところで、何となくだが、そのスペルカード、本来は数年後くらいに開発されるものではなからうか？

私が存在することによる影響、という奴か？ まあ、考えても仕方が無いのでどうでも良いが。

「ちっ！ 次だ！」

恋符『マシンガンスパーク』ツツ!!」

余計な思考をしていたら、あっさりと負けてしまう。

弾幕ごつこの勝敗に拘る質(タチ)では無いが、情けない様では、霧雨の努力に対して失礼だろう。

それに、何よりも。

「……ああ、良いなあ。実に楽しいよ、霧雨」

「それは！ よかった！ ゼツ!!」

この時間は、『人間』と遊ぶのは、とてもとても、楽しいのだから。

少しでも長く、少しでも多く、『貴女』を知りたい。

「くくっ……我ながら、まるで恋に恋する小娘じみた考えだな」

「ちよつと待て。急に寒気がしたからその発言取り消してくれ取り消してください。

なんか、理不尽に私が殺される未来が見えたんだぜ」

「危機察知か？」

「虫の知らせってやつだぜ」

良く分からんな。

「と、とにかく！ 恋とか不穏な発言禁止！ 分かったか!？」

「自分はスペルカードに『恋符』と名付けているのに……」

解せぬ。

トウホウ・ミダレガミ

轟、と、大気のみならず、空間ごと抉る豪腕を振るう。

鬼という種族に於いて、生まれながら規格外の怪力を有する中に於いて更に、力の銘を冠した拳。

力の勇儀。

怪力乱神の武力。

直撃させれば砕けなかつたものなど無い。

掠めただけで、強者と呼ばれた者をも残骸と化す。

そんな拳だ。

そんな力だ。

「嗚呼……！ 嗚呼……！ ああああああつつつ！！！！ 最っ高っだあつ！！ 最高だよ！」

拳を振るう。拳を振るう。拳を振るう。

力任せに、本能のまま、鬼である己を誇る様に、荒れ狂う暴力の嵐。

「コクトオオオオオオオオツツツツツ！！！！」

それが、届かない。

いなされる、避けられる、逸らされる。

暴風と化した自身に対するは、こちらも暴風。

視覚化された、そこにあるだけで物理的な干渉力すら持つ程の、かつてない濃密な妖気を纏う、因幡コクト。

その身体が、鬼よりも遥かに脆いことは知っている。

どれほど上手くいなそうと、この拳に触れば指は振れ骨が砕け肉が弾け飛ぶ。

だと言うのに、全く通用しない。

全身に纏った妖気の壁に阻まれて、肌に触れることすらできない。

直撃すれば貫ける。だが、直撃させられる気がしない。

妖気を削ぎきれば障害は無い。だが、底がまるで見えない。

矛盾する表現になるが、変幻自在の柔軟かつ堅固な城塞、と言ったところか。

全力で、殺意を込めて挑んで、尚も届かない。

嘗ての喧嘩は楽しかった。娯楽だった。

お互いに、この程度で死にはしない、と信じる範囲でぶつかり、気が済めば酒を酌み交わした。

楽しかった。嗚呼、間違いなく楽しかった。

しかしそれは、互いの底を覗く、死闘では無かった。

ならば、今のこれは？

この感覚は？

この疼きは？

この快感は？

肌が粟立つ様な、神経が焼ける様な、血肉が燃える様な、魂が沸騰しそうなこれは何だ!?

今、自分はかけがえのない友を殺そうとしている。

この程度なら、なんて遠慮は無い。

死なない様に、なんて加減は無い。

全身全霊、己の全てをさらけ出して、本気で殺そうとしているのだ。

度しがたい。

何百年振りの再会に、獣の様に噛み付くなど、自分で自分が理解できさない。

それでも分かる。

私は。

地上を見限り。

幻想郷を見限り。

人間を見限り。

地底の喧騒に膿んで尚。

この瞬間を。

この熱を。

この闘争をこそ望んでいた!

爆音。

視界に青空。

顎に灼熱の如き激痛。

首がもぎ取られそうだ。

懐に入られ下から掌底を受けたか。

何度も食らった技だ。

嘗てとは威力が桁違いだが。

そもそも、殴られてあんな音がするか？

一撃で意識が飛びかけるなんて。

クソ、脳が揺れている。

思考が纏まらない。

余計なことを考える余裕なんて無い。

体勢を立て直さないと。

同じ技を何度も受けたから、この次に何が来るかも分かっている。

回し蹴り。

狙いは何処だ。

この攻撃力がコクトの蹴りに乗せられたら、私の肉体でも貫かれかねない。

何処が狙われるか、正確に読み防がなければならない。

読み違えたらここで死ぬ。

死ぬのは良い。

負ける。

それは駄目だ。

まだ自分を出し切っていない。

折角の、こんな素晴らしい闘争を、不完全に終われるものか。

燃え尽きる前に御仕舞いなんて、そんなのは、無い。有り得ない。

腹だ。

腹に来い。

防御。

腕は動かない。間に合わない。

体の強度で凌ぐしかない。

意識をかき集めて、腹筋を固める。
耐える。
来い。

再度の爆音。
音源は鳩尾。

狙い通りの位置に、想像を絶する衝撃を受け、私の体が吹き飛んだ。
地底まで叩き返されそうな勢いで蹴飛ばされて、地面に衝突。
視界が土砂に埋まる直前。

些かも衰えない、解き放てば幻想郷を塗り潰すと感じる程の妖気を纏うコクトが、蹴り終えた残心を解き、ゆっくりと地面に下りてくるのが見えた。

ーまだやれるだろう？

そう聞かれた気がした。
きつと本当だ。

気のせいな訳が無い。
身心に火が点く。

終われない。
もっと楽しみたい。
それもある。

だが、それ以上に。
あいつに失望されたくない！
あいつの期待に応えたい！
私を見せろ！

この星熊勇儀の底を見せろ！
こんな所で寝ていられるかよ！
これで終わって、怪力乱神なんて謳えるものか！

内臓から溢れる血を飲み下し、代わりに口から咆哮を吐き出す。

上方にあつた、地表からここまでの大地が、放射状に吹き飛ぶ。出鱈目に妖力を放出しただけの、形を持たない純粹な力の放出。豪雨の様に、土砂が降る。ざあざあざあざあ。

土の雨と共に、咄嗟に上空へ飛んだらしいあいつも下りてくる。今しがた生まれた窪地の底で、雨の中、傘もささずに向き合う。鬼である私にとつても、雨粒一つ通さない妖気を纏うコクトにとつても、土も水も変わらない。

「……多少は消費できたが、まだまだだな。多すぎる」

両手を眼前に翳し、自らの妖気を眺め、コクトが言う。

「もうしばらく、付き合ってもらうぞ」

「やめろと言われても、止まれるもんか」

互いに笑う。

「それもそうだな」

凄惨に笑う。

「私も、楽しくて仕方が無い」

笑い合い、踏み込み、殴りつける。

振るった拳は逸らされて、蹴りが脇腹に突き刺さる。

衝撃が腹の内側で暴れまわり、かき混ぜられる。

それでもやはり、どうしようもないくらいに、笑える。

いなされ、蹴られ。

避けられ、打たれ。

逸らされ、投げられる。

だが、止まらない。

蹴られ、打たれ、投げられ、『勝ちを譲っても良い』と思えるのに、尚も止まらない。

お前になら殺されて良い。

お前になら、「天晴れ見事」と首を差し出せる。

鬼（ワタシ）の首を以て、強者（オマエ）の武勲とし、お前（ツワモノ）に討たれたことを、私（オニ）の誉れとする。

そんな終わりでも、一向に構わない。

否、それ以上の終わりなど、『人間に正々堂々討ち取られる』なんて、夢物語しか無いだろう。

死ぬべきは、ここだ。

これこそ、私の死に場所だ。

だと言うのに。

なのに。

それでも。

そうだとしても。

私の全てが、血が、肉が、魂が、積み上げた生涯が、鬼の本能が。

お前と限界に臨むことをこそ、何よりも、鬼の誇りよりも尚、願ってやまない！

「ぐ……っ」

幾度も振るい続けた拳が、遂にコクトを捉える。

しかし、直撃では無い。

胸の前で、掌を向き合わせる奇妙な構え。その両手の間に空いた、小ぶりの西瓜程度の空間に、妖力が練り上げられていた。

大妖怪や高位の神であろうと、胸を貫き背中まで飛び出すだろう必殺の拳は、その妖力に阻まれた。

関係無い。

戸惑いも躊躇いも無く、思い切り拳を振り抜く。

炸裂音。

完全に拳を振るい終える前に、妖力の塊が弾けて、自ら後方に飛ばれた。

そして同時に、置き土産の様に、潰された右手。

五指が千切れて、拳としてはもう使えない。

なら、コクトを真似て、掌底なり裏拳なりで使えば良い。

攻撃手段が多少制限されただけだ。痛みなど、とつくに脳まで届かなくなっている。

仮に届いたとしても、そんなことはどうでも良い。

痛覚に回す意識すら惜しい。

全力の拳と、妖力を炸裂させた勢いを受け、吹き飛んだコクトが、四肢を踏ん張る。

手足から伸びる、妖力の鉤爪。

大地に、文字通り爪痕を刻み付け、制動。

「初めて見る技じゃないか。奥の手かい？」

「初めての使い方だ。思いの外、上手くいったな。

……砲撃が使えない状況であれば、普段でも有効か？」

小柄なコクトからしたら巨大な手足を動かす様は、ややぎこちな
い。

あの両手では、攻撃をいなすのは難しくなっただろう。

しかし、肌を感じる圧迫感から考えて、攻撃力は私と同等。

「いいねえ……！ 今度は殴り合い、つてかあっ?!」

「お前と殴り合うなんて、悪い冗談に思えるが……今更か」

「違くないね！」

戦闘中だと言うのに、一步誤れば死ぬ殺し合いの最中であるからこそ、笑みが溢れる。

笑いが止まらない。楽しくて仕方がない！

「つうおらあああっつ!!!」

「はあっ！」

真っ正面から、拳と拳をぶつけ合う。

間に挟まれた空気が押し潰され、響く轟音。

余波で大地が砕け、空から雲が消し飛ばされる。

しかし、それほどの衝撃を撒き散らしていながら、互いに不動。

僅かばかりも退かず、空いたもう一方の拳を、同時に振りかぶる。

そして再度の轟音。

三度振りかぶる。

拳をぶつける。

打つ。

打つ。

打つ。

打。

私の拳の方が強ければ、勝てるのだ。

だったら、やることなんて、一つきり。

ここで、これまでの限界を超えるしか無い。

今までの最強を上回る以外に、勝ち目は無い。

嗚呼。

嗚呼。

なんて、楽しい。

私は、生まれて初めて、『強くなりたい』と、切望している。

限界に臨むだけでは無く、もともっと、お前といつまでも戦えるくらいに、強くなりたい。

私の限界を、今この闘争で、超えて見せたい。

お前に、勝ちたい。

「……逆境で成長する鬼など、冗談じゃないぞ」

疲れた、と溜め息を吐くコクト。

無尽蔵に思えた妖気も、未だに普段より遙かに莫大なものの、随分と減った。

妖力の鉤爪も、形を保てず崩れかけている。

「……………くっそ……………ちから……………はいんねえ……………」

それでも、私は届かなかった。

生命を削ろうと、精神を搾ろうと、魂を燃やそうと、手足はピクリとも動かない。

最後の悪足掻きに、噛み付いてやろうとしたが、顔面を叩き潰され

て牙も顎も砕かれた。

爪に幾度も貫かれた腹の傷から、血と臓物と生命力が抜け落ちる。「後付けの力でも勝ちを勝ち。」

それで良いな？ 星熊」

「……あたりまえだろう……なめんなよ、コクト」

武器を使われたから負けた、だの言う奴は、『鬼』じゃない。

相手が何を留意しようが、何を企もうが、力任せに踏み越えて笑うのが、『鬼』だ。

この、力の勇儀の在り方だ。

「……………まったく。まるで変わらんか、お前は」

呆れた様に、楽しそうに、コクトが言う。

この喧嘩を吹っ掛けた時にも、言われた台詞。

その言葉に、心が震える。

変わってしまったと、思っていた。

人間は変わり、地上は変わり、地底で腐り私も変わって、もう、かつてと同じではいられないのだと。

そんなことを感じつつ、それでも『昔ながらの鬼』で在ろうとしていた。

その拘りに意味が見出だせなくても、果たして今の私は『星熊勇儀』で在り続けていられているのか分からなくなってきても。

——まるで変わらんか、お前は——

その言葉に、救われた。

「やい、」

救われて、満足してしまい、戦意を無くした私から視線を外し、コクトは背後を振り返る。

「星熊を、鬼の四天王、怪力乱神、力の勇儀を下した私に、『殴り合い』を挑む『鬼』は、前に出ろ」

さつきまでの喧嘩、コクトに言わせれば馬鹿騒ぎで周囲に散っていた妖気が、収束する。

妖力の鉤爪が、再び形成し直される。

にい、とわざとらしく挑発的に歪めた笑み。

その瞳が捉えるのは、私達の喧嘩に釣られて地底から出てきた鬼達。

力と力のぶつかり合いに心奮わされて、誘われてきた連中。

そいつらの目に、光が宿る。

地底で管を巻いていた頃には失われていた『鬼』が、煌々と、爛々と、輝く。

全員、残らず、一步を踏み出す。

皆殺しにされるかもしれない。

きつと大勢が死ぬ。

この妖怪兎は化物だ。

鬼が数に任せて挑んだとしても負けそうなくらいに狂っている。

だからこそ、だ。

死力を尽くして強者に『真っ正面からの殴り合い』を挑めるなんて、

そんな何百何千の歳月を生きても巡り会えない機会を見逃す奴が、『鬼』に居る訳が無い。

「ああ畜生……星熊にあてられたか、怨霊を纏い過ぎたか……らしくないな、本当に」

牙を剥く様な笑顔で、コクトが笑った。

「命懸けで来いよ、馬鹿野郎共」

応じるのは、咆哮。

猛り煮えたぎる鬼の群れ。

退くことなんて微塵も考えずに、誰も彼もが、一齐に突進して行く。迎え撃つ妖力の拳に、腹を殴り飛ばされて、頭を砕かれて、腕をもがれて。

どいつもこいつも、心底楽しそうに、暴れている。

ゲラゲラと、ゲラゲラと、ゲラゲラと。

殴り飛ばされ立ち上がりまた挑み、楽しそうに笑って逝く。

腕がもげたら噛み付いて、脚がもげたら這いずって、そして死ぬ時は、笑って逝く。

馬鹿みたいに笑い、馬鹿みたいに騒ぎ、笑って騒いで戦って逝く。

それはまさしく、『昔ながらの鬼』そのものの在り方。

……今すぐに飛び起きて混ざりたいのに、生憎、手足は動かない。仕方無い。私はさっきので、満足しておこう。口惜しくて堪らないが。

あの喧嘩に、悔いなんて無いのだから。

第地話

「お前といい伊吹といい……頑丈過ぎるだろう」

「そりゃ鬼だからねえ」

カカカツと笑い、杯を空ける星熊。

「くううう！ 傷に沁みるう！」

「それでも呑むとか阿呆かお前は」

「何百年振りかのおんたの酒さ！ 呑まずにいられるか！」

干した杯に手酌で酒を注ぎ、また笑う。

笑った拍子に、塞がりかけの傷から血が滲むが、気にする様子も無く、楽し気に笑う。

両手両足と顔面潰して胴体に幾つも風穴空けたはずなんだがなあ……。

うん。むしろなんで生きているんだお前。やったの私だけ。

「いやまったく！ 情け容赦無くやってくれたねえ！」

「加減したら私が死ぬ。お前に殺される」

「もつともだ！ もしも加減なんざしやがったら、ぶっ殺すさ！」

「だろいな」

星熊だけに吞ませてばかりなのも何だし、私も呑む。

他の鬼共も、動ける奴らはどんちゃん騒ぎだ。

「……………減ったな」

「ああ。随分と減ったよ」

馬鹿騒ぎで、大騒ぎだが、昔に比べると、明らかに鬼の数が少なくなかった。

「地底に籠る前に、強敵に喧嘩吹っ掛けて逝った奴も居た。

地底で、鬼同士で喧嘩して逝った奴も居た。

私に挑んで逝った奴も居た」

そして今日、私とやり合って、私が殺した奴も、大勢居る。

「コクト」

そんなことは、私も星熊も、分かっている。

「鬼（わたしら）に付き合ってくれて、ありがとうよ」

とつくに、最初から、分かりきっている。

「別に、『いつも通り』の、馬鹿騒ぎだ」

だから全て、杯に注ぎ、飲み干した。

私も鬼も、どいつもこいつも、暴れて呑んで、笑った。

次に会う時も、きつと、暴れて殺して死んで、呑んで笑うだろう。

生まれ落ちて百数十万年という、訳が分からんほど永くを生きた、この世界。前世の知識とやらによれば、『物語』について、考える。

既に歳月で摩り切れ消えかけた知識ではあるが、時折覚える既視感や、少なくとも姉、『因幡てゐ』や、娘、『鍵山雛』を知っていたことから、おそらく妄想の類ではないだろう。

そして、その『物語』には、私、『因幡コクト』が存在していなかったことも、確かだ。

では、私とは、前世とは、知識とは、この世界とは、何なのだろうか。

考えても答は無い。

そんなこと、分かりきっている。

生まれて百年も経たない内に、「まあ、どうでも良いか」と結論して、遙か未来の、『物語』が始まる時代、多分現在まで、覚え続けておく努力を放棄したくらいだ。

この思考に意味は無い。

価値も無い。

ならば、何故こんなことをつらつらと考えているのかと言うと。

「……………暇だ」

暇過ぎて他にやる事が無いからである。

一応、仕事中にはある。

散歩中に現場に出会した為に成り行きで始めたことだが、その後、紫からも継続するよう頼まれてしまった。

何やら『選択肢次第で死ぬ可能性』を察知して興味本意で首を突っ込み、見事に、間欠泉が湧く瞬間に立ち会った結果だ。

とは言え、『死なない道筋』がある程度は見えているので、そう騒ぐことでもないのだが。

思考を弄びながらも、間欠泉から噴き出す怨霊を、妖力で絡め取り自我を塗り潰し、不運の幽霊、即ち厄として掌握する。

怨霊と厄を同じものとして扱うのは、色々と異論があるだろうが、率直に言って、ある程度の能力になれば、「自分ができると判断したらできる」のだ。

身も蓋もない話だが、実際そんなもんである。

大体、その手の話題なら、紫が一番訳が分からん。境界を操るって何だ。

そんなことはともかく、とりあえず現在、私は次から次へと湧いてくる怨霊を逃さず捕らえ、厄に分解し収束している。

言葉にすると大仕事だが、私がやっていることと言えば、普段は身体の周囲に循環させて纏っている厄を、適当に間欠泉を覆う様に広げて、厄に妖力を混ぜているだけだ。

後は、妖力に耐えきれなかった怨霊が、勝手に厄として巻き込まれていく。

吸引力の変わらない唯一つの黒兎、なんて、何か良く分からん文が脳裏を過った。前世関連だろうか。どうでも良いが。

結局、私にとっては、いつもと少し違うことをしているだけなので、特に集中する必要も無い作業。

厄の量は阿呆の様に多いが、制御出来ないこともない。

砲撃として放てば、何処に向けても大惨事になること請け合いだ。上空から拡散して四方八方に撒けば、幻想郷の九割強が死滅する。やらんけど。

兎に角、束ねて制御する分には、全く問題は無い。

そうなると、この場から離れることもできない以上、脳味噌が暇を持て余す。

つまり、暇なのだ。

紫から報酬として貰った外の世界の酒も美味しいが、一杯飲めば酒造方法は理解できた。

人間も進歩したなあ、とは思うものの、こと酒に関してであれば、まだまだ私には及ぶまい。思いもよらない技法に驚かされることはあるが、真似できなかつた試しは無い。

味を楽しむ分には、飽きは全く来ないのだが、思考を全て費やすほどでもない。美味しいけど。

ちなみに、紫曰く高級車とやらが買える値段らしい。何か高そうだな。とりあえず美味。

「……と、酒だけ呑んで楽に終いなら、良かったのだがなあ」

そももいかんか。それもそうか。

最初から、『死ぬ可能性』があることは、分かっていた。

分かつた上で、ここに来た。

ここに来て、こうしたら、地底に潜ったあいつらが上がってくると、分かっていた。

「こんな所でやり合う訳にもいかんが、な。周囲が更地では済まん。

怨霊も尽きたことだし、そろそろ都合の良い場所に動きたいのだが？」

「用意しろ、ってことかしら？」

「世話になる」

「はあ……どういたしまして」

どうせ居るだろうと声をかければ、案の定、紫から返事が寄越される。

必要な時に必要な場所に。相変わらず、間を外さん奴である。

「相手は星熊と……あとは鬼が……沢山だな。地上に来るぞ」

「貴女の妖気に惹かれてね」

「それを言われると……まあ、許せ」

「はいはい。貸しておいてあげる」

いやはや全く、頼れる賢者様である。

今の私だと、纏う厄が多すぎるせいで、思いきり相手を殴るだけで地形が変わりかねん。

「ちなみに、厄砲を撃つても大丈夫な空間とかはー」

「無いわ。厄弾も禁止」

残念。

相手は星熊、その後には鬼の集団と連戦。

戦場は紫が用意した、結界に覆われた隔離区域。

そして戦闘は肉弾戦限定。

「よう。お招きに預かり、参上したよ、コクト」

「地底から遙々、御足労だな、星熊」

なかなか、疲れる条件である。

「なあに、そんな、地底からでも分かる妖気を放たれちゃ、気合いも入るってもんさ」

これから、この腕力馬鹿と殴り合いとくると、余計に疲れる。

「……まったく」

だが、まあ。

「まるで変わらん、お前は」

悪くない。

悪くは、ないな。

知らず、歯を剥き出しに笑い、怨霊を束ねた厄を四肢に凝縮していた。

「この厄を消費し尽くさなければ、家にも帰れんからな。」

付き合ってもらおうが、できれば死ぬなよ？ 星熊

「おいおい……誰にももの言ってんだい？ コクト」

どう転んでも、私は死なない。

どう足掻いても、星熊は私を殺せない。

「手え抜きやがったら、ぶっ殺す」

「上等だ。たかが兎ごときに狩られるなよ、鬼」

私が仕損じるか、或いは、星熊が因果を曲げでもしない限り、結果は見えている。

だが、しかし。

それはそれとして、ああやはり、この瞬間は、熱に浮かされる。

さあて、久方ぶりの、馬鹿騒ぎと行こう。

時系列順不同 第末話

「……約束を果たしに来た」

「……………」

応えは無い。

「大地が壊れ尽くして、全人類が地下に潜るか宇宙に旅立つかしたというのに、こんな所に座り込んでいたなんてな。

まさか、『人』探しに悪神の権能を使うとは、思わなかった」

「……………」

彼女は応えない。

「……貴女は死んだ。だから、私が殺そう。藤原妹紅」

「……………」

私の声に応じる者は、誰も居ない。

死んだ彼女は、昨日も今日も明日も、変化しない。

だから、地上に生きた最後の『人間』を、私は殺した。

幻想郷から、幻想が尽きた。

楽園の箱庭は、終焉を迎えた。

それでも、神も妖怪も失われても、幻想が無くなっても、科学に囚われた世界に紛れ込んでも、私は消えない。

「ちっ……結局、負け越しになったわね」

幾度となく競った好敵手を亡くした。

「神奈子も早苗も逝ったし、私も逝くよ」
永きを過ごした友を亡くした。

「ああ、楽しかったよ……これで満足さ」
「最期に相手をしてくれて、ありがとう」

何度も馬鹿騒ぎした友を亡くした。

「私より年上になるまでは、生きなさい」
最も古き友を亡くした。

「流石にもう疲れたし、この辺で良いや」
共に生まれた姉を亡くした。

そして今。

「かあ……さま……？」

「ここに居る。心配するな、雛」

私は、娘を看取ろうとしている。

親が子を、見送ろうとしている。

それでも尚、私は、消えることができない。

死にたくない。

死にたくないから。

だから私は、死ねない。

共に逝きたいと願っても、私は、死にたくない。

「なか、ないで……かあさま……」

「……それは無理だ」

悲しいのに。

死にたくなるほど悲しくて寂しいのに。

なのに、私は未だに、死にたくない。

「どうしても駄目か？」

「……だめよ」

雛を、厄神を生き永らえさせる方法はある。

地上を汚染し尽くして、宇宙に逃れることができず、地下に潜った
人類。

彼らに、災厄を思い出させれば良い。

不運という厄災を、刻み付けければ良い。

神に救いを請わせて、厄神様に祈らせれば良い。

そうすれば、雛はまだ生きられる。

「ごめん、なさい……」

「雛が謝ることじゃない」

しかしそれは、許されない。

この子は、そんなことを望んでいない。

死の縁にあつて尚、この子は『人間の幸福』を願うから。

私が暴れて、その祈りを穢すことなんて、できない。

「かあさま……わたし……」

「ああ」

最期の瞬間まで、この子はまさしく、神様だった。

「しあわせだったわ……」

「私も、お前と出会えて、親子になれて、一緒に過ごせて、本当に、幸せだったよ」

260

私は独りになって。

そして私は、悪神に純化した。

もう、この世界には、『因幡コクト』である必要性が、『妖怪』として生きる意味が、無くなったから。

「……………そう言えば……」

独り呟く。

「誰も居ないのは、随分と久し振りだ……」
この先の悠久を想いながら、応える者の居ない荒廃した大地で、変色した空を仰ぎ。

独り、眩く。

私はまだ、死にたくない。

第闇話

「あれ？ コクトは食べないの？」

「体質的に肉は合わないと何度言わせれば……ああ、いや……」

途中で言葉を切った私を、金髪に大きなリボンを結わえた少女は、不思議そうに見つめる。

「お前に対して言うのは、初めてだったか」

「んー？」

余計に分からなくなったのか、こてんと首を傾げる少女。

口元と両手が鮮血に塗れていることに目を瞑れば、無邪気な仕草。

元より、彼女に邪気は無いのだろうか。存在が邪(ヨコシマ)であったとしても。

「……肉は良いとして、酒はどうだ？」

「うん！ おいしー！」

「ちょっと辛いけど、お肉にあうー」

「そうか。それは何よりだ」

水割りの具合も、勤任せでやったが、丁度良かったらしい。

昔のこいつであれば、薄めずに肉と一緒に流し込む様な呑み方をしていたものだが。

それでもやはり、気に入るのは当時と同じ種類の酒。

「姿が変わり、味覚が変わり、記憶も力も無くとも、好みは早々変わらん、か」

「なんのはなし？」

「きよとんとした、嘗てとは似ても似つかぬ、あどけない表情。

「なあに。生きているのは面白い、というだけの話さ」

今の姿を写真に収めて、いつかこいつが元に戻る時が来たら見せてやるのも、愉快だろうか。

「そーなのかー」

嘗ての友の、今と過去と、いつかの未来を着に、酒を呑む。

ああ全く、生きるのは、面白い。

遠い遠い昔の話。

神と妖怪の大戦よりも前のこと。

「ねえ。ソレ、食べないの?」

一帯を支配していた大物を、少ない消耗で仕留めた後は、暫く余裕ができる。

時間を置けば次の支配者の座を巡り、縄張り争いが始まるものの、前任者を殺した相手へ即座に喧嘩を売る奴は、そう居ない。

そんな気概のある奴は、既に支配者に挑んで死んでいるからだ。

加えて、危機察知に反応も無し、ということと、下級龍神の死体を椅子に酒盛りをしていたら、そいつはふらりと現れた。

飢餓。

第一印象は、その一言に尽きる。

飢えて餓えて、渴いて枯れて焦がれて願い望む底無しの色。

呑み込み飲み干し喰らい尽くす宵の闇。

方向性は異なるが、私の生存欲求に似た有り様。

その一点以外は同じ部分の方が少なく、同族嫌悪を抱かない、程よく共感できる一線。

同じ様に互いが感じたことを、恐らく同時に直感した。

「食いたければ食え。肉は好かん。」

この蛇も、そこらに群れる獣にでもくれてやるつもりだった」

「勿体無いなあ。お肉の美味しさを知らないなんて、大損じゃない?」

「その分、酒で補うさ」

「なら私は、お肉もお酒も楽しみたいなあ」

「……飲み干すなよ」

「どうかしら?」

「ころころと笑うそいつに酒を渡すと、先ずは大口を開けて龍の死体

を一噛み、呑み込みながら杯を干す。

「うん。美味しい。幾らでも食べられるし呑めるわね」

「比喩抜きで『幾らでも』行けそうだな」

「試してみるかしら？」

「御断りだ。牛飲馬食なら河でやれ」

「つれないなあ。別に、お酒を出してくれない兎さんを食べても良いのよ？」

「返り討ちか腹を下すかの二択で良ければ、かかってこい」

「あははははは」

「……………ふん」

杯を交わし、言葉を交わし、殺意を交わす。

思えば、あの頃は色々、若かった。何十万才の頃か忘れたが。百万超えていたかも知れん。

「次は、もっと強いお酒が良いなあ。

大神の血肉にも負けないくらい、強おいお酒」

「肴は自前で狩って来いよ」

「ええええ……………先に食べ切っちゃう……………」

「知らん」

これも、気が置けない、と言って良いのだろうか。

気遣いも気配りも互いに無用で、遠慮も配慮もまるで無い。

それがどうにも、居心地が良かった。

どちらかがその気になったら殺し合っていただろう。

どちらかが死ねば、それっきりだったろう。

それでよし。

それ以外に無し。

それが、私とあいつ、宵闇と呼ばれる妖怪の、関係だった。

時機が合えば、共に酒を呑む。

敵が重なれば、狩りを競う。

戯れ混じりに、流れ弾を狙い合う。

裏も表も無く、その場その場のその時々で、互いが互いに好きにやる。

共感すれど共有はせず、共生せず、共存せず。

そうして過ごした時代から、永い永い年月が過ぎ。

変わり果てたあいつは、その実、大して変わってもいなかった。

あいつは肉を食い、酒を呑み、そして私も酒を呑む。

日々変化し、得て失い、進化し退化し、それでも尚も、変わらない。

何度目かの乾杯をし、杯を干し、私もルーミアも、笑った。

フエイト・クロウサギ：第4次聖杯戦争編①

ふむ、と、足元に広がる蟲共の死骸を避けつつ、現状を確認する。私の分霊を『殻』にした、アンリマユ、『この世すべての悪』を担う悪神としての召喚。

最も狂気に囚われていた頃の再現。

加えて、狂戦士という『粹』に当て嵌められた靈基。

随分と劣化させられた模造品だ。

召喚に応じる際に聖杯から得た知識で、概ね把握はしていたことだが。

まあ、この状態でも、神秘が幻想と化した世界で細々と長らえている魔術師程度なら、問題は無い。

同じく召喚されているらしい英霊達は、会ってみないことには分からないが。

私と同様、模造品である以上、私を『殺せる』規格外など早々居ないと思うが。

さて、これからどうするか。

事情を理解していそうな蟲は、出会い頭に、衝動的に殺ってしまった。

他者を食い物にした延命なんて同類が視界に入ったので、瞬時に魂まで魔力として喰らい尽くしてしまった。

ついうっかり、思わず。

そうすると、後は私の契約者らしい青年くらいしか居ないのだが、推定契約者は現在、血反吐を吐いて蹲っている。

大丈夫。

ただ少し、魔力回路の代替をしていた蟲まで『不運にも』一斉に寿命を迎えた為に、過負荷で死にかけているだけだ。

私の魔力は先程の蟲を魂喰いしたおかげで余裕があるので、こちら

から魔力の消費を絞っているし、使っておらず錆び付いた魔力回路が
久し振りの稼働に驚いているだけだろう。

結論、特に慌てることもない。

即死でなければどうとでもなるし、少々様子を見てみよう。

「が……！ な……なに、が……!？」

面構えは悪くはない。

生きることにはがみつこうと、自らの拳を握ることができる、良い
目だ。

ただし、些か無理をし過ぎたらしく、義憤を履き違えた私怨で濁っ
ているのが難点だ。

要するに、見飽きた手合い。

敵対するなら殺すし、しないなら興味は無い。

だが、契約者無しには存在できない儂い身としては、ここで彼に死
なれても困る。

消滅までに次の契約相手を探すのが面倒だ。

仕方がない。

「……これ、は……酒、か……？」

諸々の理由で劣化しているとは謂えど、酒造の業は狂気程度で失わ
れはしない。

僅かばかりの魔力を使えば、『苦痛を和らげる酒』くらい、一瞬だ。

ついでに自分用も1杯。うむ。美味い。

私が呑んでいるのを見て、毒ではないと判断したのか、契約者の青
年も恐る恐る差し出した杯に口をつけた。

「……うまい……こんな酒、初めてだ……」

「……」

当然、と返そうとしたが、どうやら言葉が話せないらしい。

狂化の影響か。面倒な。

「バーサーカー。お前が俺のサーヴァントで、間違いないな？」
話せないので首肯で返答。

念話であれば、と思っただのだが、どうやら私の表層心理は「死にたくない」の連呼で埋め尽くされているようだ。

試しに繋いでみたら、契約者は頭痛で吐いてしまった。

いかんな。

思考を分割して理性を切り分けているが、念話まで分割はできない。

いきなりの障害。

私、契約者と身振り手振りでしか意思疎通ができない。何故に狂化しやがった。不具合しか無い。

その後、桜ちゃんとやらを助けたいだの時臣とやらを許せないだの云々語っていたが、興味が無いので聞き流す。

長生きすると、その類いの出来事には、飽き飽きするほど付き合わされている。

家族か友か私自身が巻き込まれたなら殲滅するが、そうでなければ関わる理由も無し。どう転んでも結末は詰まらんだろうし。

とは言え、ここでこうして話し込んでいる間に、件の桜が死んでは、今後に差し支える。

一応、私はこの聖杯戦争で殺されるなど、分霊であっても御免なのだ。

参加した以上は生き残る。できれば受肉して『私』として生きたい。なので仕方なく、働くでしょう。

「どうしたバーサーカー？ どこかに行くのか？」

あの蟲の護りが失われた以上、あんな匂いをさせている娘に、魑魅魍魎が集らない訳が無い。

気配を頼りに向かった先は、幼い少女が怪異に食われる直前だっ

た。

間が良いと言うか、『桜が死に絶望した契約者が自殺し私が消滅する』危機を察知して、手遅れにならないようにしただけだが。

「桜ちゃんっ?!」

で、麻痺した半身を引き摺りながら、少女を庇おうと飛び出す契約者。

宜しい。少しばかり、気に入った。

嫉妬心に歪んだ目よりは、遥かにマシだ。

少女の方は、色々諦めて目前の死にも動じない無感動で面白くないが、それはそれとして。

彼の、守ろうとした意志を、尊重する。

だから、せつかく御馳走にありつこうとしていたところ悪いが、お前達を殺そう、怪異共。

怪異の掃討については、特に語ることも無い。

非戦闘員2人を守りながらであっても、有象無象に遅れは取らない。いい。

むしろ魔力が補給できた。運が良い。

その魔力も少女の部屋を囲う結界に使ったので、収入は微量だが。初歩的な結界にもここまで消耗するとは。狂化を外したい、切実に。

「……特異な才能は、怪異を引き寄せる……」

消費した分は補給しないとなあ、とか、肉は好かんが魔力を喰らうのは悪くないなあ、とか考えていたら、部屋の扉を眺めながら、契約者がぽつりと呟いた。

視線の先は、扉の向こう、怪異に襲われたにも関わらず、部屋に居ろと言われて大人しく従った少女だろう。

詳細は分からなくとも、彼女が持つ才能は、『私達』には見るまでもなく感じ取れる。

本能で、引き寄せられる。

「確か、そうだったな、バーサーカー」

喋れないので、頷いて応じる。

魔力回路の錆びつぷりから、何も知らないと思っていたが、基礎知識くらいはあったか。

「……ああ、思い出した。子供の頃に習ったよ。」

希少な属性や高い魔力を持ち主は、引き寄せた怪異に食われる。

その前に捕らえて『保存』か『加工』できれば、マキリの再興に役立つかも知れない、ってな」

そういうことだ。

要するに。

「桜ちゃんは、自由になっただけじゃ、救われない」

その通り。

「力がない俺には、守りきれない」

それも正解。

「時臣にも任せられない。あいつはもう、桜ちゃんを捨てやがったんだ……!」

それは知らん。

「他の魔術師なんか、伝手はないし、信用できない」

良くて胎盤、悪ければ言うまでも無いな。

「……決めたぞ、バーサーカー」

そして、彼は顔を上げた。

「パスから流れてきたお前の願いは、『死にたくない』。受肉して生きることだろう」

なるほど、これはまた、随分と。

「聖杯を取って、お前を受肉させる。」

だから、桜ちゃんを守る、力を貸せ。

この聖杯戦争でも、それから先でもだ」

濁り歪んでいたのが、良い目をするようになった。

「令呪をもつて命ずる。他の何より優先して、間桐桜を守れ」

承った。我が仮初めの主人よ。

此度の『生』も、なかなか楽しめそうだ。

トウホウ・クロカラス 下の後編

黒兎様と知り合って幾星霜。

私は、何度、この言葉を胸中で叫んだでしょうか。

「わーかってないなー！ コクトの真骨頂は砲撃！

つまり！ 全力全開での撃ち合いこそが本気の勝負だつての！」

「なあに言ってるんだかなあ！ 大量の怨霊を取り込んだ、えげつない

くらいの妖気！ それが圧縮された拳と蹴り！

あれこそ！ コクトの本領さ！ いやあ、あの喧嘩は愉しかったね

！

「ああ!？」

「やるか!？」

「伊吹、星熊。ここで始めたら酒を取り上げるぞ」

「よっし！ 地底に戻ってからケリつけようっ!!」

どうして、なんで、何の因果で、私はこんな魔境に放り込まれているのでしょうか。

戦闘開始直後に周囲一帯更地、いえ、盆地になる爆心地に巻き込まれているんですか。

誰か代わって。代わってください今すぐに即刻。

もう無理。本当に無理。お腹痛い。

「……………射命丸。口に合わなかったか？」

「いつ!?! いえいえいえいえいえ!」

すつごく美味しいです！ 最高ですよ！」

痛む胃に、一気に煽った酒精が滲みませんが、胃痛よりも優先すべきは身の安全です。

杯を干せば、それは良かった、と黒兎様は嬉しげに、手ずからお酌してくださいました。

美味しいのは間違いないですから、腹痛に脂汗が滲みつつも、頬が弛んでしまいます。

そんな私を見詰める、鬼の四天王が内のお二方。

睨みあっていた目付きと威圧感はそのままに、視線が刺さって貫通しそう。

汗が止まらず表情筋は崩壊寸前。

……………死にたくない……………。

辛い時は、自分よりも不憫な相手を探すのが長生きのコツ。

現実逃避上等です。

意識は遠く、地の底へ。

嗚呼、この後、地底でお二方主催の、他の鬼も参戦するであろう大乱闘の後始末を押し付けられる覚り妖怪、お疲れ様です。

地上の上空の安全圏から、気持ちだけ応援します。

願わくば、騒動が落ち着いてから、取材させていただきたいものです。

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”……………！ つうかれたあああ……………つ！！」

「御疲れ様でした、射命丸様」

本当ですよ。本当にお疲れですよ私。

何故によりにもよって私が黒兎様に星熊勇儀との闘いについて取材していたところに、当事者と伊吹萃香が揃ってやってくるんですか！？

更に、黒兎様と本気で闘ったのはどちらか論争カッコ乱闘間際カッコトジなんて、心臓が止まりますよ全く！

お酒は美味しかったですし！？ 八雲紫が囲った空間内で行われた黒兎様の闘いの詳細が聞けて特ダネ頂けましたけれども！？

それにしたって、私が何か悪いことでもしたって言うんですか

ねえっ!?!

報告書と新聞記事をまとめていたら徹夜ですよ！ そのまま仕事ですよ！ 胃が痛い！ チクショウ！

「……哨戒班の者から、緊急の報告が無い限り、私に取り纏めて後程御知らせ致しますので、どうか御休み下さい」

はあ？

なんですか？

お前なんかいなくてもどうにかなるとでも言いたいんですかあ？

もつと自分に権限を寄越せつてことですかああ？

「ゴクト様の闘い以来、風見幽香が苛立っているのは知っているでしょう。」

またいつ、前のように妖怪の山へ殴り込んで来るか分かりません。

だからこそ、彼女が動きそうな時間に、すぐ動けるよう私が配置されているんです。

持ち場を離れる訳がないでしょう」

舐めるんじゃないよ、白狼天狗風情が。

ああもう。

イライラして思考が乱れます。

眉間の皺と目の下の隈が取れなくなったらどうしてくれるんですか。

「……………出過ぎた真似をして申し訳ありません」

「全く然り、ですね。さっさと下がちなさい」

「……………はっ」

鉄面皮の癖して、不満だけは見え見えですよ、未熟者。

はあ……………どこかに、私の苦勞を喜んで引き受けた上で適切に対処してくれる神様仏様のような方、いらっしやいませんかえ……………。

この幻想郷には、仏様はともかく、神様なら何柱もいるのですが、なかなかどうして、世は厳しいものです……………。

……………酔わない程度に、黒兎様から頂いたお酒飲もう……………。

うん。美味しい。少し元気出ました。もうちよつと頑張ろう……。

………とここで、なんで権はさつきよりも不満げというか悔しそう？　な顔をしているんでしょう？

仕事中の飲酒に怒っている様子ではありませんし……相変わらず、意味が分からない奴です。

そんでもってまた別の日。

風見幽香が、遊び以上の『鬼とやったような殺し合い』を求めて殴り込み、八雲紫や守矢神社の神々まで飛び入りした結果、山の一部が吹き飛んだりもしましたが、そんな思い出すだけで「よく生き残れたな私」と心が死にそんな話は置いておきまして。

「コークトさーんっの、ごーはーんー♪」

「……早苗も来られたら良かったのにね……」

「代わりにわたしが来た！」

「二帰って良いですよ崇り神様」

「仮にも神様の大先輩に対して酷くない!？」

「普段の行いを考えてみる、諏訪子」

「コクトまでつれないこと言う……あうう……」

本日は、比較的穏当な面々かつ、養女と秋の姉妹神がいる時点で黒兔様は優しさ大幅増。

平和です……。

つい先日の騒動で大地を操り大暴れしたあざとい蛙が交ざっていますが、鬼やら花やら隙間やら九尾やら吸血鬼やら天人やらに比べれば、圧倒的に平和です！

なんで黒兔様の手料理を私までご馳走になるのか、とか、その結果、何故か八雲紫や鬼の四天王に私が更に目をつけられそう、とか、そん

な考えは今だけは忘れて、私は！ この平和を！ 謳歌します！
せめて今だけでも！

「しっかしまあ、コクトの料理かー。」

昔もたまに、っていうか稀に作ってたよねー。

毎回毎回、うちの子供らで争奪戦になってたけど」

「……………子供？」

「諏訪の国では、美人は基本的に諏訪子が手を出していたからな。
数えきれないくらいに半神半人が居た」

「うっわ」

「最低」

初夜権か何かですか。

噂程度にしかりませんが、聞きしに勝る暴君ぶりですね。

秋の妹神はドン引き。

厄神様は絶対零度。

なお、秋の姉神の方は、「…………でも、その中の誰かが早苗の御先祖様
だし…………」とか何とか。

恋は盲目ってやつでしようか。違う気がします。

「祟り神の息女と謂えども、当時の厄が垂れ流しの私に近寄るのは辛
かっただろうに…………。」

「本当に、良い子達だったな…………。」

諏訪子の夜這いを防いでくれたこともあったというのに、何も返し
てやれなかった…………。」

「……………相も変わらずの鈍ちんがあ」

「二「ああ、母様／＼コクトさん、昔からなんだ」二」

あーはいはい。なるほどなるほど。

また一つ、記事にしたら私の首が物理的に飛ぶ案件が増えましたね
知っていました。

私は、何も、聞いていません、はい。

ちなみに、黒兔様の料理は、暇潰しの手慰みとのことでしたが、十分
に美味しかったです。

お酒との相性を徹底的に高めている辺り、いつもの黒兔様でした。

フエイト・クロウサギ：第4次聖杯戦争編②

酷く興奮めな話をしてしまえば、この『聖杯戦争』という遊戯において、私に敗北は無い。

理由は単純。

負ければ『死ぬ』からだ。

他の模造品サブヴァントに倒されれば当然、契約者を狩られても、令呪で自害させられても、負ければ死ぬ。

例えば、霊基を別の場所で保管し、『一時的に肉体を失っても再構築できる』環境であれば、私の危機察知も鈍っただろう。

だが、この場において、敗北は即ち死。

死に至る道筋は常に分かっているのだから、袋小路で行き詰まらないよう進めば、自ずと受肉へ至ることができる。

私を仕留めたいのなら、因果の固定か反転でもしなければならぬだろう。

そんな能力が行使されることを察知した瞬間に、全力を以て潰させてもらうが。

まあ、私は死なないものの、今の契約者が狩られた後、消滅する前に他の魔術師と契約する可能性も存在しているが、それはそれとして。

わざと死なせるほど疎んじてはいないが、別にわざわざ守るほどでも無い。

私の生存が保障される範囲では協力しても良い、程度か。

桜とやらを守ると決意してからは、それなりに良い目をするようになったので、契約者であることも含めて、他の人間より優先度は高い。

裏切らない限り、彼を主として聖杯を目指すでしょう。

「こんなところにいたのか、バーサーカー」

つらつらと思考を弄びつつ、月見酒に興じていたところに、契約者

が顔を覗かせる。

ほぼ半身不随だった身で、よく屋根の上まで登ってきたものだ。身体を文字通り蝕んでいた蟲が消え、私の酒をしばしば飲ませているから、多少は回復してきたか。

「何をして……ああ、酒盛りか……」

見た目は桜ちゃんと大して変わらない年なのに、好きだなお前も」当然。

人の形を取れるようになって以来、私が酒造りと酒呑みを欠かしたことは無い。

花鳥風月、春夏秋冬、喜怒哀楽に森羅万象、全ては肴。

だから生きるの面白い。

とは言え、今宵については、月見のためだけに屋根の上に居る訳では無いが。

「……ん」

「何だ？ 家の……まわ、り……？」

くいと顎で示してやれば、意図を察した青年が周囲を見渡す。

今は亡き、私が仕留めた蟲爺が基盤を築き、私が引き継いで張り直した結界。

それに群がる、無数の魑魅魍魎。

一心不乱に結界へ突撃し続けるそれらを、妖気で絡めとり、魔力に解いて喰らい尽くす。

契約者の魔力が乏しい分、些か腹が減ったのだ。お前ら残らず私の肴になれ。

「桜ちゃんに惹き付けられた怪異、か。見張りをしてくれただんだな。ありがとう、バーサーカー」

何か誤解したみたいだが、まあ良いか。不都合もあるまい。

ところで、不自由な身体に鞭打って私を探しに来た以上、雑談をしに来ただけでも無いだろう。

用事は何だ、という気持ちを込めて契約者を見詰める。

微塵も表情は動かないし、目が死んでいるけどな、私は。

「あ、ああ、そうだ。

少し良いか？ バーサーカー」

通じた。やるなこの男。

「倉庫街で、サーヴァント同士の戦闘が始まった。

様子を見て、状況によつては仕掛けたい。手を貸してくれ」

ふむ。

成る程。私としては、行こうが行くまいが『死の可能性』に大きな差は無いのでどうでも良いが、彼にも『サーヴァント』私を受肉させて桜を守らせる』という目的がある。

聖杯の獲得に向けて動くのは当たり前か。

首肯を返し、杯に残る酒を飲み干して、屋根から庭へ飛び降りる。

さて、競い合う相手方との初顔合わせの初陣だ。

狂化のお陰で喋ることも出来ない我が身だが、挨拶に赴くとしよう。

複数の英霊に厄を撒き散らして喰う魔力が凄く美味しかった。

他所の契約者や、あと何か剣士セイバーの後ろに居た人擬ホームクルスきからも魔力を頂

き、私は大変満足である。

………うむ。酔っているな、私。

酒には強いのだが、『大量の上質な魔力を喰らう』という初めての経験に、少々浮かれているらしい。

「上機嫌だな、バーサーカー」

おや？ 分かるか契約者。

未体験の美酒や美味は、生の喜びだ。楽しまなければ損というもの。
の。

「時臣のサーヴァントも随分と苛ついていたな。いい様だ」

そう言つて、ふん、と鼻を鳴らす契約者。

時臣……確か、召喚初日に聞いた気がしないことも無くは無いような………忘れた。どうでも良い。

「そんな顔をしなくても、別にもう、あいつを殺すことに拘りはしないさ。」

必要な迷わずに殺すが、そんなことよりも、聖杯を取つて桜ちゃんを守る方が大切だ」

私の訝しげな様子を勘違いしたのか、契約者が何か言っている。

特に問題も無いから良いか。

「それで……お前が即座に撤退したつてことは、そんなに危険なのか、時臣のサーヴァントは」

誰だ時臣。

話の流れから、あの金色男が『時臣のサーヴァント』だろうか、多分。

先程の面々の中でも、一際危機察知に反応したからな、あいつ。

空間ごと引き裂く神剣とは、物騒な代物を引つ提げて来たものだ。

鎧のせいか元の幸運が強すぎるのか、『不運』の効きも悪いし、やり合うなら相応に準備しておきたい。

他の英雄共も、正面から殴り合いをしたら大体『生きるか死ぬか』半々だがな。

霊基は劣化、魔力の容量も小さい、加えて理性は狂化と、酷い有り様だ。

色々と思つたところで、意思疏通の手段が無く、「危険なのか」と聞かれたことに頷く程度しか出来ないのが殊更不便。

具体的にどう危険なのかも、先程の場に居た者で私を殺せる可能性がある連中が何人かも、伝える術すべは無い。

契約者の精神が私との念話に耐えられるくらい強靱なら別だが、二百万年積もりに積もつた狂気ネガイは、毒に過ぎる。

筆談なら、と思つたが、狂化のせいでこれも駄目。

決して、最後に文字を書いたのが思い出せないくらい昔過ぎて、ま

ともに読める字が書けない訳では無い。

無いのだ。

全部狂化が悪い。

狂戦士という『枠』に当て嵌められ現界しているせいで解除も出来ない、洒落にならない欠点だ。

何もかも狂化のせいだ。

「……何か、妙なことを考えてないか？　言い訳というか、何というか……」

言い訳では無い。厳然たるまごうことなき事実だ。



「舞弥、状況は」

『足場が崩れたため、監視を中断しています』

なるほど、こちらと同じか、と男は思考する。

『もう一度登り、再開しますか？』

「いや、その必要は無い」

黒髪に兎の耳飾りを着けた少女……紅い瞳から、おそらくバーサーカー。

彼女から黒い霧のような魔力が溢れた直後、上空に逃れたライダー達を除き、全員が転倒した。

セイバー、ランサー、アーチャー、アサシン。

唯の人間に過ぎない魔術師達だけならまだしも、歴戦の英霊であるはずの彼らが、戦闘中に、それも複数が同時に、転倒するなど有り得ない。

更に、突然足場を失い、咄嗟に体内時間を加速した男の両目は、アーチャーの放った五十を超える宝具の弾雨が、互いにぶつかり合い、制御を外れ、見当違いな方向へ飛び散って行く様も見届けていた。

まさか、これらが全て、単なる偶然のはずがない。

間違はなく、宝具、あるいはそこから派生したスキルによる効果だろう。

そして、マスターとして与えられた能力で見抜いた、バーサーカーのステータス。

狂化ランクが低いのか、筋力と耐久は低い。

A++の敏捷や評価規格外の魔力は注意すべき性能だが、それも今は置く。

問題は『幸運——』、即ち、幸運というステータスが存在しないことだ。

「……バーサーカーの能力は、おそらく『幸運の操作』だ。

発動の瞬間以降、歩くだけで転倒するようなことはないが、迂闊な行動はするな。

車両の運転も禁止する。

アイリスフィールと合流し、深山町の拠点で待機しろ」

部下からの了解を聞くと同時に、男は通信を終え、バーサーカーについて更に考察する。

接近戦を行う場合、強制的に隙を作られるあの能力は脅威だが、遠距離からセイバーの宝具を使えば打倒は可能だ。

周囲の被害を抑えるために状況を整える必要があるが、種が割れている以上、対処不可能な相手ではない。

ならば何故、その初見殺しを、この序盤で使ってきた。

転倒し隙だらけだったにも関わらず、追撃せず退いたことから、何かの意図があるはずだ。

思考しつつ、自身の状態を確認すると、先程から感じてはいたが、魔力が減少している。

セイバーへの魔力供給が増していることから、彼女も魔力が減っているらしい。

戦闘不能になる量ではないが、あの時に影響を受けた全員の分を合わせれば、かなりの魔力だろう。

つまり、理由は、少なくとも理由の一つは、魔力の補給か。

どうやら、バーサーカーのマスターは、魔力に乏しいらしい。

無差別な魂喰いを行うほど、切羽詰まっている訳ではないようだが。

もしくは、マスターが供給できる以上の魔力を使い、何かをしようとしているのか。

これについては、現状、情報が不足している。

セイバーの対魔力を貫き、広範囲のサーヴァントとマスターに影響を及ぼす能力が、多数ある手札の1枚に過ぎないとは思いたくないが、更に奥の手があると想定し、バーサーカーについては保留する。

男は考える。

この戦争を勝つために。

聖杯を勝ち取るために。

世界平和を実現するために。

愛娘が、次の聖杯戦争に参加する必要をなくすために。

ひたすらに、ひた向きに、男は思考する。

「まずは、セイバーの宝具を使える状態にすることが先決だ」

左手を封じた、ランサーを落とす。

今の彼は、幸運が下がっているだろうが、関係ない。

準備し、論理を固め、運が絡む要素を排除する。

運サイコロ任せは不要。

技術によって、計算通りにホテルを爆破した男は、交渉失敗と修羅場不運とデイスコム不運コミュニケーション不運と慢心不運と油断不運により、ランサーを遠ざけ、まさか工房を無視されると思わず礼装を手離していた魔術師を仕留めた。

或いは、ここで婚約者共々死ねたことは、魔術師にとっては、『不幸中の幸い』だったのかもしれない。

トウホウ・カゼホウリ

変な夢を見た。

可笑しな、有り得ない、私^{早苗}ではない『私』^{サナエ}の記憶。

遙かな昔の、諏訪の国での出来事。

「具合はどうだ、サナエ」

「コクト様。ご足労をおかけし、申し訳ありません」

「無理をするな。起きなくて良い。……私が側に居るだけで、今のお前には負担だろう」

布団に横たわる、『サナエ』と呼ばれた私。

諏訪の国に数多居る、洩矢神^{諏訪子}様の娘。

因幡乃黒兔^{コクトさん}のお世話を任されていた女性。

そう……任されていた。

既に『サナエ』の肉体は、その役目に耐えうる強度を保っていない。

「コクト様のお姿を拝見できたおかげで、元気が出てきました」

「……まったく……」

見え透いた嘘だ。

とつくに限界だ。

祟り神の王の血を受けた半神といえども、厄を撒き散らす厄災の黒兎に侍り続けることは、命を削る。

鮮やかな緑色だった髪は、色素が抜け落ち新雪よりも白く。

頬は瘦^こけ、体は窳^やれ、生気は最早、灯火の様。

それでも『サナエ』に後悔は無かった。

常人よりも遥かに永いはずの寿命が、百年も経たずに尽きようとしている、この瞬間にも、悔いは無い。

「私は私の思う様に、満足の行く生涯を過ごしました」

自分の人生に、恥じることは何も無いと。

「どうか、コクト様の生涯もまた、満足の行くものであることを、祈らせていただきます」

最期の瞬間まで、彼女は笑って逝った。

「へー、血と名前の縁かな?」

「縁、ですか?」

うんそう、と頷く諏訪子様。

それはつまり、遠い親戚で同じ名前だから、私、東風谷早苗が、サナエさんの記憶を夢に見た、ということだろうか?

「時間が経てば記憶は薄れていく。

それは本人もそれ以外も、世界に対しても同じだ。

なのに、サナエの夢を早苗が見たってことは……ふむ……」

すみません諏訪子様、名前を呼び分けてもらわないとややこしいです。

そしてそれ以前に、何を仰っているのか、さっぱり分かりません。「やっぱり、この幻想郷って場所が関係してるのかな?」

早苗がコクトと会ったことで、間接的にサナエとの繋がりが濃くなつた可能性も……」

ふうん……と天井を仰ぎ考え込んでしまった諏訪子様。

神々と付き合っていれば分かるが、人間とは時間の尺度が違う方は、こうなると長い。

時として、数日、数週間、飲まず食わず不眠不休で思索に耽ることすらある。

「……書き置きは残して行きましたし、大丈夫、ですよね？」

そんな訳で、悩める諏訪子様は置いといて、私、東風谷早苗、現在絶賛外出中。

特に行き先は決めていないものの、あんな夢を見てしまうと、とにかく外を散策して考えを纏めたくなる。

何となく、ぼんやりと色々なモノを眺めながら漂った方が、良い考えが浮かぶ気がするから。

「……きつと、彼女が私に知って欲しいと思ったから、なんでしようけれど……」

この直感が、多分正解。

サナエさんあの人は、自分の人生を私に知って欲しかった。

何かをして欲しかった。

このままだと、私はその何かをしようとしなかった。

だから、自分の最期を私に見せた。

「と、なると、どうしてあの夢を見せたいと思ったのか、がとっかかりでしょうか？」

ぬぬぬぬ、と唸りつつ、妖怪の山上空を巡航飛行。

不意に、意識が斜め下に引っ張られた。

何だろうと思う前に、そちらへ視線を向ける。

「……何をしているんですか、あの神様」

そうして見つけたのは、首から下をすっぽりと落ち葉に埋めて、すやすやと眠る静葉さん。

すぐ傍に降りても、目を覚まさない。

寝顔を覗き込んでも、まだ起きない。

さらりとした髪を撫でて、眠ったまま。

軽く頬に触れると、ようやく、瞼を開いて、私を見てくれた。

「……………さなえ……………」

ぼんやりとした、眠たげな、まるで童女のような、無垢な瞳が、私を貫く。

脳髓に電流が迸る。

理解した。

理解した。

理解した。

彼女わたしは。

私サナエは。

この魂私たちは。

触れたかった。

寄り添いたかった。

共に在りたかった。

優しく、独りでも平気な顔をしていて、だけど寂しげな貴女。

貴女に触れたかった。

貴女を抱き締めたかった。

大好きだと。

愛していると。

貴女は、愛されているのだと。

伝えたかった。

伝えたかった。

伝えたくて伝えたくて伝えたくて、でも叶わず逝って。

重荷には成れないと諦めて。

因幡乃黒兎
コクトさんを諦めてしまった彼女は、静葉さんサナエに対し踏み込みきれない私を、焦れつつく思ったのだろう。

何してるんだと、背中を押したくて、仕方が無かったのだろう。

決意より早く、体が動いた。

ぐいと押された様に、上体が傾く。

「……え？　へ!?　さ、早苗っ!?!」

始めは軽く。

掠める様に。

唇に触れる。

当然、驚かれたけど、拒絶はされていない。
だったら、もう一度。

「ちよっ!?!　待っー!?!　ん、んん!?!」

舌で唇を開き、歯列をなぞる。

嫌なら、拒否するなら、いつそ噛みきつてと。

「ふわ……!?!　ん!?!　あっ!?!」

歯が緩んだ隙間から、舌を絡める。

彼女の舌を絡めとる。

上顎を。

舌下を。

頬の内側を。

舐めとり、味わい、舐りねぶ尽くす。

彼女が身悶えする度に、身体を覆っていた落ち葉が、はらはらと崩れる。

かさかさ音が鳴る。

それにすら悦びを覚えるのだから、ああ本当に、私は全く、彼女に

イカれている。

弱々しく私の胸に添えられた白魚の様な指先。

「お嫌でしたら、もっと強く押し退けてくれないと、分かりませんよ？」

唇を離して、告げる。

私から垂れ落ちた唾液が、半開きになった彼女の口に飲まれる様が、酷く淫靡だ。

堪らない。

「自分じゃあ、歯止めなんて、利きませんからね？」

三度目の口付けは、古い言葉の『口吸い』そのままに。

舌を、唾を、叶うなら貴女の全てを、吸い上げる。

飲み込む。

甘い。

甘露という言葉を感じた。

私から溢れた唾液を、今度は彼女が、こくりと飲み込む。

完全に理性が焼ききられたのを感じながら、私は遂に、彼女の服の下へと手を滑り込ませ……。

「……………早苗」

やってしまった。

「…………私ね、ああいうことは、『合意の上』でのことだと思っの」

「はい」

正座する私に、背を向けて座る静葉さん。
完全に顔をそむけられて表情が分からない。

お互いに、服はもう着ている。

なお、下着は着けていなー……。。

「早苗？」

「はい」

後ろめたい時って心が読まれた気になるのは何故だろう。

やってしまった。

やり過ぎた。

むしろやったと言わなきゃ……。。

「早苗？」

「はい」

言い訳も申し開きも御座いません。

「……………私のこと……………好き……………？」

「愛しています」

あ、これ勝ちましたね。

トウホウ・ナガシビナ

自身の産声を、覚えている者は、少ない。
それは人に限らず、神や妖怪でも。

自らの誕生を記憶している者は、とても、少ない。
私も、そうだ。

最初に見た光景が。

自我に目覚めた瞬間が。

水中だったか。

川を揺蕩っていたか。

岸部が上がって空を見上げていたのか。

覚えて等、いない。

それでも。

私の。

その始まりを。

覚えている。

—— 貴女の名前は、鍵山雛だ。

自我より早く厄神としての役を知っていた。
流し雛として受け取った厄は既に在った。

ああ、だけど。

私は貴女に出会い、貴女と言葉を交わし、貴女の手を取り。

そうして漸く、漆黒を理解できたのだ。

「わわっ!? その子だれ!? コクトさん!?」
「……少しは静かにできないのかしら……」
「なに。賑やかなのは割と好きだ」
「だつてさ! お姉ちゃん!」
「……………はあ……………コクトさんが甘やかすから……………」
第一印象は、賑やかな妹と、落ち着いた姉。
「それーよーりー! その子! どうしたの!?!」
「拾った」
「直球!!」
「もう少し……………何かないんですか?」
「育てる」
「もう一声!」
「仲良くしてくれると、嬉しい」
「任せて!」
「……………ええ、そうね……………仲良くできたら、素敵なものね……………」
幸いかどうかはともかく、今に至るまで、その印象は変わらない。
「成り立てだが、新米の厄神だ。」
先達として、色々と教えてほしい」
「おお! ついに私たちにも後輩が!」
「……………見たところ、物静かな子みたいだし、安心かしら……………?」
うちの妹に感化されない限り……………」
穰子はいつだつて賑やかで、静葉はいつも落ち着いている。
「よろしくね! ……えっと、名前なんだっけ?」
「まだ聞いていないわよ……………」
「……………かぎやま……………ひな……………」
「雛ちゃん! よろしく!」
「元は流し雛だ。良くしてやってくれ」
「よろしくね、雛……………私は秋静葉……………こっちのうるさい子の姉よ」
「秋穰子! このボソボソ喋ってるのの妹よ!」

いつも、いつだって、変わらずに。

「よ……よろしく……おねがいします……」

素敵で大事な、私の姉達。

「御息女、ですか……？」

いつもおどおどしつつ、母様に気に入られている烏天狗。

「ふうん……よろしくね？」

胡散臭い妖怪の賢者。

沢山の妖怪と出会った。

「コクトの娘……へえ、なるほどねえ……」

神にも会った。

「これからよろしくお願いします！」

人間の知り合いすらできた。

「……もうすっかり、私よりも背が高くなったなあ……」

そして、私の、小さく優しい、母様。

「ねえ、母様……」

「んあ？」

ビールから離れた口の周りの泡を、啄むように舐めとる。

「わたし、本当に、幸せ」

いつも眠たげな尻尾を下げ、滅多に動かない頬を弛め、微笑む貴女。

「ああ、それは、何よりだな」

願わくば、永遠に、誰の目にも触れさせず、貴女を抱き締め続けて
しまいたい。

そうしてきつと、いつの日か。

貴女に看取られて、わたしは死ぬの。

第里話

「あっはっはっはっはー！」

「……笑いすぎだ」

目玉付きの不気味な帽子がずり落ちそうになり、ギョロギョロと視線を踊らせるくらいに、腹を抱え、かと思えば仰け反って、大笑いする諏訪子。

こん畜生め。

こっちは大変だったんだぞ。

「そりやーびびるよ！ あんたが空から降ってきたら、人里全体全力警戒態勢だよ！」

分かっとなるわ。

「……だから、これまで極力近付かなかったんだ……」

その挙げ句が、あの有り様なのだから、全く以て、世は儘ならんものである。

「……不味い、よなあ……」

ヤバイマジヤバイ。

そんな、語彙が脳死した感想が頭を埋める程度には、不味い状況だ。

いつもながら、風見と『有効打一発勝負』をして引き分けた。

これは良い。

互いに砲撃を相殺し合い、互いに手傷を負って決着した。

これも大したことではない。少々左腕が裂けているが、致命傷には程遠い。

問題は、その砲撃の勢いを殺す為、全力で後方へ自身を弾き飛ばした際、『後ろに何かがあるか』を確認し損ねたこと。

まあ、悠長に確認していたら死んでいたもので、仕方がないのだが……。

「……………厄災の黒兎が、人里に何の用だ」

着地点が、人里の寺子屋真ん前、というのは、しくじったなあ。

どうしよう？

黙っていても仕方がないし、とりあえず対話を試みようか。

「人里の守護者、人間と白沢ハクタクの半人、で間違いないか？」

名前は忘れたが、確か射命丸がくれた新聞に書いてあった、気がする。寺子屋の教師か何かだったはず。

一応、生まれはどうあれ人間寄りだろうから、半妖ではなく半人と呼んでおく。

「上白沢慧音だ。それで、人里に、何の用だ」

場所を確認して直ぐ、こっちはできるだけ妖気を押し込めたというのに、臨戦態勢で髪を逆立てる上白沢とやら。

解せぬ。

「……………風見幽香との『遊び』で相討ちして吹き飛んだ、と言えば、信じるか？」

「真偽はどうあれ、甚だ迷惑だな」

ぐもつとも。

さーて、どーしたものかな。

「…………よし。大人しく迎えを待つから、居座れる場所と軽い術を使う許可が欲しい」

「はい……っ！」

考えた末の結論。じつとしよう。

揉め事は面倒臭い。

私が単独で動くのは、たとえ帰るだけにせよ、あちらも問題がある。多分。

なら、『人間に信用されている知り合い』を呼び出して、一緒に帰れば良いはず。……良いよな？

「地べたでも私は構わんが、往來の邪魔だろう？ 良い場所はないか

？ あと、伝言用の使い魔にするから、適当な鳥をくれ」

「……………え、ええつと……………それでしたら……………」

……私としては、至極常識的な対応をしたつもりなのだが、途端に慌てふためく上白沢。

何だどうした私何かやったか？

俺何かやつちやいました？ とかいうやつなのか？

いや何だそれは。変な記憶が湧いているぞ私。

「空から降ってきて、着地の衝撃で道の真ん中を陥没させ、砂埃を吹き飛ばす不吉極まる妖気を放った、危険と名高い妖怪が、大人しくすると言い出しました。

どう思うかしら？」

「何を企んでいるんだコイツ」

「それが貴女よ」

成る程。

それはともかく。

「見ていたのならさつきと出てこい、紫」

「面白い見世物だったから、つい」

見世物じゃねーぞオラーテメー。

……さつきのといい、相も変わらず、時折珍妙な台詞が脳裏を過るな。これも前世か？

まあ、とにもかくにも。

「私はもう帰る。道を開いてくれ」

「はいはい」

「まっ……待ってくれ……!」

早いところ退散しようと、紫が開いた隙間に入ろうとした私の背後から、上白沢の呼び掛け。

「どうした?」

無視する気分でもなし、振り返れば、先程以上に狼狽した上白沢。本当にどうした。

相手が紫だから信用できんか?

雛か秋の姉妹神かが迎えに来るまで待たせるつもりか?

「……貴女は、人間に害を及ぼす気が、ないのか?」

で、何かと思えば、分かりきった問い。

霊夢なら、質問ではなく断言だったのだが、と考えたところで、『例外』を無自覚に期待していた自らの浅ましさに失笑した。

ああいう娘は、『例外』だからこそ良いのだろうか。

ああ、全く、詰まらない。

「放っておいても、『全ての不運の元凶』として畏れられるのに、手間をかける意味がないだろう?」

どうせ、どいつもこいつも、見ず知らずの『脆い』連中は、私に畏怖を向けるのだ。

今更、年甲斐もなく畏れさせ、妖怪としての格なんぞ高めて、何になるのか。

全く、ああ、全く、詰まらない。

改めて『半人』に背を向け、私は隙間を潜り、帰路につく。

【トウホウ・ヒトノモリ】

「八雲紫……」

声は、自分でも笑ってしまいうくらいに、震えていた。

「あいつは、何なんだ……？？」

未知に出会い、しかし、知っている感覚に、怯えていた。

「彼女自身で言っていたでしょう？ 『全ての不運の元凶』よ。

貴女も言ったでしょう？ 『厄災の黒兎』よ」

愉しげに嘲笑うその台詞が、耳を通り抜けていく。

あんな存在を、私は知らない。

あの恐怖を、私は知っている。

あれは、理不尽だ。

そんなことを望んでいなくとも、努力に努力を重ねても、無情に降りかかってくる悲劇だ。

いつの時代でも、どこの誰に対しても、平等に襲い掛かる不条理な不運だ。

そして、理解した。

そんな『よくある恐怖』に身をすくませ、踏み込めなくなった時点で、私はもう、奴の視界に、入っていない。

トウホウ・ヤクサイノ

「霊夢、霧雨、十六夜、早苗……それと、西行寺幽々子嬢の従者だったか」

「……魂魄妖夢、です」

「半人半霊か。……良いだろう、今は『人間』と見なす」

博麗神社の境内で、因幡黒兎は、ゆるりと頷く。

「伊吹とレミリアは、どうする?」

「面白そうではあるけどねえ」

「昼間だし、見物させてもらおうわ」

縁側で寛ぐ鬼と吸血鬼へ向き、そうか、と一言。

僅かな仕草一つ、言葉一つの度に、極限まで練り上げられたと目で分かる妖気が、不気味に蠢く。

普通の魔法使いである私、霧雨魔理沙が触れれば、即座に心臓が止まると予感——いや、確信させられる、『不運』の妖気。

「咲夜、全力を尽くしなさい」

「かしこまりました、お嬢様」

レミリアに命じられた咲夜は勿論、霊夢でさえ、とつくに臨戦態勢。霊夢でさえ、と言ったが、正確には、誰よりも早く、萃香やレミリアが、因幡黒兎の接近に気付く以前に、こいつは得物を構えていた。

いつもだったら、明らかな異変が始まって、なかなか動こうとしないこいつが、誰よりも早く。

「異変を起こすことにした」

張りつめた空気の中で、今更に、黒い兎が告げる。

「私はこれから、『博麗の巫女』を落とし、幻想郷全域を、『誰も死ねな

い』程度に不運にする」

五人を見据え、不吉が告げる。

「他の四人は狙わないが、流れ弾は知らん。結界無しで当たれば死ぬから、注意しろ」

翼の様に妖気を広げ、黒色が告げる。

「逃げても良い、立ち向かっても良い、『博麗の巫女』の守りに撤しても良い」

噛み締める様に、告げる。

「選択を……人間を妖怪に、見せてくれ」

まるで、迷子のガキみたいな面で、そいつは宣戦を布告した。

「ちっ……い」

「すまんが、それを使われると詰むのでな」

何かの術を発動させようとした霊夢が舌打ちした瞬間には、既に黒兔が眼前に踏み込んでいた。

空間が破裂したような音を響かせ、目にも映らぬ蹴りを結界が防ぐ。

「良い勘だ」

「そりやどうも……い」

すぐさま下がること咲夜のナイフと妖夢の斬撃をかわし、退路を塞ぎに私と早苗が撒いた弾幕を『跳ね返し』て、黒兔が笑う。

体勢を立て直した霊夢も咲夜と妖夢の間を縫って針を飛ばすが、私達が放ち既に反射された弾幕ごと、前衛二人が球状の結界に包み込まれた。

「だが、これでもう『飛べ』ない」

最初の蹴りは防げて、妖気までは防ぎきれなかったのだろう。

霊夢にまわりつく『不運』は、全身を鎖の様に縛り付けている。

「……大妖怪ともあろうものが、たかが人間を随分と警戒してくれるじゃない」

「人間を侮って死んだ者も、相手を格下と慢心して死んだ者も、飽きるほど見てきたよ。」

そして、『使われたら詰む』能力の持ち主も、神々が当たり前前に闊歩していた時代には、幾らでも居た。

で、あれば、だ。そもそも『術が発動できないくらい不運』にしてしまえば、対処はできる」

最善の対策は戦わないことだがな、と、黒兎は肩をすくめる。

その傍ら。

球状の結界から、刀の切っ先と、その周囲を取り囲む何本何十本ものナイフが突き出した。

「突かなければ破れないなんて……未熟でした……。次は斬ります」

「出られたのだから良いでしょう。このまま終わったら、お嬢様に顔向けできませんもの」

貫かれた場所を起点に、粉々に砕け散った結界を振り払い、咲夜と妖夢が戻ってくる。

……それ破るの、一年かかったんだけどな、私……。

「さて……流石に、このまま勝とうと言うのは、自惚れが過ぎるな」

再び五人揃った私達を見渡し、黒兎が呟く。

その声音は、とてつもなく、不吉。

「少しばかり、ズルをしようか」

直後、その上半身から、妖気が消えた。

残らず、足腰に集約された。

およそ急所と呼べる部位の殆どを、さらけ出した。

私の弾幕ですら、『致命傷になる可能性がある』程に、防御を捨てた。

「……………ちっ」

舌打ちを鳴らしたのは霊夢だったが、きつと全員、もちろん私も、悪態をつきたい気分だ。

幻想郷の住民なら知っている。

因幡コクトに、『死ぬかもしれない』攻撃は、当たらない。

——さあ、踊ろうか、『人間』——

フエイト・クロウサギ：第4次聖杯戦争編③

合間にあつた出来事としては、魔術師キャスターの模造品サイヴァントが子供を拐おうとしていた場面に遭遇し、相手の契約者マスターごと『魂喰らい』尽くしたことがらいか。

放置しても良かったのだが……別に子供だからと助ける義理も、今更に良識を掲げられる身でも無いのだが……。

……拐われそうになっていた少女が、少しだけ目元が雛に似ているな、と思つたら、体が勝手に……。
ついうっかり……。

なお、その際、契約者の知人らしい、勝ち気そうな少女が私の『食事』を目撃し気絶してしまい、呼び出した母親と契約者が何か話していたが、置いておこう。

人妻はやめておけ、と忠告するほど親しくもないしな。
そもそも、人妻への横恋慕くらい、どこぞの崇り神の王に比べれば健全健全。

私に関係ない範囲で好きにするが良いさ。

そんなこんなで、今宵も私は、月見酒に興じつつ、屋敷に群がる魑魅魍魎を魔力として喰らい、ついでに覗き見している連中へ厄を流しておく。

経路パスを通じて、相手の契約者やその周囲にも厄をお届け。
できれば私と無関係なところで殺し合つて対消滅しておくれ。
その方が楽だから。
うむ。

今夜も酒が美味しい。

「……バーサーカー？」

酒盛りがてら一仕事終えて屋根から降りたところで、幼子と遭遇。珍しいな。

何で部屋の外に居るんだ？

「……………トイレ」

廁か。

何かすまん。不躰だった。

「……べつに、いいよ」

そうかそうか。

ところで、何故この娘、私と会話が成立している？

「……かお見たら、わかるよ」

凄いなおい。

自分も無表情の癖に。

いや、自分も無表情だから、私の表情が読めるのか？

「……………へんなバーサーカー」

やかましい。

変って言う方が変だ。

表情固まっているのに、少し楽し気にしおって。

……………ふむ。

今後のことを、特に、この聖杯戦争後も、護衛として契約者としての娘を守ることを考えれば、今のうちに多少交流しておくべきか？

令呪で守護を命じられているし。

しかしなあ……………私の交流方法、酒を飲ませるか飯を食わせるかの二択しか無くてなあ……………。

狂化程度で酒造は封じられなかったが、料理はどうだろう？

最後に食事を作ったの、座に行く何千年前だったかな？

ちよつとした菓子だったら、まだ作れるだろうか？
失敗したら自分で食おう。微量でも魔力の足しにはなる。

それから、だらだらとして暫く。

「……………」

危機察知に反応、という用語弊があるが、変化あり。
具体的には、暗殺者^{アサシン}に殺される可能性が、消滅した。

要するに、奴……複数に分かれていたから、奴らと呼ぶべきか？
とりあえず、また一騎脱落した様だ。

恐らく、関われば死ぬ可能性が高かったので放置した王達の宴に
ちよつかいをかけたのだろう。藪を突いて竜でも出したか。

序盤に消えた槍兵^{ランサー}と、私が『喰った』魔術師^{キャスター}と合わせて、これで三
騎。

残るは私を含めて四騎か。

上手い具合に噛み合ってくれば楽だが、もう一騎落ちれば、『私自
身を含めて』私が受肉するのに十分な魔力が聖杯に溜まる。

さて、そうなれば、いよいよ終盤。

少しばかり、『視て』みようか。

菓子作りの手を止めて、危機察知に意識を集中する。

……ふむ……契約者^{マスター}を教会に行かせるのは危険か。接触しようと
してきた者は潰しておこう。

後は……いささか先だが、騎兵^{ライダー}が消える可能性が高いな。

良し。

引きこもろう。

果報が勝手に来るのなら、無理も無茶も要らん。

頃合いを見て大聖杯に向かえば、それで終いだ。

大聖杯の位置も、『無闇に手出しをすれば死ぬ可能性がある』時点で把握できる。

楽ではあるが、『死なないようにすれば勝てる遊戯』は、あまり楽しめんな。

第災話

「十年前、私の喧嘩を貰える人間は、何人居た？」

「ええつと……当時の博麗の巫女を除けば、分を弁えない退治屋くらい、ですかね？」

「ああ、そうだ。……まあ、後者は十年前の時点で、私に挑んでくる者等、誰も居なくなつたが」

せつかく生かして人里に届けたにも関わらず、運悪く全員死んだらしい。

私に関わつた以上は、不運ばかりはどうにもならんが。

「では、十年後であればまだ、霊夢達も現役だろう。

二十年三十年程度なら、動けるだろう。

ならば、四十年、五十年、百年後は、どうだ？」

「それは……」

「居ないだろうさ。居ても精々、一人二人。

こんなにも、私と競える『人間』が居る時代は、今以外にあるまいよ」

霊夢達にも配つた、秘蔵の酒を、一息に煽る。

ああ全く、酒が美味い。

「だからこそ、今のうちに異変を起こされた、と？」

「今しかなかつた。全く情けないことにな。私はやはり、『人間』と関わらずにはいられないらしい」

迷惑極まりないと、自嘲する。

永く生きれど、『誰か』を求めた性根は、まるで変わらない。

実に情弱。なんたる不様。

「……しかし、これが私だ。私は『これ』だ」

死にたくない、と泣き喚ぎ、独りは嫌だ、とただをこねる。

不様に惨めに情けなく、私は今日も、『私』を生きる。

私、因幡コクト、厄災乃黒兎、前世で人間の男だったことを、確かそうだった事実だけを覚えている者にとつて、『人間』とは、何か。少なくとも、私が求める『人間の輝き』等、前世の私は持ち合わせていなかったらう。

死にたくない一心で今此処に在る、という一点は特異でも、それ以外に特筆すべきものは持たなかったはずだ。多分。

結局、『触れれば壊れる儂いモノ』に、『それだけで終わらない強さ』を要求する、単なる趣味なのかもしれない。

もしかしたら、他の理由があるのか。

何百年か何十万年か過ぎて、あの時の私の本心はこれだったのかもしれないと、何かを思い付く可能性はあるが、それは今現在の私には関係無い。

人恋しさ等と情けない解答に至ったとしても、そんなくだらなさもまた、情弱な私らしくはある。

つまるところの結論は、十六夜と酒造を語り合い、霊夢に自然体で接せられて、早苗と家族ぐるみの付き合いをし、霧雨に負け、そして、当たり前前に、人里の守護者に拒絶にされ。

我慢が利かなくなっただけなのだろう。

「当たらなければどうということも、だったかな。確か」

致命傷になりうる急所から、妖気も妖力も弾いて、『常人より多少丈夫』程度の身体を晒すことで、あらゆる攻撃を『死ぬ可能性』にする。

我ながら、非道で外道で邪道である。分かってやっているが、
とにもかくにも、こうなればもう、私に攻撃は当たらない。

普段よりも激増した情報量に脳髓が軋むが、伊吹とやり合った時に比べれば、耐えられる範疇。

避けて避けて避けて、隙を見て両脚に纏う妖力と混ぜた厄を霊夢に放つ。

ナイフを避け、刀を避け、奇跡的な偶然を事前に読んで避け、その他諸々の弾幕をすり抜け、厄弾を放つ。

霊夢の結界が壊れない、結界で遮断しきれない厄を込めて、少しずつ不運にしていく。

いずれ、霊夢が『飛べなく』なれば、その時点で私の勝ちになる。だがそれでも、諦めないでくれ。

お前達が、人間の英雄が、化物ワタシを前に、膝を屈して、頭を垂れると言うのなら。

私は、最早、『人間』に期待できなくなる。

お前達の攻撃は、私に当たらない。

私の攻撃を霊夢は避けきれず、お前達は霊夢を守れない。そうできる瞬間を狙って撃っている。

それでも、尚。

諦めず、諦めず、諦めず。

どうか妖怪ワタシに、人間ヒカリを、魅せてくれ。

たかが不運に負けないのだと、立ち上がってくれ。

お願いだ。

そうでなければ……。

お前達でも足りないのなら……。

私は……。

——直後、『霧雨に殺される可能性』が、消滅した。

「……………え……………」

馬鹿な。

有り得ない。

嘘だ。

私は撃っていない。

殺していない。

死んだはずない。

流れ弾か？

私が避けた弾幕に巻き込まれた？

不運のせいで箒から落ちた？

嫌だ。

違う。

駄目だ。

私は、霧雨を、霧雨を……………霧雨を……………。

ぐしゃぐしゃに掻き乱れた思考のままに、霧雨の気配に向けて振り返る。

まずは確かめる必要がある。

気配だけでは不確かだ。

直接見なければと見開いた視界の中央。

全身を汗で濡らした霧雨が、にやりと笑った。

その隣には十六夜が居て。

瞬きもしていないのに、二人が消えた。

時間停止での移動。

直上に二人の気配と、魔力の高まり。

未だ、危機察知に、『霧雨に殺される可能性』は、現れない。

「弾幕は……………パワー……………だぜ……………！」

高速で降り注ぐ星の雨は、幾つかが、射線上に居た羽虫に当たり、淡くほどけた。

辛うじて『弾幕』として体裁を保っていられている脆さ。こんなもの、何千受けても、死にはしない。死ぬ可能性が無い。

それでいて、弾速、弾数、密度は、私が『妖力を纏わなければ耐えられない速度』で逃げる必要がある程。

今の『常人より多少丈夫』な有り様では、少し駆ければ身体が壊れる。

厄を纏った蹴りによって、弾幕に触れずに相殺することも考えるが、それをすれば、余波だけで霧雨と十六夜が死ぬ。

「……先程までの貴女に、こんなにも繊細かつ大規模な魔力運用はできなかつたはずだが……」

全く、見事。

これは、詰みだ。

「存外に悔しいじゃないか……『人間にしてやられる』のは……!」

嗚呼、畜生。

楽しいな。

くそつたれめ。

土砂降りの星屑が、幾つも幾つも私に当たって、碎けて淡く消えて行く。

火花の様に、飛沫の様に、花火の様に、彗星の様に。

「……………ああそうだな……………満足だ」

僅かな時間を、輝き消える。

【トウホウ・クロカラス 外伝】

異変の顛末を語り終え、黙々と盃を干す黒兎様を眺めつつ、ぽつり、
眩く。

「……もしもコクト様が勝っていたら、どうなっていたんでしょうか」
「無論、宣言した以上は実行するだろう。妖怪だからな」

まさか聞こえるとは、況してや応えが返ってくるとは思わず、つい
間抜けに呆けてしまう私を横目に見て、黒兎様がくすりと笑う。

「まあ、『不運にも死ねない』程度の縛りで、広域に拡散するからには、
そこそこの実力者には大した効果が無いし、運命だか寿命だかで死ぬ
のは止められん、ささやかなものだな」

「幻想郷全体が不運になる大異変を、ささやかとか仰らないでいただ
けますか？」

わざとらしくジト目を向ければ、これまたわざとらしく、すまんす
まん、と笑われる。

……あー良かった……今の対応で正解だった。

「そうは言うが、一度霊夢達を倒しても、『完全に準備を整えた博麗の
巫女と再戦』するよう紫に頼まれるのを蹴らない限り、死ぬ可能性は
大して無い、本当にささやかなものだ」

目を細め、黒兎様が語る。

感覚的にはあるが、まだ言葉は続くのだと、分かった。

「寧ろ、先程の『弾幕ごっこ』で、誤って誰かを殺し、その報復に殺さ
れる可能性の方が、高かったさ」

そう言っつて、それっきり、再び黙々と、盃を干す。

今度は何も応えられなかった。

沈黙が正解かも分からず、黙っているしかなかった。

私には、この御方が殺される姿なんて、想像できない。

彼女が生きていることに飽きない限りは実現しないのだから、そんな場面は想像する意味が無い。

だが、しかし。

「何度目であろうと、見知った相手に恨まれ殺される瞬間は、些か堪える」

想像もできない、したくもない情景を、彼女は何度も、何十も、何百何千、或いはもつと、見てきたのだろう。

それこそ、想像もできない、永い日々の中で。

それは、どんな時間だったのか、百数十万年の生も、死を事前に知る能力も無い私には、まるで想像できない。

八雲紫や洩矢諏訪子と違って、私では、この古き大妖怪を、推し測ることしかできないのだから。

「とある現人神の仇として、とある紅葉神に刺し違えられるのを『視た』時は、不謹慎ながら吹き出したが」

「すみません。その話、もう少し詳しく」

「あの娘らが拗れん程度にな。野次馬報道で恋路を邪魔して、兎に蹴られたくはあるまい？」

「もちろん大丈夫です心得ておりますとも」

だから、分かる範囲で、分からなくても問題ない範囲で、私は今日も取材して、黒兎様を知っていく。

番外編：続トウホウ・ダイヤモンド序文

結論から言えば、その女は、生まれてくるべきではなかった。

「善悪の分けとは、結局のところ、何に満足するか、でしょう」

「何に満足するか、ですか？」

「誰かを喜ばせること、誰かの役に立つこと、負の感情を和らげること
に満足感を得るのなら、善性。

他者の苦痛、悲哀、憤怒、憎悪、絶望に満足感を得るのなら、悪性。
突き詰めてしまえば所詮は、その程度の差異ですわ」

「その分け方なら、姉様は善ですわね」

「まさか。どうして、そう思うのです？」

「姉様にとって、他者の苦痛なんて、悪神として喜んで見せているだけで、本当はどうだって良いのでしょうか？」

「そうですね。退屈しのぎ程度になる、とは思いますがよっ。」

「母様が喜ぶことや、役に立つことの方が、楽しそうです。」

「だから、誰か、ではなくても、母様に対してであれば、姉様は善になります」

「一つ見落としていますわ」

「見落としてですか？」

「先程は言わなかった悪性の条件。自身の利益の為ならば、他者を顧みない。

わたくしにとって、母様の喜びという、わたくしの利益の為なら、他の全ては、利用するだけのもの」

「私のように、です？」

「ええ、その通りですわ。

ですから——……」

——しっかりと、母様役にを喜立っばせて下さいね、可愛い雛。

母の胎内で、初めて自己を認識した瞬間。

それは、世界を滅ぼそうとした。

一息に吹き消すには、流星に、未だ出力が足りない。

だから、先ずは周囲を呑み干して、それを燃料に、更に広範囲を呑み干し、肉体を完成させ、更に広範囲を呑み干す。

それを繰り返しせば、四半刻もかければ、この世界は終わる。

後は、同じく『自身の世界を滅ぼし終えた』平行世界の己と同期すれば、比較的近い千の世界、小千世界は順に呑み込める。

次は中千、そして大千。それで御仕舞い。

しかし、それは実行されなかった。

あらゆる平行世界において、女は諦めた。

女の発生理由、穢れ尽くした胎盤に祟り神の王の種を受けた、極限の陰。

いずれの可能性においても女の母であった兎妖怪は、『殺される前に己の腹を撃ち貫き我が子を殺す』と確定していた。

女は諦めた。

困惑という機能を備える以前だったからか、そういう結論ならば仕方がない、と納得した。

或いは、その機能を習得した後であっても、結局は同じ解答に至っただろうか。

未成熟な身体では、母の攻撃に耐えられない。

そして、成長した後では、母は女を、『殺せなくなる前に』殺す。

故に、女が永らえようと思つたら、『いつでも母になら殺せる状態』を維持し続けなければならぬ。

どれ程に心通わせても愛しても、『死なない』為にであれば、母は迷わず女を殺す。

どれ程に後悔することになっても嘆くことになっても、その瞬間は躊躇わずに殺す。

強くなりすぎれば『油断していても殺せなくなる』から、意図的に力を制限しなければならぬ。

そうしなければ、強くなる前に殺される。

母が死を受け入れるまでの悠久、女は、世界を滅ぼせない。

たのしい。

自然と、そう思つた。

言語機能を取得していなかった為、動物じみた感覚的なモノではあつたが、それに似た感情を抱いた。

埃を払う様に滅ぼす筈だった。

己はそういう存在だから、消し去るつもりだった。掃き捨てる、つもりだった。

それが、留められた。

死にたくて己を産み出した癖に、この世界は、まるでこの母体の様に、『死にたくない』と足掻いている。

他の何者であつても、殺し合うのなら、女は相手を殺せる。

単純に、相手より己を強く設定してしまえば勝てるのだから。

だからこそ、『その前に殺す』母は、女にとっての天敵で、そして――
……………。

——この脆く儂い三千世界において唯一無二の、女が愛することを許される存在だった。

それを認識した女の歓喜は、余人には推し量れるものですら無い。

孤独な放浪の果てに抛り所を見つけた旅人の喜びですら、到底、足りない。

「愛していますわ。わたくしの、御母様」

それが、産まれた意味を保留した女にとっての、存在を継続してお

く理由。

——いつか貴女が死ぬ時は、十億の世界と、それら各々の平行世界、
悉くを殉じさせよう——

結論を繰り返すなら、その女は、生まれてくるべきではなかった。